

武氏祠画像石の基礎的研究(三)

— Michael Nylan “Addicted to Antiquity” 読後 —

黒田 彰

- 一、定庵類稿
- 二、学斎佔畢
- 三、学斎佔畢と隸釈
- 四、fig. 5 fig. 6 の問題
- 五、隸統卷六
- 六、朱彝尊
- 七、唐拓の流伝
- 八、翁方綱
- 九、黄易
- 十、むすび

小稿は、同題の拙稿(一)(二)(『京都語文』12、平成17年11月、『総合人間学叢書』3、東京外国語大学AA研、平成19年9月所収。また、拙著『孝子伝図の研究』(汲古書院、平成19年)I二一に再録)を受けるもの。Michael Nylan “Addicted to Antiquity” (Recarving China's Past 所収、Princeton University Art Museum, 2005) § III, The Wu Liang Pic-torial Stones: The Literary Evidence を批評したものである。ニラン女史は、その論文において、中国の誇る文化財、後漢武氏祠画像石に対する偽刻説を唱え、世界的な反響を呼んだ。小稿が今回批評に取り上げたニラン論文第三章は、武氏祠の中でもその中心をなす、武梁画像を偽刻とする、最も重要なものだが、小稿は、女史の展開する洪适批判、唐拓批判、黄易批判における諸点に互り(上掲の目次参照)、専ら武氏祠画像石の基礎的研究の立場から、その可否を具体的に検討する。また、単なる論文批評に留めず、今後の武氏祠研究に資するべく、その基礎資料の作成、収録に努めた。

M・ニラン女史による“Addicted to Antiquity” (*nign*):
A Brief History of the Wu Family Shrines, 150-1961
CE (Recarving China's Past: Art, Archaeology, and
Architecture of the “Wu Family Shrines” 所収 Prince-
ton University Art Museum, 2005) は、世界的に名高い
中国の後漢武氏祠画像石に対する偽刻説を展開したもので
ある(以下、ニラン論文と呼ぶ)。その論文の内容は、

I. Introduction

II. Stele Summary

III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence

という三章から成るもので、例えばその I. Introduction
に、

今、この研究の明確な対象は、昔からの考え方が長ら
く後漢時代の山東の武氏に関連付けてきた、石刻の一
団——五つの石碑と四十枚余りの画像石板——である
(53頁左)

と言う如く、女史の批判は、「五つの石碑」(即ち、武斑碑、
武榮碑、武開明碑、武梁碑、西闕銘)と、「四十枚余りの
画像石板」(武梁画像を含む武氏祠画像石)との二つに向

けられたものと捉えることが出来る。そして、ニラン論文
II. Stele Summary が「五つの石碑」を批判したもので、
五碑は武梁画像を含む武氏祠画像石から切り離され、また、
III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary
Evidence が「四十枚余りの画像石板」を批判して、それ
らの画像石板は所謂武氏のものに非ざることを、つまり偽刻
に外ならないことが主張されているのである。さて、その
II. Stele Summary については、かつて学問的に成り立
たないこと、つまり女史の主張は通説を覆す程の論拠をも
たず、なお武氏に纏わる五碑は「四十枚余りの画像石板」
から切り離すことが出来ないことを、指摘したことがある
(拙著『孝子伝図の研究』〈汲古書院、平成19年〉111。
付記参照)。そして、ニラン論文III. The Wu Liang Pic-
torial Stones: The Literary Evidence は、翻つてもう一
方の「四十枚余りの画像石板」の偽刻説を唱えるものだが、
小稿は、その第三章を批評しようとする。

ニラン論文第三章に展開された偽刻説は、結論が単純で
あるにも関わらず、その主張を支える論理の構成は、極め
て複雑な内容をもっている。以前に批評した第二章の場合
も同様だが、三章の展開においても、通説の論拠とされる
殆どの資料が女史の批判の俎上に載せられるため、その批
評をすることは、必然的に武氏祠画像石の基礎的研究の色

彩を帯びざるを得ない。従って、小稿の読者は、武氏祠画像石に関する、従来よく知られた基本史料の森を、暫し逍遙することになる。また、その第三章の複雑な構成を分かり易く提示するために、基本的には女史による叙述の順序に従いつつも、時にそれを変え、重要な部分を引き出してコントラストを付けるなど、偽刻説を構成する論点を可能な限り整理して、女史の主張を検討してみたい。

ニラン論文の III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence は、次のように書き出されている。

この章では「武梁」の画像石板だけを取り上げる。後漢の武氏に結び付けられた、五つの碑文は、別々の来歴をもち、そして、想像上他の武氏の成員のために、建てられたとされる、二つの他の再建された祠に、現在割り当てられる、画像石板には、黄易以前の記録が存在しないからである。南宋までは、我々が見るように、武梁画像石板の複写が、拓本セットに加え、様々な場所、そして、別種の媒体の内に存していたであろう。その後は、複写が再び激増し始める、清の初期まで、それらは視野から落ちてしまっているように見える(529頁右)

女史はまず、当章の対象が武梁祠画像石だけであると言う

が、実は武梁画像のみならず、余の画像についても、一再ならず看過し難い重大な論及がなされていることは、後述しよう。次いで、女史は、「五つの碑文」即ち、武斑碑、武荣碑、武開明碑、武梁碑、西闕銘の五碑が、武氏一族のものであるとする通説を否定し(五碑相互の関連も否定される)、また、それら五碑が遺跡、所謂武氏祠画像石と関連するという通説も否定される。それは前章 II. Stèle Summary における結論、つまり女史の主張を要約したものに外ならないが、その主張に関しては、かつて批評した如く、学問的に決して成り立たないものであることを、ここで再確認しておく必要がある。さて、「二つの他の再建された祠」と言われるのは、武氏祠の内、武梁祠を除いた前石室(武荣祠とされる)、左石室(武斑祠とされる)二祠のことである。なお通説における五碑と祠との関連を一言しておく、

武梁碑——武梁石室(武梁祠)

武荣碑——前石室(武荣祠)

武開明碑——後石室(武開明祠)

武斑碑——左石室(武斑祠)

となるが(西闕銘は特定の祠に対応しない)、現在、後石室(武開明祠)の存在は否定されている(蔣英炬、呉文祺氏『漢代武氏墓群石刻研究』、山東美術出版社、一九九五

年)。従つて、「二つの他の再建された祠」というのは、前石室（武榮祠）と左石室（武斑祠）のことであつて、女史はそれらを「想像上」のこととして退けている訳だが、前述のように、それは誤りである。

当章Ⅲ. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence の内容は、大略、

一、洪适批判

二、黄易批判

の二つから成るものと捉えることが出来るが、その二つを有機的に繋いでいる、もう一つの重要な論点を上げるとすれば、

三、唐拓批判

を加えるべきであろう。また、一には、前章の隸釈批判を受ける隸統の批判、二、三には、朱彝尊や翁方綱批判などを、その具体的側面として整理することが可能である。以下、この三点を小稿の骨格として、女史の主張を検証する。当章における一、洪适批判をまず、女史は次の如くに始めている。

洪适（一一七一—一八四）は、その隸釈において、趙明誠が彼の拓本の一つの表現を考えれば、画像、及び、または、榜題を特定の遺跡、或いは、任城における武氏の一員に特定することが出来なかったことを、

不思議に思っている。² 現存する隸釈は、出自を示さずに、図案と銘文を整然と列に彫った、良匠衛改についてのただ一つの節を引用し（前の章を見よ）、そして、趙明誠によつて言及された、任城の共同墓地における武氏または、武梁に捧げられた記念物を、画像が飾っていたことを根拠として推測している。（あの出自不明の一章は、金石録の版には現われない）。³ 隸釈の後の一章は、武梁の記念物にある画像の榜題の一覧を提示する。⁴ 注釈の中で、隸釈は、六つの画像石について、「それらの五つを水平に二つの「記載事項？」に分ける」と述べている。もし我々が、洪の知っていた拓本は、清中期に黄易（一七四四—一八〇二）によつて発見された武宅山の画像石とびったり一致すると仮定するならば、洪は、武宅山において復元された主祀堂（「武梁」と呼ばれた）の西、東、南の壁の視覚的に分けられた十区画を、実際に見ていたことになる。そして、彼は、それらの彫られた榜題により、また、より一般化された「古帝王、忠臣、義士、孝子、列女」の記述によつてそれを示した。（fig. 5）（529頁右—530頁左）

2・隸釈、6/14a—15a（巻681/515頁）、巻16/2

bを見よ。洪适は、彼の持っている拓本が、彼以前に、武梁碑、また、石室或いは、祀堂（礼拝堂）のものである図像場面に関する碑文を、再び生み出しているかどうかを、熟慮している。混乱は、例えば所謂唐拓（以下を見よ）に対する、查嗣瑮（一六五三—一七三四）、または、一六五二—一七三三）による一七〇六年の奥付6において依然続いている。金石録及び、隸釈の記載の出自に関する、彼の考察として、容庚、「漢武梁祠画像考釈」（北平、北京考古学社、一九三六年）、3b—4a頁を見よ。趙も洪もその遺跡を訪れていないので、彼等が武梁の碑文と画像との、正確な関係を知っていたとは考え難い。石渠宝笈、卷32/2bは、武梁石室画像を、任城よりもむしろ金郷近くに位置付けた。

3・その理由として、顧藹吉、隸弁、卷8/38bは、武氏石室画像が、「年も月もない（即ち、年紀をもたない）」ことを述べている。

4・隸続、卷6/1aは、「武梁「礼拝？」堂」（殿）と名付ける。

5・洪适は、合計十一または、十二の場面を見ていたかもしれないが、彼の記述は図像の十区画分に対応する（52頁左）

右の洪适批判の記述において、まず重要なのが、二度述べられる「出自を示さず」without provenance (unprovenanced) と、いうことの内容であろう。それは四庫全書文淵閣本（以下、四庫本と呼ぶ）隸釈卷六「從事武梁碑」及び、卷十六「武梁祠堂画像」の、洪适による注釈部分に引かれた、梁碑の本文のことを指すもので、一見、出自不明のように見えるその原因が、四庫本（王雲鷲本）卷六に存する一丁分の脱落によるものであることは、前掲拙著に既述の通りであつて、それを「出自を示さず」とすることは、決定的な誤りなのである。その点はかつて指摘した事柄なので、これ以上述べないが、問題は、洪适の引用部分を敢えて出自不明と見る、女史の動機、その意味であろう。そのように捉ええると、女史の動機は、洪适（の隸釈）を批判することであり、女史の批判が言外に示唆しているその意味は、

1 洪适は武梁碑文を偽造した

ということであることに、気が付くのである。このことは、既に例えば前々章I・Introductionにおいて、

(d)その他全ての様式を使って細工することに優れた書き手と組んだ、碑文制作のプロは、信頼し得るデータや適切な名文句から構成された、尤もらしい引用部分を使って、疑わしい点を隠すことに長けていた（55頁

右)

と予告されていたことを、具体例として上げたものと言うことが出来る。この予告を前提にすると、さらに注2に記される、理解不能の次の一文、

洪适は、彼の持っている拓本が、彼以前に、武梁碑、また、石室或いは、祀堂（礼拝堂）のものである図像場面に關する碑文を、再び生み出しているかどうかを、熟慮している

の意味も理解出来る。この文は多分、隸統卷十八「荊州刺史李剛石室残画像」の、

此碑則自_レ求好古之士未_ニ之見_一……隸积所_レ有僅七種。

除_ニ武梁_一之外余碑他無_ニ別本_一

を、女史が解釈したものと思われる。右は、洪适が珍しい拓本（画像か）を七種類、所持しており、その内の武梁画像以外の六種は、他に類例を見ない、貴重な拓本だと記すものである。故に、女史の述べるようなことを、洪适は全く記していないのであって、上引の女史の解釈は、完全な誤りとしなければならないが、問題はその解釈の示す意味であろう。上引の一文は、原文に較べると、極めて奇妙な文章となっている。即ち、拓本（rubbing）が武梁碑かその碑文（Wu Liang's stele or the inscriptions）を再生産する（reproduces）と述べるのである。一般的に、石碑

が拓本を複製するものだが、女史が言うのはその逆なのだ。つまり偽造である。そして、洪适は偽造者であり、武梁碑は偽造されたものであるということが、その意味なのである。

次いで、本文と注2との中に、

・もし我々が、洪の知っていた拓本は、清中期に黃易（一七四四—一八〇二）によって発見された武宅山の画像石とびつたり一致すると仮定するならば、洪は、武宅山において復元された主祀堂（「武梁」と呼ばれた）の西、東、南の壁の視覚的に分けられた十区画を、実際に見ていたことになる。

・趙も洪もその遺跡を訪れていないので、彼等が武梁の碑文と画像との、正確な関係を知っていたとは考え難い（注2）

という、分かりにくい二文が現われる。前の文中に、「西、東、南の壁の……十区画」とされるのは、隸积十六「武梁祠堂画像」に、

右武梁祠堂画像、為_ニ石六_一、其五則横分爲_ニ二

とあるように、洪适が画像を記述する便宜上、全三石から成る武梁祠の画像を、まず上下の六面に分けた内の、なお五面については、さらにそれを上下の計十面に分割したことを指している（後述）。右の二文で理解し難いのはまず

第一に、現存する武梁祠の遺跡が洪适の記述の基づいた拓本と一致するとすれば、という条件が示され、続いて、洪适は実際に遺跡を見ていた筈だ、という結果が示されることであろう。私達が普通に理解する所では、洪适の拓本も武梁祠（遺跡）から採られたもので、両者は当然一致するであろう。なのに、その事実が何故、女史の示す如き条件と結果とに分かれなければならないのか。第二に、その結果（洪适は武梁祠を見ていた）とは丸切り逆の結果（洪适は武梁祠を見ていない）が、注2の中に示されていることである。一体、洪适は遺跡を見たのであろうか。それとも、見ていないのであろうか。女史は、趙明誠の金石録を支持するので（前述、洪适の梁碑の引用に關しても、女史は、「あの出自不明の一節は、金石録の版には現れない」と述べていた）、洪适は武梁祠を見ていないということが、女史の考えであることは、文脈から明らかである。すると、普通の理解を超えた前の文に示される条件と結果とは、何を意味しているのであろうか。女史の考えによれば、まず洪适は遺跡を見ていないので、洪适の拓本（即ち、隸釈十六及び、隸続六における武梁画像の記述）は、遺跡と一致する筈がないことになる。ところが、もし両者が一致するならば（事実上一致している）、洪适は見てもない武梁祠を、恰も見たかのように偽ったことになるのである。

る。つまり、

2 洪适は武梁画像を偽造した

ことが強力に示唆されていて、これが女史の主張なのである。その論法は、紛れもなく詭弁の典型であると同時に、大変危険な論法であって、洪适の偽りを示唆する一方、黄易の偽り、遺跡自体の偽造をも示し得ることに、注意すべきである。実際、当章はそれらの方向へも推論を進めることになる。

注5の、

5・洪适は、合計十一または、十二の場面を見ていたかもしれないが、彼の記述は図像の十区画分に対応するも同じである。隸釈卷十六は、画像を収録した訳でなく、武梁祠の榜題を収録する。榜題は十面に存し、残りの二面にはそれがないから、隸釈は十区画分に対応するのが当然である（後述）。しかし、注5の意味は、そうではないであろう。女史が言わんとしていることは、洪适は武梁祠を見ていないから、拓本即ち、隸釈の記述（十面）と遺跡（十二面）とが一致しない、つまり、隸釈の記述は偽造であるということになる。洪适のことは、後述する（なお注2の隸釈十六の丁数表示、16/2bは、16/4b、5aが正しい）。

或る時点で、一つの版が、連師の方務徳の手に入った¹⁰。

洪适は、原石から遠くそして、長く隔てられた方の重刊本を、原石に忠実でないものとして訕った。しかし、おそらく洪适は、彼の最初の銘文の編集を終える前に、首都に出回っている複写を訪わせてくれなかった（例えば間近く見せてくれることのような）方の怠慢に、感情を害しただけのことであろう。その後、洪は括蒼（現在の浙江に位置する）の梁季珩という人から、彼自身のための複写を手に入れた。¹¹奇妙にも、洪适は、彼と同時代の衛博と同様、武梁画像の拓本がどのように多くの三つの遺跡のものとされる拓本と違っているかということに焦点を合わせながら、主として、消極的な用語を使って武梁画像の拓本のことを述べようとした。（その三つの遺跡は）即ち、金郷近くの魯恭の祠堂、これもまた、金郷に近い朱浮の墓、そして、鉅野にある李綱の祠堂である。¹²彼らは、武梁の画像が、次のようなものを欠く点で異なっていると述べた。

(a) 魯恭の祠で見出だされたような、孔子と彼の七十二人の弟子達の肖像、

(b) 一つまたは、それ以上の「支配者、役人、そして、彼らの従者」の場面（車馬の行列への言及？）、

(c) 李綱に捧げられた遺跡において見出だされる「飛鳥と走獸」の場面、¹³そして、

(d) 府君、令、京兆尹の如き肩書きによって官職所持者としての人物を確認する榜題。¹⁴

勿論、孔子と彼の弟子、そして、支配者、役人及び、その従者達の長い列、そして、飛鳥と走獸は全て、今日武氏のために再建された三つの祠に見出だされている。——それは、黄易と同時代人の王昶が一八〇五年に書いていることだが、王昶が、黄易の発見した石板は、相当数の別の遺跡から来たものかもしれないと考えた、一つの理由であろう。¹⁵より明確なことに、洪适は、梁高行のような人物が、李綱と武梁との両方の拓本に現われることに注目していた。洪のものとされる、改訂された隸続もまた、今日我々が見る所のものと、或る程度一致する建物の張り出しの場面を描いているが（主人は、彼の前に腰を屈める客、または、従者達と共に、坐っている）、しかし、隸続が主要人物の後に据える六人の人物達は、いかなる今日の版にも見出だすことが出来ない。（530頁右—532頁左）

10・[略]

11・一七九三年の日付のある藩廷筠の唐拓への奥付を見よ。このことは、王昶の金石萃編巻8、par. 9にもまた、洪适を引用しながら言及されている。

12・〔略〕

13・隸統、卷18／1 a。「今、この祠は四靈「方角を示す」の動物を描いていない。また、役人、従者達を伴った君主も描いていない。」 近くの范武墓（伝統的に漢代のものとされる）は、同じく漢代のものとされる碑をもっていた。それは、(a)蔡邕の筆跡ではなく、(b)魏時代、青竜三年（二三五年）の年紀がある、と述べたものである。

14・〔略〕

15・王昶の金石萃編、卷8、par. 20を参照せよ。「私には、洪氏の説明に従って、それらが全て武氏の祠堂に属するとは限らないことを心配している。」

16・隸統、卷17／4 b（553頁左）

右は、女史が隸統六、隸釈十六、隸統十七などを用いて、洪适が武梁画像を認定した過程を再構成し、その過程を批判したものである。女史によるその再構成は、例えば隸釈十六が比較している、魯恭と李剛の二つの祠の画像を、三つとするなど、極めて杜撰なものであるが（三つ目の朱浮の墓に言及するのは、隸統六）、そのことはともかく、女史の言わんとするのは、まず洪适が武梁画像と認定した根拠(a)(b)(c)を、

勿論、孔子と彼の弟子、そして、支配者^b、役人及び、

その従者達の長い列、そして飛鳥と走獣は全て、今日武氏のために再建された三つの祠に見出だされしていると批判する（私にa b cを付す）。即ち、女史は、黄易達が発見した、武梁祠以外の三つの祠（前石室、後石室、左石室）に、a b cが描かれていたことを論拠として、洪适が武梁祠とした画像を、武梁のものでないと主張するのである。次いで、女史は、自分の主張を支持する、金石学の古典として、金石萃編を上げ、

——それは、黄易と同時代人の王昶が一八〇五年に書いていることだが、王昶が、黄易の発見した石板は、相当数の別の遺跡から来たものかもしれないと考えた、一つの理由であろう。¹⁵

15・王昶の金石萃編、卷8、par. 20を参照せよ。「私には、洪氏の説明に従って、それらが全て武氏の祠堂に属するとは限らないことを心配している。」

と述べて、王昶をその主張の証人としている。しかし、武梁祠以外の三つの石室に、a b cの描かれていることが、本当に洪适の認定を批判するものとなるのであろうか。黄易の再発見した武梁祠に、a b cが描かれていたのであれば、洪适の説は間違いなく学問的批判の対象となるであろう。けれども、洪适は三つの石室を知らず、それらを武梁祠認定の根拠とした訳でもない。洪适は、武梁祠にa b c

が見られないと述べただけのことであって、そのことは、武梁祠以外の三つの祠とは、何ら関連がない。a b c が描かれていようがいまいが、洪适の説には関係がないのである。このことから、女史の主張は、明らかに誤りであることが分かる。第二に、王昶の金石萃編卷二十漢十六「武梁祠堂画像題字」が、

此外若_二所謂前石室後石室左右石室祥瑞_一石柱等_二既無_三題贊_一。且恐如_二洪氏所_レ稱不_レ皆_三武氏祠堂之物_一

と記すのは（巻8、par. 20 不明）、洪适が武氏祠の全てに言及している訳ではないことを、指摘しているだけのことであって、決してそれらが武氏祠のものではないとか、別の遺跡から来たものだろうとか、述べているのではない。従って、王昶の言が女史の主張の支証となることはあり得ない。このこともまた、女史の主張の誤りをはつきりと示している。

女史がこのような虚言を弄する動機は前述、

1 洪适は武梁碑文を偽造した。

2 洪适は武梁画像を偽造した

の二点を考え併せてみれば、極めて明瞭であろう。そして、金石萃編の誤引から、

3 武氏祠は別の遺跡の寄せ集めである

という、三点目の女史の重要な論点を導くことが出来よう。

女史は、続けて、「より明確なことに more positive-
」と前置きして、洪适が梁高行（列女伝四・14）の図の、武氏祠と李剛の祠との両方に存することに、注目していたことを指摘する（注12にも唐突に、隸統十八「荊州刺史李剛石室残画像」がまた、梁高行の記述をもつことが指摘されていた）。通常の文脈からは全く意図の不明な、二度に亙るこの指摘も、12に照らし合わせれば、2の、武梁画像の偽造を示唆するものであることが知られる。同様に、注13に述べられる、武氏祠とは全く関わりのない、「漢代のものとされる」范式墓に付随する、「同じく漢代のものとされる」碑が、実は蔡邕の書でなく、三国魏の年紀をもつことの指摘は、1の武梁碑文の偽造を示すものである。

最後に、女史は、隸統十七「魯峻石壁残画像」における、其一之上横、画_図人物、如_二武梁画像_一。主客_二侍於前後_一者六、又主客三人列坐侍者四

を上げて、

洪のものとされる、改訂された隸統もまた、今日我々が見る所のものと、或る程度一致する建物の張り出しの場面を描いているが（主人は、彼の前に腰を屈める客、または、従者達と共に、坐っている）、しかし、隸統が主要人物の後に据える六人の人物達は、いかなる今日の版にも見出だすことが出来ない

と、隸続を批判している。この批判もまた、2の武梁画像

の偽造の徴証とされていることは、もはや言うまでもないことであろう。ところが、女史の批判は、批判そのものがおかしく、学問的批判の体裁をなしていない。上引隸続十七の文章は、標題を見れば明らかな如く、魯峻（魯恭）の画像のことを記述したもので、武梁画像のことを記述したものではない。故に、「主客拜待於前後者六」以下は、魯峻画像のことを述べたものであつて、それが武梁画像のようだと、言っているだけのことに過ぎないのである。だから、隸続六の武梁画像の如何なる版であれ、それを描いている筈がない。加えて、女史の「隸続が主要人物の後に据える六人の人物達 the six figures that the Li xu places after the principal figure」という数え方も誤りである。隸続における主客合わせて六人という表現を、誤読したものと思われる。因みに、隸続六の武梁画像は、第三石三、四層相当部に、二層の楼を描き、楼の上下それぞれに人物が配されている。原石には既に洪适以前の破損があつて、人数を確定し難いが、例えば蔣英炬、吳文祺氏によれば、楼上が七人、楼下が六人とされている（前掲『漢代武氏墓群石刻研究』、57頁）。もう一点、確認しておくべき重要な点は、ここで女史が、「洪のものとされる、改訂された隸続」と述べて、隸続の改訂に言及していることであ

る。

4 隸続は改訂されている

上引隸続十七を論拠とする、女史の主張の4は、勿論成り立たないが、この主張については、後程詳しく検討しよう。

7・張如瑩は張澄のことである。朱希真は、朱敦儒（進士、一一三二）のことで、成王と周公の肖像を描いた拓本の所有者である。朱は他の点において山のような拓本と関連している。（隸続8/4bで、洪适は、二つの石碑或いは、碑文の拓本を、朱希真から得たと主張している。）衛博の語りにおける非常に重要な点は、その拓本が趙明誠の記述と一致している「ように見える」と、専ら言っていることである。その上、その語りの大半は、二人の身元不詳の人物に帰される（「誰かは次のように聞いた、喻子才が……そして、誰かが次のように言った……」）。対照的に、翁方綱の「唐拓武梁祠画像跋」（一七九一年の年紀がある）は、語り手が首都の監督官（建康尹）であることを明らかにしている（大抵の版の中で）

右は、ニラン論文第三章の注7を示したものである（本文は省略する）。注7には、武氏祠に関する研究の重要な基礎的資料の一とされる南宋、衛博が記した定庵類稿を通じて、女史の洪适批判が見える。女史の主張の検討に先立

ち、まずその定庵類稿の内容を確認しておきたい。四庫本定庵類稿卷四の本文を示せば、次の通りである。

跋武氏石室画像

右、武氏石室画像、漢人飾墓多類此。諸家所記李剛、魯恭、朱浮、武氏墓室皆章章、可考者。李剛為荊州刺史、墓在鉅野黃水南。石室三間、四壁隱起、雕刻為君臣官屬龜龍麟鳳之文。魯恭為司隸校尉。墓在金鄉、前有石祠石廟、四壁皆青石隱起、刻書契以來忠臣孝子義女孔子及七十二弟子像。二說出酈道元水經。朱浮墓在濟州。壁上刻平生所歷官、車馬儀衛、題曰府君作令時、作京兆尹時及他官時。見米元章畫史。濟州有武氏數墓。墓前有石室、刻古聖賢像。小字八分書題記姓名、往往為贊於其上。見趙德夫金石錄。考之此画、無孔子七十二弟子及四靈形像、無府君作令作京兆尹等語。而有八分小字古聖賢題贊。知為武氏墓室審矣。武氏有石闕銘長史班從事梁吳郡丞開明執金吾榮數碑、皆出任城。趙德夫所謂武氏數墓是也。趙云墓前有石室、不指明誰墓。按從事武梁碑云、前設壇墠、後建祠堂。良匠衛改、雕文刻畫。羅列成行、攄騁技巧、委蛇有章。似謂此画。趙德夫家東州、宜得之詳正、応伝疑耳。某聞之、喻子才郎中南渡四十年纔再見之朱晞真張如

瑩氏。漢碑鄉來無恙者故自有數。中厄戎馬、其伝益微。此本則文字奇古、少訛欠、尤可珍愛。乾道丁亥夏、客有持示建康尹某人、云即張如瑩尚書所藏本也。乃刻而納諸府廨紉中閣之壁、以震耀來世云。

定庵類稿の文章は、非常に難しい。衛博が、始めに拓本の画像を考証するに当たり、相互対照資料として武氏石室の他、李剛、魯恭、朱浮墓の三つを上げることが前述、隸統六に同じく、また、比較の結果、拓本に、「無孔子七十二弟子及四靈形像」ことから、それが李剛、魯恭墓の画像ではなく、さらに「無府君作令作京兆尹等語」ことから、朱浮墓の画像でもないとして、言わば消去法的にその拓本を、残った武氏石室の画像であろうと推定する、考証の形式は、隸積十六と丸切り共通している。このことは、先に女史も指摘していた通りであるが、定庵類稿の記す年紀「乾道丁亥」は、南宋の乾道三（一一六七）年であり、一方、洪适の隸積の完成したのがその前年で、翌乾道三年正月には序文が書かれ、版刻されるに至っている（四庫提要）。衛博が隸積を参照したかどうかは定かではないが、もし参照していないのであれば、衛博は武梁碑の拓本を見ていたことになる（付記に掲げる白謙慎氏論文参照）。さて、女史は、注7において、定庵類稿から二つの問題を導き出している。第一は、洪适に関わる問題である。即

ち、女史は、

衛博の語りにおける非常に重要な点は、その拓本が趙明誠の記述と一致している「ように見える」と、専ら言っていることである

と述べて、衛博が趙明誠つまり金石録と同じ見方をし、支持したと主張している。このことは、衛博が洪适を支持しなかったこと、つまり前述、洪适が隸釈六において「出自不明の一節」をもち出し、強引に画像を武梁に結び付けたことに、批判的であったことを意味する。換言すれば、洪适と同時代の衛博が、

1 洪适は武梁碑文を偽造した

ことを示しているのである。もし女史の主張していることが事実であるとするならば、同時代人衛博の証言であるだけに、それは相当強烈な洪适批判となるであろう。ここで、定庵類稿の本文に立ち返り、そのことを検証してみよう。

衛博は、洪适と同じ資料を用い、同じ方法によって、拓本を武氏石室の画像と認定した。続けて、衛博は、

趙云_三墓前有_三石室、不_三指明誰墓_一

と述べて、趙明誠が「墓前有_三石室_一」（金石録十九）と言うのみで、それが誰の墓なのかを示さないことを不満とし、按_三從事武梁碑_一云

として、「前設_三壇墀_一」以下の武梁碑文を引用し、その碑

文は、

似_レ謂_三此画_一

と結論する。従って、衛博は、その拓本が武梁祠のものであると言っていることになる。つまり衛博は、趙明誠に賛同しないばかりか、洪适と全く同じ結論に達しているのである。そのことは、衛博が、

趙德夫家東州、宜_レ得_三之詳正_一、応_レ伝_レ疑耳

と言い（徳夫は、趙明誠の字）、また、その結論「似_レ謂_三此画_一」の言い方が、洪适の「似_三是指_三石室画像_一爾」（隸釈六）の言い方と酷似していることなどからも確認出来る。即ち、女史の主張は事実に対し、事実はむしろその主張とは逆のこと——洪适が正しいことを示しているのである。不審なのは、衛博の引用する、「按_三從事武梁碑_一」以下の碑文こそが、正しく、女史の、

あの出自不明の一節は、金石録の版には現われない

（530頁左）

と言う、「出自不明の一節」そのものであるにも関わらず、女史がそのことに全く触れないことである。さらに不可解なことは、女史が、

衛博の語りにおける非常に重要な点は、その拓本が趙明誠の記述と一致している「ように見える」と、専ら言っていることである

と記す、該当本文が定庵類稿の中に存在しないことである。強いてそれらしい文を定庵類稿から上げるならば、

見趙徳夫金石録^一

しか見当たらないが、これは、直前に引かれた文章の出版が金石録であることを示しただけの一文であり、女史の指摘するような内容は、全く含まれていない。この一文の誤読だとすると、もはや論外とする外ない。

誤読と言え、注7の上記の続き、

その上、その語りの大半は、二人の身元不詳の人物に帰される（「誰かは次のように聞いた、喻子才が……」）。そして、誰かが次のように言った……」。対照的に、翁方綱の「唐拓武梁祠画像跋」（一七九一年の年紀がある）は、語り手が首都の監督官（建康尹）であることを明らかにしている（大抵の版の中で）

における、女史の誤読は、一箇所に留まらない（喻子才は、^{ゆしちやう}喻樗のことで、子才は字へ宋史四四三儒林三）。女史が問題にしているのは、定庵類稿に見える二つの「某」のことで、まず女史は、衛博の話をういて洪适を批判した後、返す刀で、衛博の「語りの大半は、二人の身元不詳の人物〔某〕に帰される」と逆批判して、定庵類稿における情報の出所を怪しげなものとすることで、そこに取り上げられている武梁画像の拓本自体をも、強い疑惑の渦中へ投げ込

んでしまうのである。このことは、2の洪适による武梁画像の偽造という、女史の主張に連なるものと考えられる。

そこで、定庵類稿における問題の「某」の部分を、再検討しておく必要があるだろう。定庵類稿における、二つの「某」を重ねて示せば、次の通りである。

・某聞^レ之

・客有^ニ持^ニ示建康尹某人^一云

前者の「某」は、言うまでもなく一人称の代名詞なのであって、「私」即ち、話者の衛博を指す語である。女史の言う、「身元不詳の人物」などではあり得ない。後者は、「誰かが言った someone said」ではなく、言ったのは客であり、「某人」は、建康尹の名前を記さず、不定とする言い方に外ならず、「建康尹である或る人」のことで、この「某」も、「身元不詳の人物」なのではない。最後に、一七九一年の翁方綱跋を示せば、次の通りである（小蓬萊閣金石文字に拠る。私に1―3を付す）。

又南宋衛博号定菴、官枢密院編集、「跋^一武氏石室画像」云、「此本文字奇古、少^二譌欠^一、尤可^ニ珍愛^一。乾道丁亥夏、客有^ニ持^ニ示建康尹^一、云^ニ即張如瑩尚書家所藏本也^一。」定菴又云、「聞^レ之、喻子才郎中南渡後四十年纔得^レ見^レ之。」蓋在^ニ宋時^一、此搨本之難^レ得已

翁方綱は、1―3の三箇所に定庵類稿を引いているが、1

は出典を示したに過ぎないものである。翁方綱はまた、23を引用するに際し、問題の「某（人）」を、文脈に関わらないものとして省略している。さて、その23において、翁方綱は果して、女史が指摘するように、「語り手が首都の監督官（建康尹）であることを明らかにしている」であろうか。23共に語り手は、衛博以外の者ではあり得ない。女史は、右の翁方綱の跋文をも誤読したのである。注7を記した女史の意図が、定庵類稿を使って洪适を批判し、武梁画像に疑いの目を向けようとするものであることは、前述の如くであるが、それはそれとして、女史の主張を支える学問的な上記の手続きが、殆ど出鱈目としか論評し得ないものであることは、極めて明瞭である。

二

衛博の定庵類稿を通じ、洪适の批判を試みたニラン女史は、次いで南宋、史繩祖の学齋佔畢を通じて、洪适を批判しようとする。女史は、III, The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence ⁵³²頁右—⁵³³頁左におおむね、以下のように述べている。

成人として、孫の史繩祖は、彼の祖父の資料を十分に熟考した。後程、史繩祖は、資州（今日の四川）に到り、堂の中に正しく同じ石があるのを発見したが、そ

れ以前にその石は、戦火によってひどく傷んでいた。彼は、彼の祖父の拓本に基づいて、石を「新品の如く申し分なく」修理するように命じた。それらの行動を報告しながら、史繩祖はその後、彼が見た、標題のある画像のリスト作りに移ったが、それは、洪适の隸釈の中でリスト化された武梁画像と、おおよそ合っていた。例えば、九人の文化的な英雄の完全な顔ぶれには同じ順序で（もし女媧を数えるなら十人）、同じ言い回しが用いられており、しかし、史繩祖のリストには、夏王朝における邪悪な最後の王——再建された武梁石室の西壁の顔ぶれにおいては、二字の刻銘により、明らかにされた最後の王、桀についての言及がない（fig. 6）。史繩祖の記載事項は、幾つかの（しかし、全てではない）場面が、異なった順序でリスト化されていて、彼は、明らかに一つの場面を異なった石へと割り当てた。その上、史の石はひどく傷んでしまっており、ところが、約五世紀後、黄易によって発見されるそれらは、殆ど全て驚くばかりに良い状態であった。同じ石が、山東から四川へと運搬され、そして、一七八六年に武宅山の遺跡へ出現するために、その後には山東へ戻ったというようなことが、どの位あり得るか？見事な拓本、或いは、石それ自体が既に史のコレクシ

ヨン中に備わっている時に、どのような見込みのある動機が、その二つの旅を思い付かせ得たのか？そのような記録を比較することにおいて、幾人かの中国の金石学の専門家は、史繩祖の著述中の一つの記載事項が、二つの遺跡について記述しているに相違なく、そして、第二の場所にある記念建造物が、武梁の拓本中に出て来るものと殆ど全て同じ標題をもつ人物を、適々含んでいただけのことであり、結論付けることを強いられている。²¹ 三人の明の文学者達——楊震（一四八八一五九九）、曹学佺（一五七四—一六四七）、そして、梅鼎祚（一五五三—一六一九）——は、史繩祖によって言及された画像石が結局、「資州からの古い石碑〔資州古碑〕」と呼ばれるようになったことを、我々に知らしめる。²²（532頁右—533頁左）

21・金石萃編、卷20、part. 7に記録された、王の評言及び、容庚、『漢武梁祠』、4b頁を参照せよ。王は、史繩祖の記載事項を二つの部分に分けた。第二の部分について、王は、「なおもう一つの画像に言及する」と言った。

22・史繩祖と結び付けられた、二つの四川の石に関連する資料は、次の通りである。(1)楊慎、金石古文、卷

14、201頁。それはまた、我々の目を史子堅の隸格へと向かわせる（楊の時代にはまだ現存していたか？）。

(2)曹学佺、蜀中広記、卷8、40頁。(3)梅鼎祚、東漢文紀（四庫本）、卷32/36b。そして、(4)資中県統修資州志、吳鴻仁その他編、（台北、学生社、一九六七。

一九二九年版の複製）、卷1「古跡」、33頁（Western part）。或るものは、黒い精霊（倉精）よりむしろ、

文字の発明者、蒼頡のこととしているものの、四つの全ての本文が、現在我々が武梁の発見物に見るのと同じ、賢王伏羲の標題を引用している。同様に、資州の地誌は、史繩祖の本文に記されたものと同じ標題を伝える、賢王の画像のある石が、「今や二つ共失われた」と言っている。二つの石の一つはそこで、「古い」、第二の石は、「漢代の」と記載されている。九人の王に付けられた標題はまた、淮南子の修務訓の章に見える記述を想起させる（533頁右—534頁左）

女史は、学齋佔畢の記述（後述）と隸釈十六のそれ（後述）とを比較して、それらが「おおよそ合っていたroughly match」ことを認めつつ、一方において、

しかし、史繩祖のリストには、夏王朝における邪惡な最後の王——再建された武梁石室の西壁の顔ぶれにおいては、二字の刻銘により、明らかにされた最後の王、

桀についての言及がない (fig. 6)。史繩祖の記載事項は、幾つかの（しかし、全てではない）場面が、異なった順序でリスト化されていて、彼は、明らかに一つの場面を異なった石へと割り当てた

と指摘することで、両者の記述内容が決して同じではないことを強調する。また、31頁の fig. 5 と fig. 6 には、隸釈と学斎佔畢の記述内容を図式化した図版が上下に掲げられ（図一）、両者の記述が大きく異なること、即ち、ひよつとすると隸釈と学斎佔畢とは、全く別の画像のことを述べているのではないかと思わせる程、両者が決定的に異なっていることを、読者に深く印象付けるのである。図一に、その fig. 5 と fig. 6 を掲げる。

隸釈は、余りにも多くの矛盾、時代錯誤、付加の痕跡を武氏に関して記している（335頁右）
と言われる、女史の隸釈への見方には当然、

1 洪适は武梁碑文を偽造した
ことも含まれようが、学斎佔畢との相違を強調する、隸釈本文の批判の形を取って、ここで女史が強く示唆していることはまず、

2 洪适は武梁画像を偽造した
ことの証明であろうと思われる。この後、女史は、

その上、史の石はひどく傷んでしまっており、ところ

が、約五世紀後、黄易によって発見されるそれらは、殆ど全て驚くばかりに良い状態であった

として、洪适批判を發展させた、黄易に対する批判を差し挟んで、さらに武梁祠画像石の山東、四川間における往復の旅のことから、明代の記録に残る資州古碑のことへと、筆を進めている。ここではまず、fig. 5 fig. 6 (図一) をめぐる、上記引用部前半に展開された、女史の主張を批評する。

さて、私は、fig. 5 fig. 6 を中心とする女史の主張を客観的、学問的に理解、把握するために、その批評に先立つて、次の五項目のデータ資料を読者に提供しておきたい。

I 武梁祠の概念図

II 武梁祠の図像内容一覧

III 隸釈卷十六の本文

IV 学斎佔畢の本文

V 武梁祠原石（拓本）の本文

以下、順次 I—V の内容を、具体的に掲げてゆく。始めに、I 武梁祠の概念図を示すものとして、図二を掲げよう。図二は、武梁祠を構成している三石と、その図像内容を表わす概念図で、長廣敏雄氏編『漢代画像の研究』（中央公論美術出版、一九六五年）所収の折り込み図（秋山進午氏作製）に拠るものである。因みに、同書第二部「武梁石室画

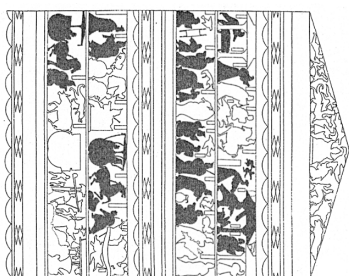
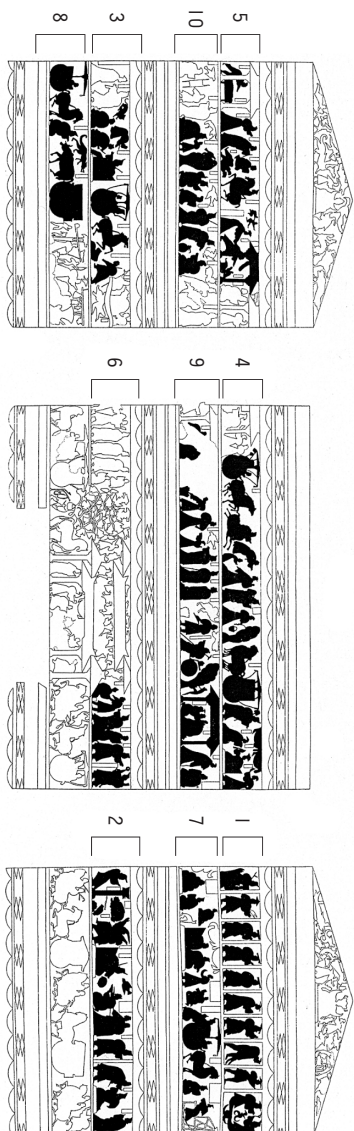


Fig. 5 (top) Diagram of "Wu Liang Shime" showing scenes apparently described in Hong Gua's "Li Shi" text; if we assume that Hong Gua's rubbings correspond to today's stones.

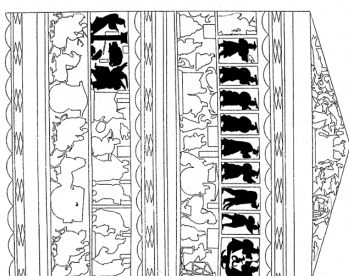
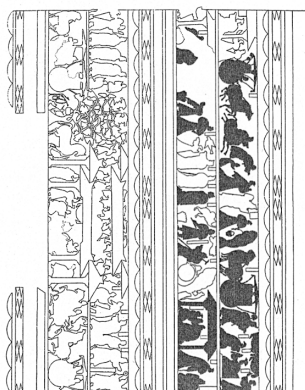
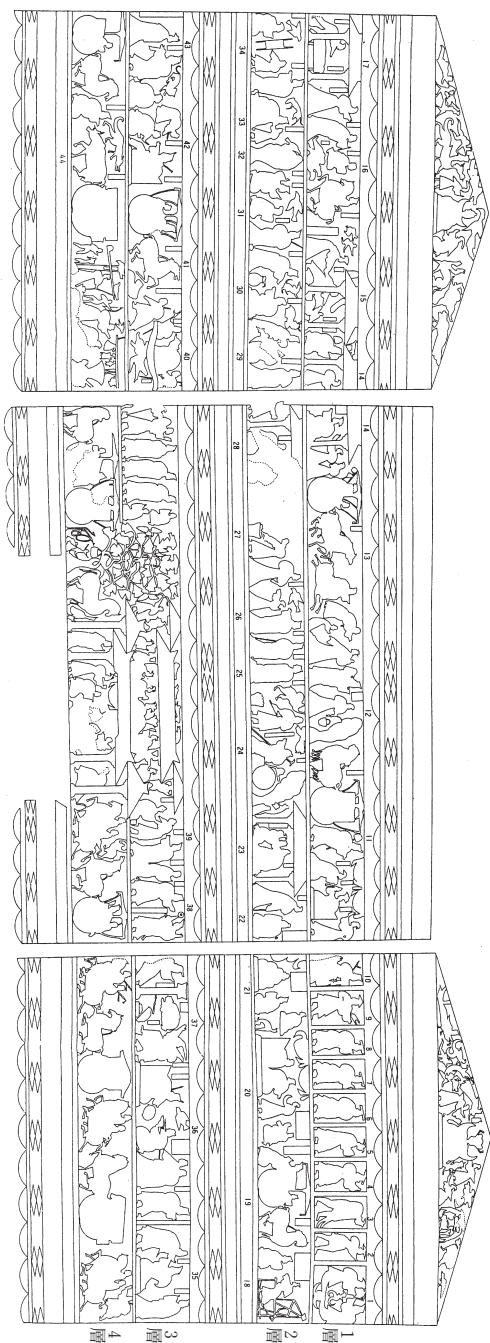


Fig. 6 (bottom) Diagram showing scenes apparently described in Shi Shengzu's "Xue Zhai zhanbi" text, as compared with Hong Gua's "Li Shi". After the scenes of Zengzi with his mother and Min Ziqian, labels for figures

— 图 — fig. 5 fig. 6

appear in the *Li Shi* that are not found in *Xue Zhai zhanbi*. At two points, the *Xue Zhai zhanbi* has additional characters. The sequence of the figures is also changed in several places as shown in grey.



図二 武梁祠概念図

象の図象学的解説」は、二十世紀日本における、武梁祠研究の水準を極めた業績として、世界的に名高い労作とされている。図二は、右から第一石、三石、二石と並ぶ、武梁祠の三石を表わしている。その三石はまた、上下四層の図像から成っていて、第一、三層の図像上部と第二(四)層

の図像下部に1—43(44)の番号が振り当てられている。実はこの番号こそが、武梁祠三石における、各図像の位置を指示しているのである。そこで、今II武梁祠の図像内容一覧として、その各番号が指示する図像の内容を取り纏め、次の表一に掲げよう。

表一 武梁祠圖像内容一覧

1 伏戯	女媧 <small>(第一石)</small>	21 丁蘭
2 祝融		22 柏榆 <small>(第三石)</small>
3 神農		23 邢渠
4 黃帝		24 董永
5 顓頊		25 章孝母
6 帝侑		26 朱明
7 帝堯		27 李善
8 帝舜		28 金日磾
9 夏禹		29 三州 <small>(第二石)</small>
10 夏桀		30 羊公
11 梁高行 <small>(第三石)</small>		31 魏湯
12 魯秋胡妻		32 孝烏
13 魯義姑姉		33 趙荀 <small>(魯)</small>
14 楚昭貞姜		34 原谷
15 梁節姑姉 <small>(第二石)</small>		35 曹沫 <small>(第三石)</small>
16 齊繼母		36 專諸
17 京師節女		37 荆軻
18 曾子 <small>(第二石)</small>		38 蘭相如 <small>(第三石)</small>
19 閔子騫		39 范且
20 老萊子		40 王慶忌 <small>(第三石)</small>

41 予讓
42 聶政

43 鍾離春
44 処士、臯功曹(第二石)
(四層)

I の図二とIIの表一により、女史の作成した図一 fig.5 fig.6 両図における、各圖像毎の内容を、把握することが出来る。fig.5 fig.6 (図一) の女史の主張を批評するには、I II に加え、さらに左の三つのデータが必要である。

III 隸积卷十六の本文

IV 学斎佔畢の本文

V 武梁祠原石(拓本)の本文

引き続き、III-V のデータを紹介する。

表二は、III 隸积卷十六「武梁祠堂画像」の本文を掲げたものである(四庫本に拠る。「」は王雲鷺本、汪日秀本との異同を示す。「」を私に補う。I II における1-44の圖像番号を、本文中の対応する榜題、題記上に付した)。また、図三に、四庫本隸积原本の図版を掲げておく。

表二 隸积卷十六

武梁祠堂画像

1 伏戯倉精、初造工業、画卦結繩、以理海内。
2 祝誦氏無所造為、未有者欲、刑罰未施。

3 神農氏因宜教田、辟土種穀、以振萬民。

4 黃帝多所改作、造兵^{闕三}、裳、立宮宅。

5 帝顓頊高陽者、黃帝之孫、而昌^{闕二}子。

6 帝咎高辛者、黃帝之曾孫也。

7 帝堯放勳、其仁如天、其知如神、就之如日、望之如雲。

8 帝舜名重華〔耕於歷山、外養三年（注日秀本）〕。

9 夏禹長於地理^{闕一}、泉^{闕一}陰、隨^{闕二}、退為肉刑。

10 夏桀。^{自伏羲至夏桀、是一段。}

35 管仲。齊桓公。曹子刿^{闕一}。魯莊公。

36 ^{闕一}侍郎^{闕一}。專諸炙魚、刺殺吳王。吳王。

37 荆阿^{闕一}。樊於其頭。秦武陽。秦王。^{自管仲至秦王、是一段。}

40 ^{闕二}人名。

41 予讓殺身、以報知己。^{闕一}人名。

42 〔韓王。聶政（注日秀本）。〕

43 齊王。無塩媿女鍾離春。^{自予讓至無塩、是一段。}

11 梁高行。奉金者。使者。

12 ^{闕一}人名。胡妻。秋胡。

13 義姑姊。姑姊兒。^{自梁高行至衛將軍、是一段。}

14 ^{闕一}人名。使者。

15 長婦兒。梁節姑姊。掾者。姑姊其室失火、取兄子往、

輒得其子、赴火如亡、示其誠也。

16 ^{闕二}人名。後母子。前母子。齊繼母。

17 京師節女。怨家攻者。^{自使者至怨家攻者、是一段。}

38 蘭相如趙臣也、秦壁於秦。秦王。

39 范且。^{闕二}人名。^{自蘭相如至范且、是一段。}

18 曾子^{闕二}孝、以通神明、貫感^{闕一}祇、著乎^{闕一}朱方、後世凱式、^{闕二}無綱。

19 子騫後母弟。子騫父。閔子騫^{闕一}母居、喪^{闕一}移、子騫

^{闕一}寒、御^{闕一}失^{闕一}。

20 老萊子楚人也、事親至孝、衣服斑連、嬰兒之態、令親

有驢、君子嘉之、孝道大焉。萊子母。萊子父。

21 丁蘭二親終後、立木為父、隣人佻物、報乃借与。^{自曾子至}

^{丁蘭、是伏戲下一段。}

44 処士。渠功曹。^{是予讓下一段。}

22 ^{闕一}人名。榆母。

23 渠父。邢渠哺父。

24 永父。董永千乘人也。

25 章孝母。

26 朱明。朱明弟。朱明妻。

27 李氏遺孤。忠孝李善。

28 休屠像。騎都尉。^{自榆母至騎都尉、是一段。}

29 ^{闕一}人名。

30 義漿羊公。乞漿者。

31 湯父。魏湯^{闕一}。

古聖賢名

余大父武陽府君好古博雅生平精於篆隸行草殘

碑斷刻靡不搜訪自集隸格一冊以補洪景伯漢隸之缺其中有一節云東州家間得三碑高廣各五六尺皆就石室壁間刻古聖賢義夫節婦及車馬人物其質樸可笑然每事各有漢隸數字字止五六分筆法精隱可爲楷式生平所閱漢隸未有若是之小者而完好如新蓋不爲風日所剝泐且模印者尚寡故也乾道丁亥五月子堅書余每閱之恨不得見其碑石之正在何所然甚愛其伏羲神農黃帝堯之贊及曾子老萊子蘭之贊文旨精嚴簡古非後世所及如祝誦氏不知其爲沮誦或祝融帝魯字作帝侂殊可以證古辨今後因護漕攝憲梓部行部至賓州則此碑在州宅博雅堂下經兵火之後刻缺多矣制相

又輦運寘之明新士夫殊無識者余奉祠歸過渝爲學官言其事且以祖父所隸摸本付之令補完又未知其果否也因惜其漢隸存者寡矣一失其傳埋沒亡考故錄其碑而識其事以資考古君子之訪焉

梁高行 奉金者 使者 秋胡妻 衛將軍 蘭相如 騎都尉 休屠象 李氏遺孤 忠孝李善 朱明妻 姑娣兒 弟 章孝母 董永千乘人也 父邪渠哺父 榆母 蘭相如趙臣也奉壁於秦范且註第伏戲倉精初造王業畫卦結繩以理海內祝誦氏無所造爲未有者欲刑罰未施 神農氏因宜教田辟土種穀以振萬民 黃帝多所改造兵 裳宅 帝顓頊高陽者黃帝之孫而昌

子 帝侂高辛者黃帝之曾孫也 帝堯放勳其仁如天其知如神就之如日望之如雲 帝舜名重華夏禹長於地理泉陰隨 退爲 刑 曾子孝以通神明貫感祗著乎來方後世凱式 綱 閔子騫母居喪移寒御 老萊子楚人也事親至孝衣服斑連嬰兒之態令親有驩君子嘉之孝道大焉 丁蘭二親終後立木爲父鄰人假物報乃借與 管仲 齊桓公 曹子刳相 魯莊公 侍郎專諸炙魚刺殺吳王 荊軻 秦武陽 樊於其頭 右第二碑 使者 長婦兒 梁節姑女揀者 姑女其室失火取兄子往輒得其子赴火如亡示其誠也 後母子前母子 齊繼母 京師節女 怨家攻者 孝孫

葬者 湯父 乞漿者 義漿羊公 豫讓殺身以報知己 韓王 聶政 齊王 無鹽媼女鍾離春處士 縣功曹 右第三碑

圖四 學齋佔畢卷三

32 孝闕一。

33 葬闕一者。

34 孝孫。孝孫闕一父。白羊公至孝孫父、是梁節姑下一段。

次に、Ⅳ学斎佔筆の本文を紹介する。表三は、史繩祖の学斎佔畢卷三「古賢聖名」を掲げたものである（百川学海所収に拠る。表二に倣い、ⅠⅡの画像番号1―44を、本文中の当該榜題、題記の上に付す）。図四に、学斎佔畢原本の図版を掲げておく（百川学海に拠る）。

表三 学斎佔畢卷三

古聖賢名

余大父武陽府君、好古博雅、生平精於篆隸行草、殘碑斷刻靡不搜訪。自集隸格一冊、以補洪景伯漢隸之欠。其中有二節云、東州冢間得三碑、高広各五六尺、皆就石室壁間、刻古聖賢義夫節婦及車馬人物、其質樸可笑、然每事各有漢隸數字、字止五六分、筆法精隱、可為楷式。生平所閱漢隸、未有若是之小者。而完好如新、蓋不下為風日所剝泐、且模印者尚寡故也。乾道丁亥五月、子堅書。余每閱之、恨不得見其碑石之正在何所、然甚愛其伏羲神農

黃帝堯之贊及曾子老萊丁蘭之贊。文旨精嚴簡古、非後世所及。如祝誦氏不知其為沮誦或祝融、帝嚳字作帝咭、殊可以証古弁今。後因護漕撰憲梓部行部至資州、則此碑在州宅博雅堂下。經兵火之後、剝欠多矣。制榘又輦運真之明新、士夫殊無識者。余奉祠帰過渝、為学官言其事、且以祖父所隸模本付之、令補完、又未知其果否也。因惜其漢隸存者寡矣。一失其伝、堙沒亡考故、録其碑而識其事、以資考古君子之訪焉。

11 梁高行。奉金者。使者。

12 秋胡妻。

13 衛將軍。

138 藺相如。

28 騎都尉。休屠象。

27 李氏遺孤。忠孝李善。

26 朱明妻。姑娣兒。弟。

25 章孝母。

24 董永千乘人也。父。

23 邪渠哺父。

22 榆母。

38 藺相如趙臣也、奉壁於秦。

39 范且。右、第一碑。

1 伏戲倉精、初造王業、画卦結繩、以理海内。

2 祝誦氏無所造為、未有耆欲、刑罰未施。

3 神農氏因宜教田、辟土種穀、以振万民。

4 黃帝多所改、造兵、裳、宅。

5 帝顓頊高陽者、黃帝之孫、而昌子。

6 帝喾高辛者、黃帝之曾孫也。

7 帝堯放勳、其仁如天、其知如神、就之如日、望之如雲。

8 帝舜名重華。

9 夏禹長於地理、泉陰、隨、退為刑。

18 曾子孝、以通神明、貫感祇、著乎来方、後世凱式、

綱。

19 閔子騫母居、喪移、寒、御。

20 老萊子楚人也、事親至孝、衣服斑連、嬰兒之態、令

親有驩、君子嘉之、孝道大焉。

21 丁蘭二親終後、立木為父、隣人假物、報乃借与。

35 管仲。齊桓公。曹子刳桓。魯莊公。

36 侍郎。專諸炙魚。刺殺吳王。

37 荆軻。秦武陽。樊於其頭。右 第二碑。

14 使者。

15 長婦兒。梁節姑女。掾者。姑女其室失火、取兄子往、輒得其子、赴火如亡、示其誠也。

16 後母子。前母子。齊繼母。

17 京師節女。怨家攻者。

34 孝孫。

33 葬者。

31 湯父。

30 乞漿者。義漿羊公。

41 予讓殺身、以報知己。

42 韓王。聶政。

43 齊王。無塩媿女鍾離春。

44 処士。景功曹。(百川学海本)

最後に、V 武梁祠原石(拓本)の本文を紹介する。III の隸釈、IV の学齋佔畢は、宋代における武梁祠(拓本)の榜題を記録した文献なので、今その原石本文を紹介するに当たって、本文を単独で掲出するよりも隸釈、学齋佔畢、原石の本文を一つに纏め、比較対照して一覽としたものを掲げる方が、読者にとっては便利であろう。そこで、表四として、それら三本の対照一覽を掲げることにした。表四は、武梁祠原石の榜題、題記(主として長廣氏前掲書二部に拠る)の左に、四庫本隸釈、学齋佔畢のそれを配し、I II の図像番号を付して、対照一覽としたものである。隸釈、学齋佔畢は、同文のものを——線で表わし、原石と異同のあ

る場合はその文字を示す。×は、文字の無いことを表わす。
↑は、校勘注記を示し（複数に互るものには番号を付す）、
それらの注記は、図像番号を付して表末に一括した。

表四 武梁祠拓本、隸釈、学斎佔畢対照一覧

1 伏戯倉精、初造王業、画卦結繩、以理海内。 (原石)	1 伏戯倉精、初造王業、画卦結繩、以理海内。 (隸釈)
2 祝誦氏、無所造為、未有耆欲、刑罰未施。	2 祝誦氏、無所造為、未有耆欲、刑罰未施。
3 神農氏、因宜教田、辟土種穀、以振万民。	3 神農氏、因宜教田、辟土種穀、以振万民。
4 黄帝、多所改作、造兵井田、垂衣裳、立宮宅。	4 黄帝、多所改作、造兵井田、垂衣裳、立宮宅。
5 帝顓頊高陽者、黄帝之孫、而昌意之子。	5 帝顓頊高陽者、黄帝之孫、而昌意之子。
6 帝侖高辛者、黄帝之曾孫也。	6 帝侖高辛者、黄帝之曾孫也。
7 帝堯放勳、其仁如天、其智如神、就之如日、望之如雲。	7 帝堯放勳、其仁如天、其智如神、就之如日、望之如雲。
8 帝舜名重華、耕於歷山、外養三年。	8 帝舜名重華、耕於歷山、外養三年。
9 夏禹、長於地理、脈泉知陰、隨時設防、退為肉刑。	9 夏禹、長於地理、脈泉知陰、隨時設防、退為肉刑。
10 夏桀	10 夏桀

•
X
X

11 梁高行、奉金者、使者。

12秋胡妻、魯秋胡。

13 兄子、義姑姉、
姑姉兒、齊將軍。

衛
藺相如。

●
× × × × ×
× × × × ×
律——薩相如

●
× × × × ×
× × × × ×
律——薩相如

14 楚昭貞姜、使者。

15長婦兒、梁節姑姊、掾者、姑姊兒。姑姊其室失火、取兄子往、輒得其子、赴火如亡、示其誠也。

† 2

†
2

†
3

16 追吏騎、後母子、死人、前母子、齊繼母。

17 京師節女、怨家攻者。



18 曾子質孝、以通神明、貫感神祇、著号来方、後世凱式
 〇〇樵綱。譏言三至、慈母投杼。

[illegible]

×		×
×		×
無		×
		×
		×
		×
		×
		×
		×
		×
		×
		×

[illegible]

●
—
×
—
—
—
—
×
袒
—
乎

X		X
X		X
X		X
		X
		X
		X
		X
		X
		X
		X
		X

X		X
X		X
X		X
		X
		X
		X
		X
		X
		X
		X
		X

X		X
X		X
X		X
		X
		X
		X
		X
		X
		X
		X
		X

19 子騫後母弟、子騫父。閔子騫、与仮母居、愛有偏移、子騫衣寒、御車失捶。

喪

喪

$$\begin{array}{c} | \\ \times \\ | \\ \times \\ | \\ \times \end{array} \begin{array}{l} \dagger 3 \\ \dagger 4 \\ \dagger 5 \end{array}$$

• × × × × ×

30 義漿羊公、乞漿者。

• |

31 湯父、魏湯。

↑₁

• |

• | × ×

32 孝烏。

• | × ↑₁

• × ×

33 趙趙 (荀哺)。

• 葬者 ↑₁

• 葬者

34 孝孫父、孝孫、孝孫祖父。

• × × × × | × ↑₂

• × × × × | × × × ×

35 管仲、齊桓公、曹子劫桓、魯莊公。

↑₁

↑₂

↑₃

↑₄

• |

36 二侍郎、專諸炙魚、刺殺吳王、吳王。

• × ↑₁ ↑₂

• × | × ×

• × | × ×

37 荆軻、樊於其頭、秦武陽、秦王。

• |

• | × ×

38 藺相如趙臣也、奉璧於秦。秦王。

↑₁

• |

• | 壁 | × ×

39 范且、魏須賈。

• × × × ↑₁

• | × × ×

40 王慶忌、要離。

• × × × × ↑₁

• × × × ×

• × × × × ×

41 予讓殺身、以報知己。[↑]趙襄子。

• × × × × ×

• × × × × ×

42 韓王、聶政。

• [↑] × × × × ×

• × × × × ×

43 齊王、無塩媿女鍾離春。

• × × × × ×

• × × × × ×

〔44 処士、県功曹。〕

• × × × × ×

• × × × × ×

〔注〕 四本—四庫本、王本—王雲鷺本、汪本—汪日秀本、

③本—上記三本

2 [↑] 1 者、汪本「者」。

4 [↑] 1 ③本「闕三字」。

5 [↑] 1 ③本「闕二字」。

8 [↑] 1 汪本「耕於歷山、外養三年」。

9 [↑] 1 ③本「闕一字」。

[↑] 2 ③本「闕一字」。

[↑] 3 ③本「闕二字」。

12 [↑] 1 ③本「闕一人名」。

13 [↑] 1 兄子、義姑姉、原石上欄にあり。

[↑] 2 姑姉児、原石下欄にあり。

14 [↑] 1 ③本「闕一人名」。

15 [↑] 1 姑姉児、原石上欄にあり。

[↑] 2 3 姉、学齋佔筆「女」。

16 [↑] 1 ③本「闕二人名」。

18 [↑] 1 □□、石索三に、「以正」とし、「以正二字、辺尚存。故補之」と言う。

[↑] 2 讒言三至、慈母投杼、原石下欄にあり。

[↑] 3 ③本「闕二字」。

[↑] 4 ③本「闕一字」。

[↑] 5 ③本「闕二字」。

19 [↑] 1 2 3 4 5 ③本「闕一字」。

20 [↑] 1 萊子母、萊子父、原石下欄にあり。

22 [↑] 1 ③本「闕一人名」。

23 [↑] 1 邢、学齋佔筆「邪」。

26 [↑] 1 朱明児、原石上欄にあり。

[↑] 2 朱、王本「宋」。

[↑] 3 姑姉児、存疑。上層13下欄の「姑姉児」を、誤つてここに入れたか。

27 [↑] 1 李氏遺孤、忠孝李善、原石欠損、隸釈により補う。

28 [↑] 1 休屠像、原石欠損、隸釈により補う。

29 ↑ 1 〇本「闕一人名」。

31 ↑ 1 〇本「闕一字」。

32 ↑ 1 〇本「闕一字」。

33 ↑ 1 葬、〇本下に「闕一字」とあり。

34 ↑ 1 孝孫父、原石上欄にあり。

↑ 2 〇本「闕一字」。

35 ↑ 1 桓、四本汪本「桓」（北宋七代欽宗の名諱「桓」による欠

筆）、王本「相」。

↑ 2 桓、〇本「桓」。

↑ 3 4 桓、学齋佔筆「桓」。

36 ↑ 1 〇本「闕一字」。

↑ 2 郎、〇本下に「闕一字」とあり。

38 ↑ 1 璧、四本王本「壁」。

39 ↑ 1 〇本「闕二人名」。

40 ↑ 1 〇本「闕二人名」。

41 ↑ 1 〇本「闕一人名」。

42 ↑ 1 韓王、晷政、汪本にのみ存。

44 ↑ 1 処士、県功曹、原石二石第五層左（41—43下）にある榜題。

三

以上が前述Ⅰ—Ⅴの具体的内容である。Ⅰ—Ⅴを用いることで、私達は漸くfig. 5 fig. 6 (図一)をめぐり、女史の主張を客観的、学問的な検証の俎上に載せることが出来る。Ⅰ—Ⅴの内、ⅠⅡ (図二、表一)は、主として女史によるfig. 5 fig. 6 (図一)における、各図像を指す場合に

用いる（1—44の番号による）。また、ⅢとⅣ（表二と表三）とはⅤ（表四）に包摂されるので、原石、隸釈、学齋佔畢三本を纏めて扱う場合その他、専らⅤを用いることとし、必要に応じてⅢ（表二〈図三〉）、Ⅳ（表三〈図四〉）を参照する。

始めに、Ⅲ. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence 31頁に掲げられたfig. 5 fig. 6 (図一)を取り上げる。女史は、fig. 5 fig. 6の下で、両図の内容を簡単に説明して、次のように述べている。

・ fig. 5 (上) もし（我々が）洪适の拓本が、今日の石板に相当するものと仮定するならば、洪适の隸釈本文に記述された場面を、外見的に示す「武梁祠」の図式。

・ fig. 6 (下) 洪适の隸釈と比較した場合、史繩祖の学齋佔畢本文に記述された場面を、外見的に示す図式。隸釈のそれに現われる母親と共にいる曾子と、閔子騫の場面の後ろの人物像に対する標示が、学齋佔畢に見出だせない。二点において、学齋佔畢は、付加された本文をもつ。人物像の順序もまた、グレーで示されたように数箇所において変化している（31頁）

この説明から女史は、fig. 5 fig. 6において、武梁祠の概念図（図二）の上に隸釈及び、学齋佔畢の記述を投影することによって、二書の記述を視覚的に表現し、また、その

fig. 5 と fig. 6 を読者に見較べさせることで、隸釈と学斎
 佔畢の記述の大きく食い違っている、実際の様子を、読者
 に強く印象付けようとしていることが知られる。さて、女
 史の説明によれば、図一 (fig. 5 fig. 6) における黒（並び
 に、グレー。順序を表わすグレーの問題は、後述すること
 とし、ここではグレーも、暫く黒として扱う）の図像は、
 隸釈十六または、学斎佔畢の中に該当する記述が存するこ
 とを表わし、その逆に、白い図像は、該当する記述がない
 ことを表わすものである。今、図一に見える白い図像の数
 を図二、表一によって数えてみると、fig. 5 におけるそれ
 が五、fig. 6 におけるそれが十九、計二十四となる（但し、
 fig. 6 の十九図像中の六の図像には、部分的に黒い図像が
 混じる）。次の表五は、図一に見える白い図像に(1)―(24)の
 通番を付して、それらを図二、表一の図像番号、名称によ
 り、一覧としたものである（↑は、部分的に黒い図像の混
 じることを示す）。

表五 fig. 5 fig. 6 の白図像

fig. 5

- (1) 14 楚昭貞姜 (第三、二石一層)
- (2) 29 三州 (第三、二石二層)
- (3) 34 原谷 (第二石二層)

fig. 6

- (4) 40 王慶忌 (第二石三層)
- (5) 43 鍾離春 (第二石三層)
- (6) 10 夏桀 (第一石一層)
- (7) 12[↑] 魯秋胡妻 (第三石一層)
- (8) 14[↑] 楚昭貞姜 (第三、二石二層)
- (9) 16[↑] 齊繼母 (第二石一層)
- (10) 18 曾子 (第一石二層)
- (11) 19 閔子騫 (第一石二層)
- (12) 20 老萊子 (第一石二層)
- (13) 21 丁蘭 (第一石二層)
- (14) 24[↑] 董永 (第三石二層)
- (15) 26[↑] 朱明 (第三石二層)
- (16) 29 三州 (第三、二石二層)
- (17) 32 孝烏 (第二石二層)
- (18) 35 曹沫 (第一石三層)
- (19) 36 專諸 (第一石三層)
- (20) 38 蘭相如 (第三石三層)
- (21) 39 范且 (第三石三層)
- (22) 40 王慶忌 (第二石三層)
- (23) 42 聶政 (第二石三層)

(24) 44[†] 処士、県功曹 (第二石四層)

表五の(1)―(24)が隸釈、学斎佔畢に記述のない、武梁祠原石(拓本)の図像に当たる(なお全体が黒く表示される fig. 5 30 羊公図の中で、画面中央に置かれた壺と杓子だけが、fig. 6 において白く表示されている〈図一〉。冗談のように思えるが、仮に印刷ミスと見て、右表には上げない)。即ち、女史は、(1)―(5)の五図像が隸釈になく (fig. 5)、(6)―(24)の十九図像が学斎佔畢にないと主張している (1) (8) 14 楚昭貞姜、(2) (6) 29 三州、(4) (22) 40 王慶忌の三図像が隸釈、学斎佔畢に共通、fig. 6 の十を付した六図像のことは、後述する)。すると、原石と隸釈との違いは、約一割に留まるものの、学斎佔畢との食い違いは、四割強にも達することになる。また、それを学斎佔畢の側から見ると、隸釈が十六図像を増加させ、原石が十九図像を増加させているということがある。一体、宋代の記録と現状の内容が四割強、およそ半分近くも異なっているとしたら、それらがもはや同一のものであることすら疑われる。fig. 5 と fig. 6 とを見較べた読者はそこに、

2 洪适は武梁画像を偽造した

とする女史の主張を強力に裏付ける、この上なく堅固な証拠を見出だすことと思われる。ところで、隸釈と学斎佔畢

は、fig. 5 と fig. 6 とに示されるような大きな違いを、本当にもっているのであらうか。ここで、表五(1)―(24)の白い図像について、表四(また、表二、表三)を参照しながら、その信憑性を検証する。

さて、表五の fig. 5 (1)―(5)は、隸釈に記述がないとされる五図像である。そのことのおかしさがすぐに分かるのは、(5) 43 鍾離春である。43 鍾離春図は、fig. 6 に黒く、fig. 5 に白く表示されているが(表一)、鍾離春図に関しては、隸釈に、

齊王、無塩媿女鍾離春

という記述が見え(表二、図三)、それは学斎佔畢の記述と一字も違わない(表四)。つまり fig. 5 が誤っているのである。fig. 5 も黒くすべきであらう。因みに、隸続六にも鍾離春図が存し(揚州本標題「王、鍾離春」、四庫本「鍾離春」、汪日秀本「無塩媿女、齊王、鍾離春」、このことは動かない。(3) 34 原谷もおかしい。34 原谷図も、fig. 6 に黒く、fig. 5 に白く表示されているが、原谷図は、

・ 孝孫、孝孫_{字闕}父(隸釈)

・ 孝孫(学斎佔畢)

と記述され(表四)、両書に違いがないばかりか、隸釈の記述量の方が明らかに多い。即ち、fig. 5 と fig. 6 とは、全く矛盾している。fig. 5 も黒くすべきである。同様にお

かしいのが、(1) (8) 14 楚昭貞姜である。隸釈、学斎估畢における、14 楚昭貞姜図の記述は、

・使者 (隸釈)

・使者 (学斎估畢)

なので (表四)、両書のそれは全く同じである。ところが、fig. 5 の楚昭貞姜図は白く、fig. 6 は、左端の人物のみが黒い (図一)。何故このような、ちぐはぐなことが起きるのであろうか。おそらくその原因は、楚昭貞姜図における左端、屋外に跪く人物が、貞姜の許に洪水の報を齎した、楚昭王の「使者」であることに存し (列女伝四・10)、女史は恣意的に、fig. 6 の使者のみを、黒くしたものと思われる。すると、fig. 5 の使者を黒くすれば、(1) (8) の誤りを訂正出来るかと言うと、問題はそのような単純な方法では解決しない。と言うのは、隸釈 (学斎估畢) は一見、原石における「楚昭貞姜」題記を欠くかに見えるが (表四)、隸釈をよく見ると、洪适は、実はその欠落部分に、

闕二人名

の注記を付しているからである (表四 14 + 1、図三)。そして、このことは、洪适の見た拓本第三石の一層左端に、貞姜の図像が描かれていたこと、さらに、洪适にはその題記が判読出来なかったことを示している。すると、(1) 14 の隸釈の記述は、題記こそ明記しないものの、武梁祠原石と

殆ど同じ楚昭貞姜図のことを、述べたものとしなければならない。因みに、隸続六の楚昭貞姜図は、このことを証明するものである。そして、このことから、fig. 5 (1) は、完全な誤りであることが知られる。また、史繩祖 (史子堅) の見た拓本は、洪适の見た拓本と酷似していたらしいことが、例えば表四のあちこちに散見する証拠から、ほぼ確定出来る。だから、史繩祖 (史子堅) は、使者だけが描かれた楚昭貞姜図を見た訳でなく、洪适のそれと酷似する拓本を、見たものと考えられる。そして、その拓本の題記もやはり判読不能であったが、史繩祖は、洪适とは違って、そのことを態々注記しなかったであろう。従って、使者一人だけを黒くした。fig. 6 (8) も誤りである。fig. 5 (1)、fig. 6 (8) 共に、全て黒くすべきである。

ところで、前掲 fig. 6 の解説文中、女史が、

二点において、学斎估畢は、付加された本文をもつと指摘する、「一点において At two points」が、具体的に何を指すかということについて、女史は一切、説明していないが、それは、fig. 5 における白い表示が、fig. 6 において黒く変化したことを、意味するものである。そして、その要件に対応するのが実は、右に述べた、

(1) 14 楚昭貞姜

(3) 34 原谷

(5) 43 鍾離春

なのである(図一)。故に、それは、正確には二つでなく、三つであるが、図像全体が変化しているのは、(3) 34、(5) 43である。但し、fig. 5 fig. 6における、それらの表示が誤りであることは、前述した通りであり、それらの表示に基づく、女史の右の指摘もまた、当然の如く誤りとなろうことは、言うまでもない。

最後にfig. 5の、

(2) 29 三州

(4) 40 王慶忌

両図像は、fig. 6の(16) 29、(22) 40と共に、全てが白く表示されている(図一)。fig. 5 fig. 6において女史が採用したその処置に関しては、例えば表四の29、40で示した如く、隸釈と学斎佔畢が三州、王慶忌図についての記述を欠く所から、一見正しいかのように見える。しかし、先に隸釈(1) 14の記述について指摘した通り、洪适は屢々榜題、題記以外の注記を付けている。問題は、(2) 29、(4) 40両図像に関しても、洪适がその注記を付けていることで、表二(図三)。また、表四29+1、40+1を見ると、

・闕二人名 (29 三州図)

・闕二人名 (40 王慶忌図)

とある。この二注記は、両図像に伴う榜題の文字こそ読め

ないものの、29に「三州孝人(也)」、40に「王慶忌、要離」に相当する図像が、間違いなく描かれていたことを示している(隸続六参照)。このように隸釈の場合、図像の榜題、題記の記されていないことが、直ちに図像の描かれていないことを意味する訳ではないことに、今後共十分注意する必要がある。特に40王慶忌図の注記は、二人分の名前が読めないと言うのであるから、洪适は図二、第二石三層40の位置に、正しく二人以上の人物像を確認していたことが知られる。従って、fig. 5(2) 29、(4) 40両図像が白いのは誤りで、全て黒くすべきである。また、史繩祖が注記を省いていることも前述の如く、fig. 6(16) 29、(22) 40も黒くすべきであろう。

以上、隸釈を視覚化した図一のfig. 5(1)―(5)は、いずれも誤りで、全て黒くすべきである(fig. 6(8)(16)(22)も同じ)。女史によるfig. 5(1)―(5)が、そもそも学問的な手続きに則っていないことは、隸釈と学斎佔畢とが全く同じ記述を有する、例えば上述(1)(3)(5)の表示が(3)は三文字多い、fig. 5において白く、fig. 6において黒いことを見れば、直ちに判明する(1)は部分的)。即ち、女史によるfig. 5(1)―(5)(fig. 6(8)(16)(22))の表示は、最初から非学問的且つ、恣意的、意図的に誤られているのである。隸釈と学斎佔畢との比較の結果が、このように女史の手によって人為的に操

作されている、fig. 5を批評するならば、fig. 5 (fig. 6) を作成した女史の意図というものは、読者を洪适批判へとミスリードすること以外、およそ考えることが出来ない。

次に、図一fig. 6における、上掲(6)―(24)を検証する。(8)(23)については既述したので、ここで取り上げるのは、それらを除いた十六図像である。その十六図像中、まず誤りと言えないものから数えてみると、

(6) 10 夏桀

の一例だけである。確かにその10夏桀図は、隸釈に見える榜題「夏桀」の記述が、学斎佔畢には見当たらない(表四)。しかし、誤りではないことが、必ずしも正しいことを意味している訳ではない。このことは後述する。そして残るfig. 6の十五図像に関して言えば、その全てが何処かおかしいものばかりである。

まずfig. 6における十五図像中、明らかに誤りと分かるものが、七例を数える。その七例の図像を示せば、次の通りである。

- (9) 16 齊繼母
- (10) 18 曾子
- (13) 21 丁蘭
- (18) 35 曹沫
- (21) 39 范且

(23) 42 聶政

(24) 44 処士、梟功曹

右のfig. 6における七例の図像は、殆ど全てが白い(9)(24)二図像のみ、部分的に黒が混じる)。一方、その七図像をfig. 5で見ると、全てが黒くなっている。即ち、その七図像は、隸釈に記述があると、女史に見做されたのである。

ところが、奇怪なことに、隸釈におけるその七図像の記述は、学斎佔畢においてもまた、隸釈と全く同じないし、殆ど同じ記述が見出だされるのである(表四)。例えば21丁蘭図の隸釈、学斎佔畢の記述を示せば、次の通りである。

・丁蘭、二親終後、立木為父、隣人仮物、報乃借与(隸釈)

・丁蘭、二親終後、立木為父、隣人仮物、報乃借与(学斎佔畢)

隸釈と学斎佔畢とは、一字も違わないのみならず、両書は、誤字(歿を「後」と誤る)まで共有していることが分かる。即ち、fig. 6(13)21が誤っているのである。(13)21は、黒くすべきである。(18)35曹沫、(23)42聶政の二図像の場合も、全く同様である。なお18曾子図の隸釈、学斎佔畢の記述を示せば、次の通りである。

・曾子^{字闕}二孝、以通神明、貫感^{字闕}一祗、著乎^母朱方、後世凱式、^{字闕}二無綱(隸釈)

・曾子孝、以通神明、貫感祇、著乎来方、後世凱式、綱
(学斎佔畢)

隸釈は、一字分多いものの、両書が殆ど同文であり、纔かな異同を除いて、誤字(共に号を「乎」と誤る)や欠字なども、共通していることが明らかである。即ち、fig. 6 (10) 18が誤っている。(10) 18も黒くすべきである。

(9) 16、(24) 44は、†で示した如く、部分的に黒の混じる図像である。今、16 齊繼母図、44 処士、県功曹図の隸釈、学斎佔畢の本文を併せて示せば、次の通りである。

16 齊繼母

・闕二人名、後母子、前母子、齊繼母(隸釈)

・後母子、前母子、齊繼母(学斎佔畢)

44 処士、県功曹

・処士、県功曹(隸釈)

・処士、県功曹(学斎佔畢)

右を見ると、例によって隸釈、学斎佔畢の本文には一字の違いもない。また、16 齊繼母図の場合、原石の「追吏騎」と「死人」の二標題の欠けていることも、両書に共通する(表四)。ところが、fig. 5における16 齊繼母図、44 処士、県功曹図は、全ての図像が黒いにも関わらず、fig. 6における(9) 16は、左端の齊繼母一人のみが黒く、(24) 44は、左の県功曹が黒くされているだけで、残った右の図像は、全て

白くなっているのである。全く同文の資料から作られた筈の二つの図版、fig. 5とfig. 6とが、このようにちぐはぐな表示となる結果は、どのように考えてもおかしい。特に44 処士、県功曹図など、隸釈、学斎佔畢共に、処士(図二第二石四層右)と県功曹(同左)との二人のことを記述しているのに、fig. 5 fig. 6におけるその図像は、全て黒くすべきことが明白である。即ち、fig. 6 (24) 44は誤っており、全てを黒くすべきなのである。(9) 16も同様である。

最後に、(21) 39 范且も到底承服し難い。39 范且図は、図一 fig. 5においては黒いが、fig. 6においては白い。原石、隸釈、学斎佔畢 39 范且の本文を示せば、次の通りである。

・范且、魏須賈(原石拓本)

・范且、闕二人名(隸釈)

・范且(学斎佔畢)

隸釈と学斎佔畢は、全く同文ながら、共に魏須賈の名前を欠いている(表四)。隸釈の「闕二人名」は、そのことを示すものである(隸続六には、范且の左に二人の人物が描かれ、揚州本、四庫本には一つ、汪日秀本には二つの空格が置かれる)。右の学斎佔畢の記述をfig. 5に投影するなら、例えば右端范且が白いことなど、どう考えてもおかしい。つまりfig. 6 (21) 39は、誤っているのである。(21) 39は、fig. 5に倣い、黒くすべきである。

さて、表五における右記(9)(10)(13)(18)(21)(23)(24)は、全て誤りである。それら七図像は、本来fig.5と同じく、黒くすべきである。それらがfig.5と異なつて、白く表示されるべき学問的根拠などというものは、何処にも見出だすことが出来ない。図一fig.6においてそれらを態と白く表示した、女史の動機を取って推測するならば、女史がそのように表示したかったという、殆ど非学問的な事実しか見えてこない。即ち、女史は、fig.6における、本来的には黒い筈の七図像を、白へと操作することによつて、fig.5との違いを際立たせようとしたのである。その目的は、隸釈と学斎佔畢との間に、架空の矛盾を生じさせ、隸釈つまり洪适の欺瞞を暴くことで、

2 洪适は武梁画像を偽造した

ことの視覚的印象を、読者に深く植え付けることにあつたと思われる。

次いで、fig.6における十五図像中、残る八図像は、女史がそれらを白く表示していることに、疑問が残るものばかりである。まず次の四図を検証する。

- (11) 19 閔子騫
- (12) 20 老萊子
- (19) 36 專諸
- (20) 38 藺相如

右の四図像は、いずれもfig.5で黒く、fig.6で白く表示されている。これを見た読者は、それらの四図像を当然の如く、学斎佔畢にないものと解釈することであろう。しかし、右の四図像は、本当に学斎佔畢にないのであるか。例えば20老萊子図の隸釈、学斎佔畢の本文を示せば、次の通りである。

・老萊子楚人也、事親至孝、衣服斑連、嬰兒之態、令親有驩、君子嘉之、孝道大焉。萊子母、萊子父(隸釈)
・老萊子楚人也、事親至孝、衣服斑連、嬰兒之態、令親有驩、君子嘉之、孝道大焉(学斎佔畢)

両書の記述は、全く同文であり、誤字(「莫」を「道」と誤る)まで共有しているが、ただ学斎佔畢には、隸釈の——線部「萊子母、萊子父」がない。それは、——線部の榜題が原石の画中でなく、下欄に記されているため(表四20+1)、おそらく学斎佔畢が判読し損つたものと思われる。そして、fig.6(12)20が白い理由も、学斎佔畢における、——線部の欠落によるものであろう。ところで、学斎佔畢に——線部のないことは、fig.6に示される如く、史繩祖(史子堅)の見た拓本に、老萊子図がなかったことを意味しているのであろうか。そのように荒唐無稽なことは、一寸考え難い。人物榜題を欠いてはいるが、題記を存する以上、学斎佔畢はやはり、隸釈と同じ老萊子図のことを、記

したものと考えらるべきであろう。従って、fig. 6 (12) 20 は誤っており、黒くすべきである。また、人物榜題「子鵞後母弟、子鵞父」を欠くが、題記を存する、fig. 6 (11) 19 関子鵞についても、全く同様のことが指摘出来る（表四 19）。

(19) 36、(20) 38 のケースもよく似ている。例えば 36 専諸図に関する隸釈、学斎佔畢の本文を示せば、次の通りである。

・^字闕 侍郎^闕、専諸炙魚、刺殺吳王、吳王（隸釈）

・侍郎、専諸炙魚、刺殺吳王（学斎佔畢）

両書は、同文であり、共に二侍郎の「二」を欠く他（表四 36）、学斎佔畢は、——線部「吳王」も欠いている。この 36 専諸図の表示が、fig. 5 において黒く、fig. 6 において白いの、どう見てもおかしい。単なる人物榜題「吳王」のないことが、史繩祖（史子堅）の見た拓本に、専諸図のないことを、直ちに意味する訳ではないからである。故に、fig. 6 (19) 36 は誤っており、黒くすべきである。さらに fig. 6 (20) 38 蘭相如についても、全く同じことが指摘出来る。以上のことから、fig. 6 における、(11) 19、(12) 20、(19) 36、(20) 38 の四図像の表示は、いずれも誤りであることが知られよう。

最後に残るのが、fig. 6 の左の四図像である。

(7)[†] 12 魯秋胡妻

(14)[†] 24 董永

(15)[†] 26 朱明

(17) 32 孝烏

この四図像の場合は、部分的に黒が混じる（†）など、少し厄介である。なるべく簡単な検証を試みよう。

(7) 12 魯秋胡妻に関する隸釈、学斎佔畢の本文を示せば、次の通りである。

・^闕一人名。胡妻、秋胡（隸釈）

・秋胡妻（学斎佔畢）

学斎佔畢は、確かに夫の魯秋胡子の名前を欠いているので（列女伝五・9）、fig. 6 が夫の部分の白くしていることは、強ちに間違っているのではない。とは言え、学斎佔畢の人物榜題を判読し損ねた可能性も高いから、そのことが正しいとは言えない。24 魯秋胡妻図に関しては武梁図像の他、武氏祠前石室、和林格爾後漢壁畫墓、四川新津後漢石棺等、夫を省く類例のないことから、史繩祖（史子堅）の見た拓本には、妻に向き合う夫の秋胡子が描かれていたものと考えたい。すると、fig. 6 (7) 12 も黒くすべきである。

次に、fig. 6 (14) 24、(15) 26 の二図像は、いずれも何処がおかしい。24 董永図、26 朱明図の原石（拓本）、隸釈、学斎佔畢の本文を示せば、次の通りである。

24 董永

・永父、董永千乘人也（原石）

・永父、董永千乘人也（隸釈）

・董永千乗人也、父（学斎佔畢）

26 朱明

・朱明、朱明弟、朱明兄、朱明妻（原石）

・朱明、朱明弟、朱明妻（隸釈）

・朱明妻、⁽¹³⁾ 姑姉兄、弟（学斎佔畢）

さて、24 董永図は、学斎佔畢が永父の「永」字を欠く以外、隸釈と学斎佔畢とに殆ど違いがない。にも関わらず、図一 ⁽¹³⁾ のにおける 24 董永図が黒く、⁽¹⁴⁾ の 14 24 の右側（鹿車、樹、子供）が白いのは、どういうことなのであるうか。一見した所、全く訳が分からない。強いて推測するに、⁽¹⁴⁾ の 14 24 は始め、鹿車に乗る永父即ち、董永の父親を白くしようとしたが、それを誤って、父の右側だけを白くしてしまったものらしい。そのように推測される理由は、学斎佔畢原本（百川学海本）における、永父の「父」字が、極めて判別しにくい上に、本文も、

董永千乗人也、父邪渠哺父

と、「邪」字やその区切り方まで間違えていて（図四）、「父」字が恰も、次の 23 邪渠図の本文の如くに見えてしまうからである。加えて、23 邪渠図の本文にも、「渠父、邪渠哺父」（原石。表四 23）と「父」字が二度も出現するため、「父」字の永父を指すが、尚更分かりにくくなっている。しかし、学斎佔畢は、第三石二層の図像（22—

28）を、左から記述しているので（後述）、件の「父」字は、永父を指すことが確認されるのである。おそらく女史は、その「父」字を確認し損ったものと思われる。そして、学斎佔畢に永父の記述がないものとして、⁽¹⁴⁾ の 14 24 の董永の父を、白くしようとしたのであろう。ともあれ、14 24 は明らかに誤っており、全てを黒くすべきである。次に、26 朱明図の場合、まず隸釈に、人物榜題「朱明兄」が欠けている。それはおそらく、洪适が上欄に記された榜題を、見落としたものと思われる（表四 26 + 1。隸続六参照）。

また、学斎佔畢に、人物榜題「朱明」が欠けている。朱明弟の、「朱明」二字もない。さらに、その「姑姉兄」には疑問が残り、上欄の「朱明兄」を誤読したか、或いは、上層 13 魯義姑姉図、下欄の「姑姉兄」を、誤ってここに入れた可能性もある（表四 26 + 3、13 + 2）。今仮に、それを朱明兄の誤写とすれば、結局、26 朱明図における四人の登場人物の内、隸釈には朱明兄の記述がなく、学斎佔畢には、朱明の記述がないことになる。そこで、図一を眺めてみると、⁽¹⁴⁾ の 26 朱明図は、全てが黒いので、隸釈に記述のない朱明兄（右から三人目）が誤っている。それはさて置き、⁽¹⁴⁾ の 15 26 は、左端の朱明妻が黒いだけだから、学斎佔畢に記述のある朱明弟（右から二人目）と朱明兄とが、誤っていることになる。そもそも女史のように、図版を作

成する原則を設けることなく、図像内部における個々の人物像を恣意的に黒く、また、白くするような作業は、学問的に全く無意味である。一方、26朱明図は、日本にのみ伝存する完本孝子伝に基づく、類例が一点もない極めて貴重なものであって、fig. 6 (15) 26など、学齋佔畢が隸釈とは異なる図像のことを、述べたものとは到底考え難いから、fig. 5 26に併せて、全て黒くすべきであろう。

最後に、fig. 6 (17) 32孝鳥は、日本の孝子伝にしか典拠の残らないことや、32孝鳥図の稀少なことなど、先の朱明図と状況がよく似ている（但し、32孝鳥図は、和人格爾後漢壁画墓にただ一例、「孝鳥」と榜題される、非常に貴重な類例が見出だされている）。32孝鳥図は、原石に「孝鳥」、隸釈に、

孝闕
字闕一

とあって、隸釈は「鳥」字を欠く。そして、学齋佔畢が32孝鳥図の記述を欠いているので（表四32）、女史がfig. 5 32が黒く、fig. 6 (17) 32が白く表示されていることは、一面において正しい。しかし、史繩祖（史子堅）の見た拓本に、実際32孝鳥図がなかったかと言うと、例えば32孝鳥図に続く、左の趙荀図を隸釈、学齋佔畢両書が共に、

・葬闕一者（隸釈）
字闕一者（隸釈）

・葬者（学齋佔畢）

と全く同じ二字に読み誤っていることなどから考えて（原石は、「趙荀哺父」か）、両書は、同じ拓本のことを述べている可能性が非常に高く、すると、学齋佔畢が単に、「孝鳥」二字ないし、「孝」一字（隸釈）を落としただけのこともかもしれないのである。そして、全く同じことは、表五fig. 6の始めに触れた、(6) 10夏桀についても指摘出来るのだが、ここでは一先ず、女史のfig. 6 (17) 32の表示に従っておきたい。

さて、以上が表五fig. 5 fig. 6 (1)―(24)の検証結果である。まず図一fig. 5における白い表示、表五(1)―(5)は、全て誤っており、黒く表示すべきである。即ち、隸釈卷十六の記述は、ほぼ完璧に原石（拓本）と一致する。次に、fig. 6における白い表示、(6)―(24)も、殆ど全て誤っていて、

(6) 10夏桀

(17) 32孝鳥

を除き、残る十七図像に関しては、全て黒く表示すべきである。即ち、学齋佔畢の記述もまた、殆ど完全に原石（拓本）と一致している。換言すれば、図一fig. 6において、白く表示すべきは(6) 10、(17) 32の二図像のみとなる。故に、実際問題として、そのような図表を作ることには、殆ど意味がない。にも関わらず、女史は、資料を恣意的に解釈し、データ（表二、表三）を改竄することによって、fig. 5に

五、fig. 6に十七、計二十二に及ぶ、虚偽の白い図像を現出させた。この二十二という数こそは、それらが単なる誤りなどというものでなく、故意に誤られたものであり、捏造されたものであることを、如実に物語る証左と言える。

このように事実と無縁のfig. 5 fig. 6は、学問的な装いを取っているが、そこに表示されている実体は、客観的事実などでなく、女史の願望、妄想と判断されるものである。そして、女史の願望は、とにかく武氏祠を批判することであり、それは、武氏祠研究の基礎を形作った偉大な先人、洪适と黄易という二本柱を批判すること、即ち、洪适批判と黄易批判から構成されている。女史は、I. Introductionにおいて、黄易による武氏祠の発見への言及に先立ち、次のように述べていた。

実際、驚く程多くの学者が彼等自身、新たに開かれた墓の中で見出だされた資料から、彼らは注意深くずっと情報を得続けているので——特に宋時代及び、その後において——一つには、疑いなく、過去というものを「復元する」ことと、「再刻する」ことは可能であると考えていた。³⁴ (57頁右)

34・〔略〕

女史にとって、武氏祠は復元 restoring やれ、再刻 recarv-

ingされたものとして批判されなければならない、その張本人の一人である洪适も当然、批判されなければならないかった。図一 fig. 5 fig. 6について、私達がこれまで専ら責めてきたのは、fig. 6における女史の白い表示であるが、しかし、女史が責めているのは、決してfig. 6におけるその白い表示ではないことに注意しなければならない。女史が責めているのは、主としてfig. 6の白い表示に対応する、fig. 5の黒い表示、並びに、fig. 6の黒い表示に対応する、fig. 5の白い表示なのである。前者は、隸釈が学斎估畢に加えた図像で、その数は十六、後者は、学斎估畢から省いた図像で、三となり、その計十九図像が結局、洪适の改変した結果として、fig. 5 fig. 6において批判されているのである。女史はまた、I. Introductionにおいて、次のように述べている。

実際に、あからさまな偽造に加えて、文学的、芸術的な所産における、「空白を埋める」(補闕)という、極めて注目すべき、中国の伝統が存在している。³²

(57頁右)

32・〔略〕

女史は、証拠に基づいて失われたものを補うことを指す「補闕」という学術用語を、本来の意味とは全く異なる、

極めて非学問的、否定的な意味で捉えている。即ち、女史の言う「補闕」は、偽造及び、その延長線上にあつて、偽造よりなお悪質な、学問的事実に見せ掛けた捏造を意味している。そして、洪适の改変に掛る十九図像が、正しく女史の言う「補闕」の所産なのである。女史が fig. 5 fig. 6 において白、黒（グレー）を変化させる視覚のトリック効果を通じ、読者の目に示そうとしたのは、学問の美名の下に隠された、洪适の欺瞞の実態——全体の半数近くが洪适により偽造されている、武梁画像の様子であったに違いない。女史は、洪适批判の願望を実現すべく、fig. 5 fig. 6 を読者の前に提示した。その後、女史が必要とするのは、読者の信頼だけである。故に、もし読者が無批判に、fig. 5 fig. 6 を事実として受け入れるならば、女史の願望が満たされることになる。そして、女史による、

2 洪适は武梁画像を偽造した

という主張が、承認されることになるだろう。だから、私達は、女史の主張を鵜呑みすることのないように、まず基礎的研究の立場へ戻ることを、今後も忘れないようにしたい。さて、上掲の表一―表五、図二―図四などは、そのような立場から準備したもののだが、例えば fig. 5 fig. 6 の検証の結果、判明したことは、女史の主張は、願望であつて、学説ではないということである。それは、女史の主張が事

実つまり、証拠に基づくものではないからである。例えば fig. 5 fig. 6 において、女史が白く表示した二十四の図像（表五）は、その殆どが——fig. 6 (6) 10 夏桀、(17) 32 孝烏を学齋估筆の書き落としと見做せば、その全てが——事実に対し、誤った表示であることは、前述の通りである。そして、その願望が如何に強力であろうと、事実に対し、証拠の支えをもたない限り、それは女史の妄想に過ぎない。だから、fig. 5 fig. 6 における白い図像は、女史の妄想の産物と呼ぶことも出来よう。奇妙なことにここでは、女史の主張自身が証拠の顔をもち、証拠が主張の顔をもっている。妄想の妄想たる所以である。

四

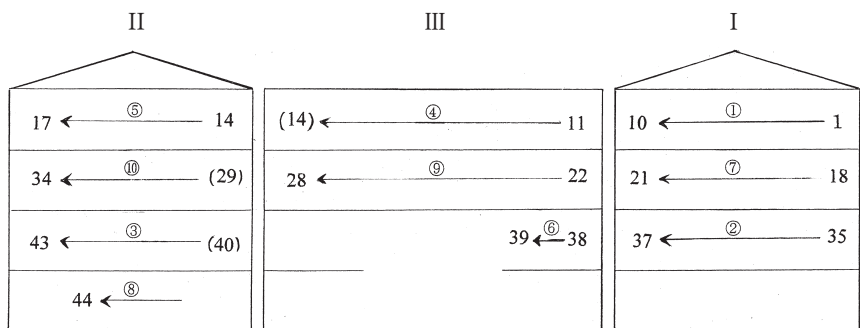
図一 fig. 5 fig. 6 における、白い表示が誤りであることは明らかだが、次いで、女史が、

史繩祖の記載事項は、幾つかの（しかし、全てではない）場面が、異なった順序でリスト化されていて、彼は、明らかに一つの場面を異なった石へと割り当てた

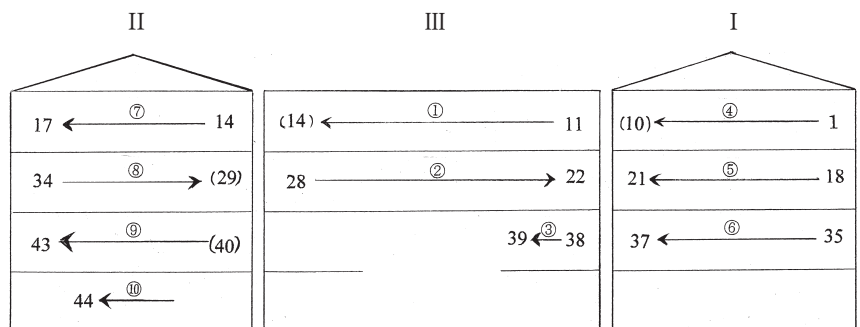
（532頁右）

と指摘し、また、fig. 6 の説明に、

人物像の順序もまた、グレーで示されたように数箇所において変化している



(隸釈十六)



(学齋佔畢三)

図五 武梁画像記載順一覧

と述べた、fig.6における、グレーの表示について検証する（隸釈と異なる石に配された「一つの場面」に関しては、後述）。さて、fig.6におけるグレーの表示とは、中央の第三石一、二層、左の第二石一―四層の表示のことである。それがグレーであることは、史繩祖によるその層の記載の順序が、洪适による当該層の記載の順序とは、異なっていることを示している。女史のその主張は、例によって非常に不親切なもので、読者にはfig.6における、グレーの表示の結果だけが提示され、その結果に至るまでの余の情報については、一切開示されていない。だから、読者は、fig.6の第三石一層のグレーの表示が、例えば隸釈と学齋佔畢本文の、どのような記載順序の違いによってそうなったのかというような、具体的根拠に関しては、全く知る術がない。そして、ただ一つ許されていることは、結果を受け入れることだけである。女史の主張は、この点においても学問的、科学的とは言いがたく、甚だ独り善がりなものである。かくて、私達は、隸釈、学齋佔畢における、記

載順序の再確認という原点に立ち返る必要がある。

隸釈並びに、学斎佔畢における記載順序は表二、表三によって、その具体的な順序を確認することが出来る。そして、図五は、それに基づき、隸釈及び、学斎佔畢に記述された、武梁祠三石各層における図像の記載順序を、それぞれ概念図化して、一覧としたものである。図五の上が隸釈下が学斎佔畢の記載順序を、それぞれ示している（ローマ数字Ⅰ―Ⅲは、武梁祠三石の石番号、層中のアラビア数字1―44は、武梁祠の図像番号〈図二、表一〉で、原則として各層右端の数字が、始まりの図像、左端の数字が、終わりの図像を示し、両数字間の矢印が、その層における記載の進行方向を表わしている。丸数字①―⑩は、層毎の記載順序を示すものである）。

図五を見ると、隸釈と学斎佔畢との記載順序は、例えば隸釈が第一石一層から記述を開始するのに対し、学斎佔畢は第三石一層から記述を始めるなど、全くと言って良い程一致していない。中で、女史がグレーを用いて読者に示そうとした、両書間における記載順序の違いというのは、武梁祠三石各層の記述相互間に見える、記載順序の違いのことで、即ち、図五の上下間における、矢印の向きの違いのことを指している。

図一fig.6において、女史がグレーに表示するのは、左

から、

第二石一層

二層

三層

四層

第三石一層

二層

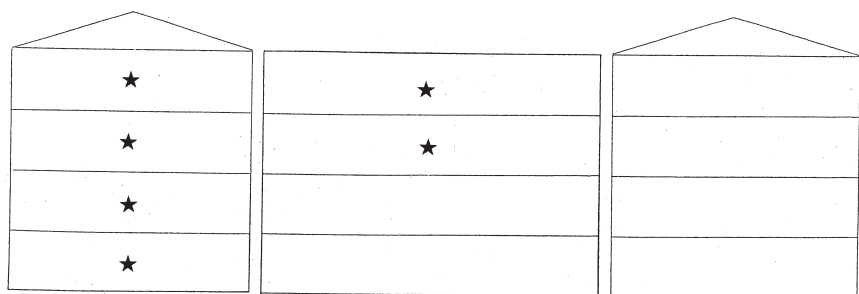
の六層分である。つまり女史は、学斎佔畢における武梁祠三石全十二層の記載の内、半数に当たる六層の記載順序が、隸釈と異なると主張しているのである。ところが、図五を見れば分かるように、学斎佔畢の記載順序が隸釈と一致しないのは、

第二石二層

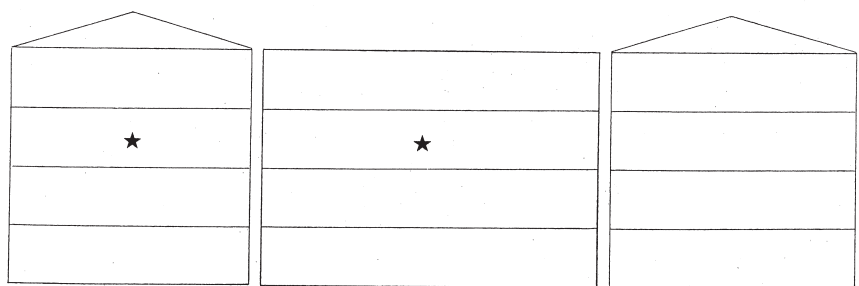
第三石二層

の二層分に過ぎないのである。今fig.6におけるグレー表示と、図五においてグレーに表示すべき右の二層とを、黒星(★)に代えて見易く図示すれば、図六のようになる。

図六を見ると、殆ど信じ難いことに、実際はただ二つの黒星に過ぎない、両書の記載順序の違いというものが(図六下)、女史の手によって、その三倍の六つの黒星にまで、増やされてしまっていることが知られるであろう(図六上)。即ち、女史は、同じ記載順序を示す第二石一、三、



(fig. 6)



(図五)

図六 fig. 6と図五のグレー表示

四層、第三石一層の四層分のデータを作為的に操作することによって、本来のデータとは逆に、異なる記載順序をもつものへと改竄し、fig. 5つまり隸釈との違いを殊更、際立つものに変えたのである。fig. 6のグレー表示において、女史の作為性を端的に物語る例が、第二石四層の44処士、県功曹図の表示法であろう。四層に一図を存するのみの、その記述は、

- ・ 処士、県功曹（隸釈）
- ・ 処士、県功曹（学斎佔畢）

という、何の変哲もないもので、fig. 5 fig. 6 共に、黒く表示すれば良いだけの図像である。ところが、女史はまず、それをグレーに変えている。第一の誤りである。次に、女史はまた、その右半分（処士）を白へと変えた。第二の誤りである。かくて、fig. 6の44処士、県功曹図は、グレーと白とで表示され、二重に誤ったメッセージを、読者に送っているのである。fig. 6 44のような手の籠んだ誤りが、単純な誤りから生じることは、一寸考え難い。fig. 6 44は、作為があつて始めて、可能となる表示法なのである。大体、作為がなければ、fig. 6 44の左半分、県功曹がグレーなのに、どうして右半分の処士を、白く出来ると言うのであろうか。

また、女史が、

彼〔史繩祖〕は、明らかに一つの場面を異なつた石へと割り当てた

と述べるのは、学齋佔畢の13魯義姑姉と28金日磾との間に挿入された、次の記述のことを指している。

¹³衛將軍、

藺相如、

²⁸騎都尉、休屠象

右の——線部「藺相如」は一見、13魯義姑姉図の次に、藺相如图があつたかのように見える記述となつてゐる。しかし、学齋佔畢は、右のすぐ後、22柏榆の次に、

³⁸藺相如趙臣也、秦壁於秦

と、38藺相如图のことを記している（表三、図五下）、史繩祖（史子堅）の見た拓本には、藺相如图が二図あつたことになり、それは明らかにおかしい。そして、右の——線部は、どうやら学齋佔畢の誤記らしいことが、その記載順序から判明するのである。図五下を見ると、学齋佔畢は、矢印の①②③の順に記述を始めているが、①から②へ折り返す時、誤つて②を飛ばし、③へ行つたものとすれば、13魯義姑姉図の次は、38「藺相如（趙臣也）」となるであらう（14楚昭貞姜の記述は欠）。そして、「藺相如」まで書いて誤りに気付き、②へ戻つたものとする、丁度その続きが、28金日磾図に当たることになる。——線部「藺相如」

三字はこのようにして、13魯義姑姉図と28金日磾図の間に残されたものと考えられる。学齋佔畢はその後②から③へ折り返し、38藺相如图のことを再度、記述しているので、——線部は、削除されなければならなかつたが、おそらくそれが忘れられたものであらう。従つて、学齋佔畢は、女史が言うように、38藺相如图を隸釈とは「異なつた石へと割り当てた」訳ではないし（図五下、38）、ましてやその誤記が、女史の企図する洪适の批判へと、繋がる筈はない。

前掲、III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence⁵³²頁右—⁵³³頁左における、女史による学齋佔畢を通じた洪适批判の後半部分を、改めて示せば、次の通りである。

その上、史の石はひどく傷んでしまつており、ところが、約五世紀後、黄易によつて発見されるそれらは、殆ど全て驚くばかりに良い状態であつた。同じ石が、山東から四川へと運搬され、そして、一七八六年に武宅山の遺跡へ出現するために、その後山東へ戻つたというようなことが、どの位あり得るか？ 見事な拓本、或いは、石それ自体が既に史のコレクション中に備わっている時に、どのような見込みのある動機が、その二つの旅を思い付かせ得たのか？ そのような記録を比較することにおいて、幾人かの中国の金石学の

専門家は、史繩祖の著述中の一つの記載事項が、二つの遺跡について記述しているに相違なく、そして、第二の場所にある記念建造物が、武梁の拓本中に出て来るものと殆ど全て同じ榜題をもつ人物を、適々含んでいただけのことであると、結論付けることを強いられている。²¹ 三人の明の文学者達——楊震（一四八八—一五九九）、曹学佺（一五七四—一六四七）、そして、梅鼎祚（一五五三—一六一九）——は、史繩祖によって言及された画像石が結局、「資州からの古い石碑〔資州古碑〕」と呼ばれるようになったことを、我々に知らしめる。²²

21・金石萃編、卷20、par.7に記録された、王の評言及び、容庚、『漢武梁祠』、4b頁を参照せよ。王は、史繩祖の記載事項を二つの部分に分けた。第二の部分について、王は、「なおもう一つの画像に言及する」と言った。

22・史繩祖と結び付けられた、二つの四川の石に関連する資料は、次の通りである。(1)楊慎、金石古文、卷14、201頁。それはまた、我々の目を史子堅の隸格へと向かわせる（楊の時代にはまだ現存していたか?）。(2)曹学佺、蜀中広記、卷8、40頁。(3)梅鼎祚、東漢文

紀（四庫本）、卷32/36b。そして、(4)資中県統修資州志、吳鴻仁その他編、（台北、学生社、一九六七。一九二九年版の複製）、卷1「古跡」、33頁（Western）。或るものは、黒い精霊（倉精）よりむしろ、文字の発明者、蒼頡のこととしているものの、四つの全ての本文が、現在我々が武梁の発見物に見るのと同じ、賢王伏羲の標題を引用している。同様に、資州の地誌は、史繩祖の本文に記されたものと同じ榜題を伝える、賢王の画像のある石が、「今や二つ共失われた」と言っている。二つの石の一つはそこで、「古い」、第二の石は、「漢代の」と記載されている。九人の王に付けられた榜題はまた、淮南子の修務訓の章に見える記述を想起させる

女史はまず、史繩祖（史子堅）の見た石が、黄易の発見した原石より余程、傷んでいたことを上げて、原石に対する疑念を表明している。このことは、とにかく女史が、史繩祖の資州で見掛けた碑と武梁祠原石とを、同一視していることを示しているが、その二つが同じものである保証は何処にもないし、むしろ別物と見るべきことは、後述する如くである。さらに原石との関係で言えば、史子堅自身が、
而完好如_レ新、蓋不_下為_二風日_一所_レ剝_レ剥_レ、
と述べていることの方を、重要視すべきであろう。また、

例えば前掲の表四を見れば分かるように、原石が学齋佔畢や隸釈などの記録類を凌ぐことは、当然のことながら、なお一方で、27李善図、28金日磾図の如く、原石の損傷によつて、もしそれらの記録によらなければ、もはや元の図像を窺い知ることの出来ないケースがあることに、注意すべきである。

次いで、女史は、学齋佔畢に、「至資州、則此碑在州宅博雅堂下」とあることを根拠として（資州は、四川省資中県）、武梁祠が一旦、四川に運ばれた後にまた、山東に戻された可能性に言及するが、およそそのようなことは考えられず、如何にも荒唐無稽な女史の想像に過ぎない。定庵類稿や学齋佔畢は、非常に貴重な資料であるが、長い時を隔てた記録であるため、今となつては確認し難い記述も多い。学齋佔畢の記述の解釈として、女史が本文と注21に上げているのは、王昶の金石萃編及び、容庚の『漢武梁祠画像録』である（注21のpar. 7不明。また、容庚書の丁数表示、p. 4Dは、3丁表〈p. 3a〉の誤り）。金石萃編二十の本文を示せば、次の通りである。

又史氏学齋佔畢述及此碑。前云、東州冢間得三碑。是指此碑。後云、護漕撰憲梓部行部至資州、則此碑在州宅博雅堂下。經兵火之後、剽闕多矣云云。此另是一種画像、並非此碑。蓋剽闕既多、一時不及

細弁、遂誤以為即此碑耳

容庚はまた、その「漢武梁祠画像考釈」二「武梁祠画像旧拓本之流伝」3丁表に、学齋佔畢を引用した後、

案此跋有誤、王昶云

として、上掲金石萃編の本文を引いている。王昶並びに、容庚の述べていることは、極めて尤もなことであつて、今日にあつても、それ以上のことを言うのは難しい。従うべきであろう。

さらに、武氏祠の四川への旅にこだわる女史は、史繩祖の言及する碑が明代、資州古碑と呼ばれた経過を詳述する。注22の(1)―(4)に上げられた、金石古文以下四書の本文を示せば、次の通りである。

(1) 金石古文十四（明、楊慎）

漢資中古碑伏羲贊見史子堅隸格

伏羲倉精、初造工業、画卦結繩、以理海内内音越

(2) 蜀中広記八（明、曹学佺）

写韻樓記、資中古碑、有祝融氏祝誦氏之号。学齋帖

碑云、資州掘地、得漢碑。有伏羲倉頡、初造工業、

画卦結繩、以理海内等語

(3) 東漢文紀三十二（明、梅鼎祚）

漢資中古碑伏羲贊見史子堅隸格

伏羲蒼精、初造工業、画卦結繩、以理海内内音越

(4)資中県統脩資州志一疆域、古跡金石附

資中古碑 (写韻樓記) 資州古碑、有祝融氏祝誦氏

之号。今佚。

漢碑 (学齋帖碑) 資州掘地、得漢碑。有伏羲倉

頤、初造工業、画卦結繩、以理海内等語。今佚

(1)―(4)四書は、相互に関連しているので、今それを整理すると、(3)は(1)を引いたものであり、また、(4)は(2)を引いたものであることが知られる。すると、問題にすべきは、(1)金石古文と(2)蜀中広記の二書ということになる。さらに、その二書は、(1)が史子堅の隸格を引用したものらしく、(2)が写韻樓記なる本と学齋估畢を引用したものとなっている。そして、学齋估畢を除く隸格、写韻樓記は、散逸してしまっている、目下上記(1)(2)の本文以上の情報を得ることは、甚だ難しい。ともあれ、(1)金石古文と(2)蜀中広記から知られることは、明、或いは、宋の時代、資中古碑と呼ばれる、武梁祠第一石一層2祝融図の題記とよく似た賛を記す、碑があったらしいということだけである。その碑もまた、既に失われてしまっている以上(4)、女史が指摘するような、武梁祠との関係は、もはや不明とするしかないし、学齋估畢との関係においてもまた、不明とすべき部分が多い。強いて言えば、それは武梁祠原石と直接関わるものではないであらう。

ところで、今日の武氏祠研究から見ると、殆ど意味をもたない参考資料(1)―(4)を、強引にも学齋估畢と結び付け、殊更に詳論する女史の意図は何か。それは532頁右以下の前半、特に図一fig. 5 fig. 6を中心に、学齋估畢との違いを強調することによって掻き立てた、隸釈への疑惑――洪适批判を、さらに拡大しようと試みたものに違いない。532頁以下の前半が、殆ど学問と呼ぶに値しない、余りに空虚な主張であることは、前述した通りである。後半も同様で、極めて独善的な女史の主張を除けば、学問的に汲むべきものが見当たらない。それらはいずれも、火のない所に煙を立て、中傷のための悪口を言うことではない。

そのような目に余る、女史の洪适批判の例を一つ上げる。第三章の注26後半を示せば、次の通りである。

26・我々はまた、南宋における「一般の本屋」の劉球(一二〇〇年以前生)が、そのような拓本の多くの複写を売っており、さらに、例えば他には知られていない碑文を含んだ、洪适の隸韻のような本が流通していたことも知っている。Yves herouet 編『宋代書録』(香港、中文大学、一九八八年) 206頁を見よ

(534頁左)

右の記述には、「他には知られていない碑文を含んだ、洪适の隸韻のような(本) such as Hong Gua's *Liyun*,

contained stele inscriptions that are otherwise unknown」と言う部分があつて、恰も隸韻における碑文の偽造を示唆するような、不当な洪适批判が展開されている。問題なのは南宋時代、洪适の隸韻が「流通していた」とされることで、女史は、隸韻が書物であり、売られていたと理解している。ところが、洪适の隸韻などというものが、当時も今も存在しないことは、洪适の弟である洪邁が、兄の没後、慶元三（一一九七）年に書いた、婁機の漢隸字源の序文に、

憶吾兄文惠公、自_レ壯至_レ老、耽癖弗_レ懈、嘗區別_レ爲_二五種書、曰_一積、曰_一續、曰_一韻、曰_一図、曰_一統。四者備矣、唯韻書不_レ成

と述べていることから、明らかである。即ち、洪邁によれば、洪适は生前、隸積、隸續、隸韻、隸図、隸統という五種類の本を著わそうとしていたが、隸韻だけが未完成のままになっていたことが、知られるのである。故に、その内容として、「他には知られていない碑文を含ん」でいたことなど、分かる筈がないし、さらにそれが当時、流布するなどといったことが、有り得る筈もない。女史は、『宋代書録』の書名を上げて、そのことが述べられているかの如く装っているが、『宋代書録』206頁の記している書物は、劉球の編んだ隸韻のことであつて、洪适のそれなのではな

い（洪适の盤洲文集六十三に、「書_三劉氏子隸韻_一」を収めている。なおそこには、「隸纂跋」も収められる。また、注26に言う『宋代書録』の刊年は、一九八八年でなく、一九七八年が正しい）。思うに、女史は、『宋代書録』をきちんと読まず、劉球の隸韻を洪适のものと勘違いしたのであろう。

なお、三章33頁右にある、

洪适に知られた紬書閣の版については、張（鉉）は、「今やこれらは失われ、私はその摸本の一つすらあるのを見たことがない」と書いている。

28・張鉉、至大金陵新志、卷20 B／368

と言うのもおかしく、「紬書閣の版」に言及しているのは、洪适ではなく、衛博の定庵類稿であつた。また、注28の至大金陵新志の卷、丁数表示（*juan* 20B／368）もひどく誤つていて、卷12 B／38 a（卷十二下38丁表）が正しい。

五

III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence は、洪适批判の中心を、やがて隸釈から隸統へと移してゆく。そして、次に登場する所謂、唐拓及び、主としてその識語から構成される、唐拓の歴史が、女史によ

る隸釈の批判に、有力な足場を提供することになる。さらに、女史はまた、引き続きその足場を利用して、次の黄易批判を展開してゆくことになるであろう。ここでは、ニラ女史の武氏祠偽刻説を考える上で、極めて重要なポイントである、その隸統批判を検証する。

ホ⁴⁶ III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence ⁵³⁵頁左—⁵³⁵頁右における女史の主張を示せば、次の通りである。

そのような疑問を熟考することで必然的に、人は、洪适に帰される、より早い業績である隸釈卷十六には、そのような「長い」榜題、または、評価が与えられているにも関わらず、何故、隸統卷六には、長い榜題、または、教訓的な評価が全く保存されなかったのか？という問いに導かれる。最も簡単な答えは、洪适が、彼のより遅い業績の中で、長つたらしい榜題や評価を繰り返す必要を感じなかったということであろう。しかし、隸釈は、余りにも多くの矛盾、時代錯誤、付加の痕跡を武氏に関して記している、最も簡単な答えが正しい答えである筈がない。確かに武梁に帰される隸釈、卷十六（他方において碑図として知られる）の本文は、今は知られない理由によって、再度整理された形跡を見せている。⁴⁶ 帝国後期の学者達が、武宅山

において発見された長い榜題と教訓的な評価における隔たりを埋めた時に、明後期と清初期まで、東州における武氏の遺跡の記述を含むと（ほぼ確実に誤って）考えられていた史繩祖の学齋佔畢から、それらの改竄がなされたということは、あり得ることであろうか？⁴⁷ 顧藹吉は、画像資料のことを書く時、彼の一七一七年の金石学の古典の何処にも、長い榜題と教訓的評価のことを記していない。代わりに、魯の莊公に対する言及を含む、彼の知る榜題は、莊の名前の使用が、後漢において効力を有したであろうタブーを無視していることから、後漢に溯ることは出来ない、彼ははっきり言明した。画像の人物達は、彼もまた任城の墓地に葬られた、別の時代の、別の武に捧げられたものに違いないと、顧は結論付けている。⁴⁸ 隸統の卷六の原本がどのようなものであれ、一七〇五年における朱彝尊のそれに始まる、唐拓のための奥付は、唐拓として知られた帖の所有者たることに關する大したことの無い歴史を確立することを我々に許す。⁴⁹（⁵³⁵頁左—⁵³⁵頁右）

46・朱彝尊より二十年足らず後に書いている、金石学の専門家顧藹吉は、朱彝尊の編集による現存隸統の二卷（卷五、八）を「洪氏碑図 A and B」として確認

している。顧は、隸続卷七と、「洪氏碑式」とを結び付ける。何故卷六——我々の画像の表象を引き出す、正しくその巻——は、四庫の写本においてCとして確認されるのか？ 北京図書館、一五八八年版隸釈の善本書マイクロフィルムを参照せよ。「補足」とされた頁の中に、極めて重要な記述が見出だされる。

47・一五八八年版隸釈は、長い榜題と教訓的評価を伝えるが、しかし、黄易により発見された石板は、西壁の二つの区画に対し、追加の七十字を加える。

48・顧藹吉、隸弁、卷8/38b-40a。（四庫全書の編者は、洪适の著作の序文において、顧の見解を採用した。）顧は、再建された武梁祠の西壁の三分を、確認するように見える句を使って、碑図を引用する。しかし、よりきっちりした調査では、ただ最初の二つのみが、今日我々が西壁において見る所のものと一致させられる。第三の句により言及された画像（管仲から李善へ）は、同じ区画には位置付けられず、残りの句は、榜題のあるものもないもの、ただ肖像の「型」に言及するだけである。その合計は一六二となる。おそらく碑図からのもう一つの版がまだ知られており（四庫の写本における隸続卷六と同一視される）、そして、そのことは、どうして何焯が、絶望的に混乱し

た隸続の諸版を見出したのかということを説明している。

49 「略」（556頁左）

冒頭の「そのような疑問」というのは後掲、534頁右—535頁左に述べられた、唐拓と隸続をめぐる、四つの疑問点を指している。さて、女史はまず、専ら武梁祠の榜題、題記を録した隸釈卷十六（表二、図三）と、その図像を写した隸続卷六の表記を比較して、隸釈が詳細であるのに対し、隸続が簡単なのは何故かと自問して、「最も簡単な答え」ともつと複雑な答えとの二つを提示し、「最も簡単な答えが正しい答えである筈がない」と述べて、前者を否定する。けれども、この問題は実際、そんなに複雑な話ではなく、ずっと以前に片の付いている事柄である。要は、女史が自ら言っている、「最も簡単な答え」が正しい。そのことは、既に容庚が、『漢武梁祠画像録』の「漢武梁祠画像考釈」38丁表において、

隸続縮摹、人物粗具形跡。又題字別見隸釈、而碑圖但列人名数字、使_下非_三原石重見、閱者無_レ由_レ知_三其本真_一

と指摘している如くであって、今日にあつてさえ、右の容庚の指摘を越えることは中々難しいであろう。隸続は版本であり、当然のこと拓本ではないから、その版本の図版中

に詳細な題記、榜題を彫り込むことが、難しかったものと思われる。ところが、女史は、自然な解答には納得せず、不自然な解答を選択するのである。そして、その理由について、女史が、

隸釈は、余りにも多くの矛盾、時代錯誤、付加の痕跡を武氏に関して記しているので、最も簡単な答えが正しい答えである筈がない

と説明していることは、非常に興味深い。思えば、*Stele Summary* 以来繰り返されてきた、女史の隸釈批判の一つの帰結が、ここに示されており、また、その目的が明かされている訳である。女史はここで、敢えて選んだ、もっと複雑な答えの内容を、次のように述べている。

確かに武梁に帰される、隸釈卷十六（他方において碑図として知られる）の本文は、今は知られない理由によって、再度整理された形跡を見せている。⁴⁶ 帝国後期の学者達が、武宅山において発見された長い榜題と教訓的な評価における隔たりを埋めた時に、明後期と清初期まで、東州における武氏の遺跡の記述を含むと（ほぼ確実に誤って）考えられていた史繩祖の学齋佔畢から、それらの改竄がなされたということは、あり得ることであろうか？

隸釈卷十六の改訂に関する、「今は知られない理由によつ

て」と女史が言う時、「知られない」のは、余の一般の研究者であつて、女史はそこに含まれないことに注意したい。何故なら、女史のみは、その理由を知っていて、その理由が次に記されているからである。それを分かり易く言い改めれば、次の如くなるであろう。

5 隸釈卷十六の本文は、黄易の発見した原石との隔たりを埋めるために、帝国後期の学者達の手によって、学齋佔畢に基づき改竄されている

女史の文章は、否定や疑問を多用する修辞法に覆われているため、非常に文意が掴みにくいが、平叙文の形に直せば、右のような意味になると思われる。また、女史は、学齋佔畢が、「東州における武氏の遺跡」のことを、記した文献ではないと考えている点にも、注意すべきである。面白いことに前掲、*One of the* *Stele* *Summary* の中心として、女史が隸釈と学齋佔畢を問題化した時には、隸釈の学齋佔畢に一致しないことが批判されていたのだが、ここでは一転して、一致することが批判されている。詮ずる所、隸釈がどうあろうと、それは批判されなければならないのであろう。

さて、主張の5を証拠付けるために呼び出されるのが、例の顧藹吉である。女史はまず、注46において、顧が隸統卷五、八、六を、洪氏碑図A、B、C、卷七を、洪氏碑式と呼んでいることを、問題化しようとする。それは、現存

隸続が、卷五―八の四巻を特に、

卷五——碑図上（巻）

卷八——碑図中（隸図中巻）

卷六——碑図下（巻）

卷七——碑式（一巻）

と呼んでいることを指したものである。その巻八、六が中、下巻となつてゐることなどは、隸続テキストの成立論上、確かに看過出来ない、重要な問題を含んでいるが、それは隸続研究における今後の課題なのであつて、顧藹吉とは何も関係がない。もしかして、女史は、隸続巻六が後補の一巻であることを、言おうとしているのであろうか。そうだとすれば、それは、全くの暴論としなければなるまい。朱彝尊と現存隸続のこと及び、注47のことは後述する。

ところで、女史が主張5の正しさを証明すべく、引き合ひに出した顧藹吉は、本当に女史が主張するようなことを言っているのであろうか。関連するその隸弁八の本文全文を示せば、次の通りである（四庫全書本に拠る）。

武氏石室画像 無年月

在濟寧州。宋方務德有重刻本。

金石錄云、武氏有數墓、在今濟州任城。墓前有石室、四壁刻古聖賢画像、小字八分書題記姓名、往往為贊於上、文詞古雅、字画遒勁。隸釈作武梁祠堂画

像云、石六、其五則橫分為二。梁高行蘭相如二段、又広於他石。所画者、古帝王忠臣義士孝子賢婦、各以小字識其旁。有為之贊文者、其事則史記兩漢史列女伝諸書。合百六十有二人。有標題者、八十七人。其十一人磨滅不可弁。又有鳥獸草木車蓋器皿屋宇之属甚衆。趙德夫題云武氏石室画像。趙君東人、當知其実、而不能弁此画為武氏誰人家前者。予案、任城有從事武梁碑、元嘉元年立。其辞云、孝子仲章、季章季立、孝孫子儁、躬修子道。竭家所有、選名石。南山之陽、擢取妙好、色無斑黃。前設壇、後建祠堂。良匠衛改、雕文刻画、羅列成行、攄聘技巧、委蛇有章。似是謂此画也。故予以武梁祠堂画像名之。愚按、画像中所題魯莊公莊字、不避明帝諱、似非武梁祠堂所刻。梁蓋卒於桓帝時也。其詳見陽韻莊字下。武氏有數墓、不能定此刻為何人墓前者。當從金石錄題為武氏石室画像可耳。碑図云、武梁祠堂画記、自伏羲至於夏桀、齊公至於秦王、管仲至於李善、及萊子母、秋胡妻、長婦兒、後母子、義漿羊公之類、合七十六人。其名氏磨滅、与初無題識者、又八十六人。連帥方務德重刻郡齋、地遠歲久、殆將乱真也。今華山馬氏有此重刻本、予從而摸得之

さて、女史の主張を検証するに先立ち、ここで、右の隸弁本文の成り立ちについて、簡単に確認しておこう。顧藹吉は、華山の馬氏の所蔵する唐拓を摸写し（e）、その内容を説明するに際して、三種類の文献を引用している。右記の本文中に付けた、a—eは、そのことを示したものである（例えばaは、bの直前までの範囲を指している。以下同じ）。今、顧藹吉の引用した三種の書物をそれで示せば、次のようになる。

(一) 金石錄十九（a）

(二) 隸積十六（b）

(三) 隸統六（碑図。d）

即ち、aは金石錄、bは隸積、dは隸統の本文をそれぞれ引いたもので（dは、顧藹吉が隸統卷六を、その巻名「碑図下（巻）」で呼んだものである）、右の本文の大半は、(一)(二)(三)三書の引用によって占められることになる。すると、顧藹吉自身の説というものは、c（「愚按」）、eの二箇所にしかならず、述べられていないことが知られよう。また、唐拓の「武氏石室画像」に対して、顧藹吉が(一)(二)(三)の三書を引いていることから、それが果して武梁の画像かどうかに関する問題はともあれ、顧藹吉が唐拓及び、金石錄、隸積、隸統三書の記述を、一つのものとして見ていたことが分かるのである。

さて、女史がまず、

顧藹吉は、画像資料のことを書く時、彼の二七一年の金石学の古典の何処にも、長い榜題と教訓的評価のことを記していない

と言っていることは、全くの誤りである。隸弁の卷七、八は、「碑攷上、下」と題されている如く、言わば漢隸を扱うその巻一—六本体に対する、出典資料の解説篇に該当するもので、確かに、卷八においては、長大な題記類への言及が見当たらないものの、例えば卷一、平声上山第二十八「連」を見ると、

武梁祠堂画像、老萊子、事親至孝、衣服斑斑。隸

云、以斑連為斑斑。

などとあって、——部が正しく、「長い榜題と教訓的評価」を記したものとなっており（表四20）、巻一—六本体においては、このような例が、まだ幾らも見出だせる。一体顧藹吉は、女史の鼻祖の研究者であるにも関わらず、女史がその隸弁のことを殆ど理解していないのは、何とも皮相な話と言えよう。

また、右記に続いて、

代わりに、魯の莊公に対する言及を含む、彼の知る榜題は、莊の名前の使用が、後漢において効力を有したであろうタブーを無視していることから、後漢に溯る

ことは出来ない、彼ははっきり言明した。画像の人物達は、彼もまた任城の墓地に葬られた、別の時代の別の武に捧げられたものに違いないと、顧は結論付けている

と述べられていることも、全くの誤りであることは、かつて指摘したことがある（前掲『孝子伝図の研究』I二一、234頁）。女史が問題としているのは、c「愚按」であるが、その中で顧藹吉が、「其詳見陽韻莊字下」と参照を指示している、隸弁卷二、平声下陽第十「莊」の本文を重ねて示せば、次の通りである。

武梁祠堂画像、魯一公。按、後漢明帝諱莊。故若莊周莊助、皆改爲嚴。諸碑莊字、亦從變体……惟此作莊。不著年月、其在明帝前乎。金石錄名此爲武氏石室画像、未定武氏何人。隸釈以武梁碑……遂定爲武梁祠堂画像、武梁卒於桓帝元嘉元年。恐未必是也

顧藹吉が言っているのは、武梁祠原石で言えば、第一石三層35に当たる曹沫図の榜題の一に、「魯莊公」とする表記が見え（表四35）、その「莊」字が、後漢明帝（治五七―七五）の諱、莊に当たっていることから、明帝の諱を避けないその祠堂は、後漢桓帝の元嘉元（一五一）年に没した武梁のものではあり得ず、明帝以前の時代に作られたもの

であろう、ということである。それに対し、女史は、その顧藹吉説を引いて、武梁祠の制作年代が、「後漢に溯ることは出来ない」と主張していることから、女史の主張が如何に的外れなものであるか、ということが知られるのである。顧藹吉の説が、祠堂を武梁のものではないとする点は一見、女史の主張と似るかの如くであるが、顧藹吉はその先を武梁より古いとする点、女史とは完全に異なるのである。

さらに、注48における、女史の、

四庫全書の編者は、洪适の著作の序文において、顧の見解を採用した

という説についても、かつて指摘した通り（前掲『孝子伝図の研究』I二一、234頁）、四庫提要は、武梁祠を「明帝以前所作」とする点、顧藹吉と同じく、やはり女史の主張を支えるものとはなり得ない。最後に、上記に続く、注48を検証する。

顧は、再建された武梁祠の西壁の三分を、確認するように見える句を使って、碑図を引用する。しかし、よりきつちりした調査では、ただ最初の二つのみが、今日我々が西壁において見る所のものと一致させられる。第三の句により言及された画像（管仲から李善へ）は、同じ区画には位置付けられず、残りの句は、

榜題のあるものもないものも、ただ肖像の「型」に言及するだけである。その合計は一六二となる。おそらく碑図からのもう一つの版がまだ知られており（四庫の写本における隸統卷六と同一視される）、そして、そのことは、どうして何焯が、絶望的に混乱した隸統の諸版を見出したのかということを説明している

女史は、右の注48において、上掲隸弁八のd（三）隸統六）を完全に誤読している。まず参考までに、隸弁八のdの出典となった、隸統卷六「碑図下」の本文を示せば、次の通りである（巻頭名称「碑図下」、揚州本、四庫本欠。汪日秀本等による）。

右、武梁祠堂画記、自_二伏戯_一至_二於夏桀_一、_二齊公至_一於秦王_一、管仲至_二於李善_一、及萊子母、秋胡妻、長婦児、後母子、義漿羊公之類、合七十六人。其名氏磨滅、与_レ初無_二題識_一者、又八十六人、得_二之括蒼梁季珩_一。始予聞、建康寓客有_二此碑嘗託_一連帥方務徳、訪_レ之未_レ至、而書已成。方亦刻_二郡齋_一、地遠歲久、殆將_レ乱_レ真也

女史は、dに引かれた（三）隸統六の本文を、四句と数えた。今その四句を左に取り出し、該当する図像番号を振ってみる（表一、表四）。

- (1) 自_二伏戯_一至_二於夏桀_一¹⁰
- (2) 齊公至_二於秦王_一³⁵

- (3) 管仲至_二於李善_一³⁵
 - (4) 及萊子母、秋胡妻、長婦児、後母子、義漿羊公之類²⁷
- (2)の齊公は、35曹沫図（第一石）の「齊桓公」であろう。「秦王」は、37荆軻図（第一石）38藺相如图（第三石）の二図に登場するが、38のものを見たい。(4)の長婦児は、15梁節姑姉図（第二石）に、また、後母子は、16齊繼母図（第二石）にそれぞれ登場している（長婦児は、兄嫁の子の意）。さらに、(1)―(4)の句が言及する十九図像の、武梁祠三石中における位置を示せば、次のようになるであろう（35曹沫図は、(2)(3)に重出）。

- (1) 1 伏戯―10 夏桀（第一石一層1―10）
- (2) 35 齊公（第一石三層35）
- 38 秦王（第三石三層38）
- (3) 35 管仲（第一石三層35）
- 27 李善（第三石二層27）
- (4) 20 萊子母（第一石二層20）
- 12 秋胡妻（第三石一層12）
- 15 長婦児（第二石一層15）
- 16 後母子（第二石一層16）
- 30 義漿羊公（第二石二層30）

さて、女史が、

再建された武梁祠の西壁の三区分を、確認するように

見える句

と言うのは、(1)の第一石一層1—10、(2)の第一石三層35及び、(2)の第一石三層37であろうと思われる(37荆軻にも秦王が登場する)。そして、女史は、「しかし、よりきっちりした調査では but upon closer examination」 「第三の句により言及された画像(管仲から李善へ)は、同じ区画には位置付けられ」ないと述べていることから、女史は、(1)―(4)の句を、武梁祠の図像配列を示す句と、捉えていることが分かる。そこで、前掲図二に、(1)―(4)句の十九図を当嵌めてみると、成程(3)35から27は、第一石三層から第三石二層へと飛んで、配列がうまく辿れない。(4)20、12、15なども、同様である。その結果として、女史は、顧藹吉の見た「碑図」が、原石——それに合わせて改竄された隸釈卷十六——とは全然違うものであつて、それはまた、隸釈と共に改竄の疑われる、隸続卷六とも勿論異なる、碑図の「もう一つの版 another version」であつたことを示唆して、原石、隸釈、隸続三者を批判するのである。

ところで、問題の隸弁dというのは一体、何を記したもののなか。それは、女史の想像するような、図像の配列のことを記した文章なのではない。dは、武梁祠の図像の種類のことを、述べた文章なのである。それは、(1)が帝王、(2)が諸侯、(3)が忠臣という、人物図像の種類を明らかにし

ようとしている。そして、(4)も同じことを記したものが、(4)は、その種類が多い。即ち、母、妻、子(兄嫁の子、継母の子)、他人である(30羊公図は、見知らぬ人への孝義を描く。右隣の29三州図も同じ)。女史は、隸弁dに対する、そのような基礎的解釈を誤つたのである。曲者なのが、女史の「よりきっちりした調査 closer examination」と言う表現で、読者はそれを文字通り、科学的な調査を指すものと受け取ることであろう。ところが、女史の言うそれは、科学的どころか、読解の基礎を欠いた独断と偏見による、データの捏造しか意味していない。大体、隸弁dは、顧藹吉の見解なのではない。顧藹吉は、洪适の隸続卷六をそのまま引いて、人物図像の種類と数とを説明しただけである。また、隸弁dの「碑図云」は、隸続卷六のことを指すものである。隸続以外に碑図のあつたことや、ましてその碑図の「もう一つの版」があつたことなど、顧藹吉当時も今も、およそ考え難い。

女史の主張5は、隸釈卷十六と原石に対する、女史の深刻な疑いを表明したものであつた。そして、主張5を証拠付けるべく、女史によって援用されたのが、顧藹吉である。さて、女史は、その主張5を導く際に、自ら二つの答えを設定していた。即ち、洪适の隸釈に関する、「最も簡単な答え」ともつと複雑な答えである。その設定に対して、女

史は、「最も簡単な答えが正しい答えである筈がない」と述べて、第一の答えを拒否し、第二の答え——「正しい答え」を選択している。ところが、その第一の答えは、例えば前述、容庚の見解に見られる如く、極めて自然な説得力に富むものであるが、第二の答えはそうではない。そこで、女史は、何処から見ても不自然な——もっと複雑な答えを構築しなければならぬ道へ、自ら歩を進めるのである。その結果として、私達に提示されたのが、顧藹吉説を支えとする、女史の主張5に外ならない。そして、5の正しさを証明する筈の、隸弁に関する女史の記述が、かくも支離滅裂なものであることは、第二の答えが誤りで、第一の答え即ち、「最も簡単な答え」の方が正しいことを、非常に逆説的な形で、女史自身が証明しているように思われる。すると、第二の答えから導かれる、女史の主張5もまた、論拠を根拠失って、成り立たなくなることは言うまでもない。

次に、女史による唐拓及び、隸続批判を見てゆこう。まず第三章534頁左の短い文章を示せば、次の通りである。

朱〔彝尊〕は、失われた武梁の石の、一部分の早期の一拓本としての〔唐拓の〕真正性を、とても精力的に高めた。そして、その拓本の来歴は、武梁の遺跡の歴史を知る上で、不可欠な部分であると長く見做されて

きている。³⁶ 故に、それに関する短い余談が許されよう。

(534頁左)

36・唐拓は、武宅山における一石上の二区画に見出だされる場面を示していた。多分それは、一部が埋もれていた、武梁の遺跡に由来した。従って、その拓本は、石灰岩における地上に出ていた部分と埋もれていた部分とに相当する図柄の違いを示すべきである。(しかし)そうではない。吉兆は、前記の模範的な人物像と同じ石には見えず、しかし、ごく近くの、再刻された石闕上に類例を伴って見出だされるので、洪适に知られた画像——独創的に名付けられた——は、同様の或る建築物を装飾していた可能性がある。(555頁左)

所謂唐拓は、唐の拓本の意味であろうが、実は宋拓、或いは、明拓であろうとされている。それは、例えば黄易が、右唐楊武梁祠堂画像凡十四、是左一石上半之二列(小蓬萊閣金石文字)

と言うように、武梁祠第一石一、二層1—14の十四図の拓本で(図二)、早く黄易の原石発見以前からその名が知られた、貴重なものである。その流传については、容庚『漢武梁祠画像錄』『漢武梁祠画像考釈』二「武梁祠画像旧拓本之流传」などに詳しい。黄易が乾隆五十六(一七九一)



图七 唐拓摸本

年に入手した唐拓（馬思贊旧蔵）は、その後、水火災に遇い、現在不完全なものながらその内の十一図が、故宮博物院に伝存している（馬子雲氏「談武梁祠画像的宋拓与黃易拓本」、《故宮博物院院刊》60・2、一九六〇年3月）。唐拓の図像は、小蓬萊閣金石文字に収める摸本の他、馬氏前掲論文や、『中国美術全集』書法篆刻編1商周至秦漢書法（人民美術出版社、一九八七年）図版七二などで見ることが出来る（18曾子、19閔子騫、21丁蘭図が収められる）。参考として図七に、小蓬萊閣金石文字所収の唐拓摸本を掲げる（上二列が武梁祠第一石一層1—10、下二列が第一石二層11—14に該当する）。

さて、女史は、右の短い記述の中で、朱彝尊が唐拓を称揚したことに触れている。朱彝尊は、隸統の研究史上、大きな役割を果たしたことで知られるが、唐拓との関連については、後述する。次いで、三章の534頁右—535頁左に述べられた、女史の主張を取り上げる。この部分は、III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence における、最も重要なもので、女史によってこれまでになされた、個々の主張がここで一つに結び合わされ、言わば女史の武氏祠批判の体系が始めて、その姿を現わす部分となっている。そして、これまで、批判的な方向は理解出来るが、どちらかと言えば、相互の関連がはつきり掴めなかった、

女史の武氏祠批判の具体的な成り立ちが、ここで始めて明らかにされている。その意味では、この箇所は、ニラン論文全体にとつても、最も注意すべき部分と言わなければならない。そのため、少し丁寧にな史の主張を見ておく必要があるだろう。まず三章534頁右—535頁左の本文を示せば、次の通りである。

しかし、唐拓と隸統——一般に南宋の人、洪适のものとされる金石学の古典——との関係は、正確に言えば、どのようなものなのか？ 現存する隸統の三分の二は、朱（彝尊）の時代に流布していた不完全な写本に対する、朱彝尊の「補足」（補）に相当しているので、答えに対する質問は単純ではない。改訂、拡大された隸統の朱の版は、朱がかつて訪れた、様々な蔵書からの「即ち」馬思贊の有名な蔵書を含む一群からの、写本資料を含んでいる。朱は、馬の帖の十四場面を最終的に漢代へ溯ると信じて、改訂、拡大された隸統の彼の版の中に、その複写を含めたのか？ 私達は全く知ることができない。私達は、ただ次のように言えるだけである。第一に、所謂唐拓が清初期から、ことによると明中期から存在したこと、第二に、唐拓に描かれた十四分割の場面——帝王（プラス女媧）の十の拓本と、模範的な女性及び、その息子達を描いた四つの拓

本——は、再建された武梁のための祠の西壁の二つの区画に対応すること、第三に、皇帝により支援された四庫全書（一七八二年に完成した）⁴³に含まれている、現存する隸統の最も早い版は、馬の帖に含まれていない場面を写していること（その二、三は、幾らかの再彫と再刻を推測しない限り、——正しくおおよそ——再建された「武梁祠」における場面と対応させることが出来ない）、⁴⁴第四に、唐拓における十四場面の内の四つ（伏羲／女媧、曾子の母 [figs. 7A-7D]、老萊子、そして、丁蘭の場面）は、武宅山の資料における他の所でも繰り返されている。それでは、残存する唐拓の断片と、現存する隸統の最も早い版の巻六に入っている線画との、正確な関係とはどのようなものなのか？隸統のその版、唐拓と、二十世紀になって武宅山において制作された拓本との確かな不一致は、石板が一七八二年以降に再刻されたのでなければ、説明することが難しい。隸統の四庫全書版の線画は、素材を手書きした、ただ粗雑なスケッチであるだけだと主張する人もいるが、しかし、それは同じ版における他の所産の幾分詳細な描写と矛盾しよう。⁴⁵もし彼〔黄易〕が、古物研究家に長く知られ、珍しくもない場所にある遺跡において、そして、武梁に割り当てられた「主要部を

なす祠」からの場面が、皇帝により支援され、宮廷の蒐集物を、それらの編集作業に利用出来た——黄易の後援者である翁方綱のような人達なら——四庫全書の手書きの複写と大体一致する画像石を、少なくとも黄易の発見の報告される四年前に、もし黄易が「発見していた」とするならば、人は、ひよっとすると黄易の偉業の重要さに、疑問をもつかもしれない。

（534頁右—535頁左）

42・〔略〕

43・隸統、巻6／3b—14a。印刷版の編集者は、一度黄易の発見が武梁のデータの「新たに進歩した」版を齎すや否や、挿絵を修正することは自由であると、明らかに感じていた。

44・例えば、四庫全書版においては、曾子と丁蘭の場面（下、1a、2b）は、傍題があるが、賛がない。それに相当する場面はあるが（下、3b）、予譲は全く見られない。衛將軍の代わりとして、斉將軍の傍題がある（上、9b）。要離と慶忌に相当するらしい一場面は、揚子江上でなく、確かに地上に置かれている。四庫全書の写本複写の或る細目は、今日の武梁の拓本のそれらと合っていない。例えば、幾人かの女性の着

ける冠は、曾子の母の部屋（下、1 a）（fig. 7B）や孝孫の貧しい寢床（下、11 b）がそうであるように、異なつて描写されている（例えば、上、13 a）。顧愷之の女史箴図を想起させるかどうかの一つの形状が、今の趙荀に相当しように区分に見えている（下、11 a）（巫鴻、『武梁祠』、303頁）。隸続においては、再建された武梁祠の西壁における「十帝王の行列」の外側にある、場面の仕切り上の銘文が全く表現されていない（蘭相如と対比して。巫鴻、『武梁祠』、306頁。同じ図柄、上、12 a と共に）。問題の魯莊公（巫鴻、『武梁祠』、311頁）は、四庫から全く消えてしまっているが、しかし、省略は、顔の造作の付加或いは、変更よりもっと容易に説明される。

45・例えば、四庫全書版隸続、巻64、760頁を見よ。

（555頁右—556頁左）

右の女史の文章は、凝つたものである上に内容が複雑で、非常に分かりにくい。そこで、最初に右記全体を通して要約を試みた後、その真憑性を検証する。女史はまず、一つの問いを発している。

しかし、唐拓と隸続——一般に南宋の人、洪适のものとされる金石学の古典——との関係は、正確に言えば、どのようなものなのか？

ところが、問いに含まれる、隸続の成立について説明した女史は、

答えに対する質問は単純ではない The question is not simple to answer

と述べて、問いには答えず、問いを問うているので、結局最初の問いは、後程もう一回繰り返されることになる。

それでは、残存する唐拓の断片と、現存する隸続の最も早い版の巻六に入っている線画との、正確な関係とはどのようなものなのか？

この二度目の問いに対する答えが、最初の問いへの答えとなる（筈である）。右記の文章の場合、この文章構成が非常に分かりにくいのである。ともあれ、女史の文章に関する、この全体的な仕組みを確認しておいて、一つ一つの主張を見てゆこう。

最初の問いを逸らかした女史が、隸続について述べた左の文章は、極めて重要である。

現存する隸続の三分の二は、朱（彝尊）の時代に流布していた不完全な写本に対する、朱彝尊の「補足」

（補）に相当しているので、答えに対する質問は単純ではない。改訂、拡大された隸続の朱の版は、朱がかつて訪れた、様々な蔵書からの、〔即ち、〕馬思賛の有名な蔵書を含む一群からの、写本資料を含んでいる

洪适の隸統二十一卷は、完本が伝存しておらず、また、隸統の古本には、七巻までの形態を取るものが多い。そして、現存する主要な隸統諸本は全て、朱彝尊（一六二九—一七〇九）と深い関わりをもっている（後述）。女史が指摘しているのは、そのことである。加えて、女史は、朱彝尊が隸統の三分の二、つまり十四巻分を増補するに際し、有名な馬思贊の藏書（道古樓、紅葉山房と呼ばれる）その他を、資料として用いたと指摘している。さて、右の隸統に関する文章から、次のような女史の主張を抽出し得る。

6 現存隸統の三分の二は、朱彝尊により増補されたものである

続けて、女史は言う。

朱は、馬の帖の十四場面を最終的に漢代へ溯ると信じて、改訂、拡大された隸統の彼の版の中に、その複写を含めたのか？私達は全く知ることが出来ない
前文は疑問文であり、後文は否定文だが、共に修辭と見做される。通常、このように突飛なことは、誰も考え付かないことなので、それが記されていること自体、疑問と否定の裏にある、女史の真意の在処を示すものと言える。故に、右の疑問文は、分かり易く次のように要約することが出来る。

7 隸統巻六の図像は、朱彝尊によって唐拓に基づき改訂

されている

ところで、6、7二つの隸統批判は、先の問いが問われる理由を、女史が説明したもののだが、奇妙なことに、この7は、唐拓と隸統との関係を問う、第一のまた、後に再度繰り返される質問に対する解答となっている。即ち、女史は、その答えを既に知っている。しかし、問いの問いに答えを忍び込ませるという、トリッキーな修辭のために、女史以外の「私達は全く知ることが出来ない」状況に陥るというのも、非常に不毛な話である。それとも、もしかして女史自身も己れの修辭に騙されたのであろうか。次いで、女史は、問いの問い（即ち、7の疑問形）に対する答えを、四つ上げている。前半二つのそれは、単なる事実確認である。但し、後半の二つは違う。第三、第四のそれには、はっきりとした、女史の主張が含まれている。

第三に、皇帝により支援された四庫全書（一七八二年に完成した）⁴³に含まれている、現存する隸統の最も早い版は、馬の帖に含まれていない場面を写していること（その二、三は、幾らかの再彫と再刻を推測しない限り、——正しくおおよそ——再建された「武梁祠」⁴⁴における場面と対応させることが出来ない）、第四に、唐拓における十四場面の内の四つ（伏羲／女媧、曾子の母 [figs. 7A-7D]、老萊子、そして、丁蘭の場面）

は、武宅山の資料における他の所でも繰り返されている。

第三の答えは、唐拓にない、隸続の図像の二、三には、原石の図柄と一致しない部分をもつものがあり、そのことは、原石の再刻を前提として始めて、両者の対応が説明出来るものとなる、とするものである（注44に、その具体例が上げられる）。ここから、次の主張⁸を、取り出すことが出来る。

8' 武梁祠原石は、再刻されたものである

続く第四の答えは、唐拓にある伏戯、女媧以下の四場面（図像番号1、18、20、21）が、武梁祠以外の前石室、左石室画像にも見えることから（無論武梁祠にも見える）、それらが偽刻されたことを示唆するものである。その四場面の内の三場面（1、18、21）は、注44において上げられた場面となっている。その後、女史は、最初の問いを再度繰り返し、

それでは、残存する唐拓の断片と、現存する隸続の最も早い版の巻六に入っている線画との、正確な関係とはどのようなものなのか？

と問われている。それは、唐拓と隸続を若干細かく規定してはいるが、両者の関係を問う点、始めの問いと何ら変わりが無い。そして、女史は、その二回目の問いに対し、

隸続のその版、唐拓と、二十世紀になって武宅山において制作された拓本との確かな不一致は、石板が一七八二年以降に再刻されたのでなければ、説明することが難しい

と答えているのである。この答えの中に、次の重要な女史の主張を見ることが出来る。それは前掲、⁸に時期的な限定を加えただけのもののなので、今⁸とする。

8'' 武梁祠原石は、一七八二年以降、一七八六年までの四十年間に再刻されたものである

⁸は、女史の文章においては、条件節とされているが、「確かな不一致 certain discrepancies」を証拠とする、具体例を伴った（注44）主張であることを勘案すれば、それが例の修辭法に過ぎないことは、すぐに分かる。そして、この⁸こそが、III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence における、女史の最も重要な主張なのであり、また、ニラン論文の全体が、この⁸を目差して構成されたものように思われる。もし⁸の主張が事実であるとすれば、一千年近い学統に支えられた武氏祠研究史は、根底的に見直されなければならないものとなり、同時に中国における金石学、考証学も深刻なダメージを蒙ることになる。それだけに、⁸を中心とする女史の主張は改めて、第三者による客観的且つ、厳正な検証を経ることが必要と

される所以である。8”の後に残された問題は、誰が、何時、何処で、そして、何のためにということである。ところで、8”を含む右の文章は、二度の問いに対する、きちんとした答えになっているのであろうか。二回の質問は、唐拓と隸釈との関係を糺したものである。しかし、右記は、唐拓、隸続、原石との関わり、特に原石のあり様を述べたもので、二度の問いに対する答えとはなっていない。女史から二度に互る問いを投げ掛けられた読者は、再びここで肩透かしを食らうのである。このような女史の文章の組み立てにおいて、次の二点に注目する必要があるように思われる。まず、問いに対する答えは、7として既に出ていること、また、読者を逸らかせる、見せ掛けの答えの中で、問題が巧みにずらされていること、つまり、唐拓と隸続との問題であった筈のものが、何時の間にか唐拓、隸続、原石の問題へとずらされ、中でも、原石のあり様をめぐる、新たな問題へと摩り替えられていることである。かくして、女史は、7を既定の事実とし、原石のあり様をめぐる、引き続き、次の黄易批判へと論旨を移してゆくのである。

もし彼「黄易」が、古物研究家に長く知られ、珍しくもない場所にある遺跡において、そして、武梁に割り当てられた「主要部をなす祠」からの場面が、皇帝により支援され、宮廷の蒐集物を、それらの編集作業に

利用出来た——黄易の後援者である翁方綱のような人達なら——四庫全書の手書きの複写と大体一致する画像石を、少なくとも黄易の発見の報告される四年前に、もし黄易が「発見していた」とするならば、人は、ひよつとすると黄易の偉業の重要さに、疑問をもつかもしれない

右記に、「古物研究家に長く知られ、珍しくもない場所にある遺跡」というのは、先の533頁右に、「一六九二年の地誌が、武宅山として知られる同じ遺跡で、紫雲山にある、未知の漢太子の一墓と考えた、石の「供え物をする堂」（享堂）」があつて、「そこには、石は「大変見事に彫つてあり」、「伏羲以来の、吉兆、そして、忠実で孝行な古代の名士」の場面を表現していた」とされ、また、後の536頁右に、「翁方綱自身の唐拓への奥付によると、武氏に帰せられる画像石の黄易の「再発見」に先立つ一年前の、そして、黄の発見の一部だったかもしれない石に、地誌が言及してから一世紀以上後の、一七八五年までに」とされる遺跡のことである（後述）。右記の女史の文は、仮定法で書かれてはいるが、コンテキストから判断して、単なる修辭と見做される。右記において女史が主張しているのは、まず黄易が武氏祠を発見した年は、一般に言われる一七八六年ではなく、実はその四年前の一七八二年即ち、四庫全書の完

成した年のことである、とする。そして、その発見した場所は、有名な嘉祥県の漢太子墓からである、と言う。また、発見された画像石は、四庫本隸統卷六に描かれた、武梁画像と一致する、とされる。さらに、画像石と四庫本とが似ることについては、黄易のバトロソ翁方綱が関与した、としている。ところで、女史が主張しているのは、武氏祠の発見年が、実際には通常言われる年より四年早いなどという、単純な事実ではない。四庫全書の編纂に関わった翁方綱や、四庫本隸釈との関連が指摘されていることから明らかなように（女史はまた、536頁右に、「その上、それまで

（一七八三年）に翁は、隸統卷六の四庫写本版を利用することが出来た」と再度、同様の指摘をしている）、女史は、黄易が翁方綱から提供された、四庫本隸統卷六の図像を用いて、武梁祠原石を再刻した、ということを示唆しているのである（女史はそうように考えている）。だから、「人は、ひよつとすると黄易の偉業の重要さに、疑問をもつかもしれない」と女史が言う「人 One」とは、外ならぬ女史自身のことであろうと考えると、この文は、非常に明快なものとなる。さて、右記の文章から、次の女史の主張を取り出すことが出来る。

8 黄易は、武氏祠の発見に先立つ四年前の一七八二年に、嘉祥県の漢太子墓において、翁方綱から提供された、

完成したばかりの四庫全書本隸統卷六の図像を用いて、武梁祠原石を再刻した

六

ここで、極めて重要な女史の主張が含まれる、III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence 534頁右—535頁左を検証する。まず、

6 現存隸統の三分の二は、朱彝尊により増補されたものである

と要約した女史の主張は、本当であろうか。現存隸統の成立について、一般に朱彝尊が深く関与したと言われる事実に限れば、右の女史の主張は、強ち間違っている訳ではない。しかし、例えば前掲、図一 fig. 5 fig. 6 に見る如く、四庫本隸釈卷十六における一語一語の本文に拘泥して、隸釈批判を構築し、また、例えば注44に見られるように、四庫本隸統卷六における、一図一図の図像を問題化して、隸統批判を展開しようとする、女史のレベルにあつて、例えば揚州本隸統というものを殆ど理解せず（後述）、それを隸釈のことであるとして全く恥じるものがない、女史の隸統認識などというものは（揚州本隸釈なるものは存在しない）、隸釈、隸統に関する、ごく初歩的な文献学の勉強不足を表わすものに外ならず、東洋学の重要な部門に当た

る、金石学を論ずる研究者として、言語道断とすべきである（II. Stele Summary 注²。前掲拙著『孝子伝図の研究』I 二一、209頁）。米国のことはともかく、もし日本や中国において、女史のように出鱈目な隸統認識に基づき、論を公刊したとすれば、直ちに学者生命に関わる問題となることは間違いない。取り分け、揚州本隸統は、四庫本隸統の成立に関する、最重要伝本と目され、その揚州本を隸統のことと誤解している女史に、果して隸統の内容を論じるだけの資格が、そもそもあるのかどうか、後程具体的に検証する。

さて、

6 現存隸統の三分の二は、朱彝尊により増補されたものである

とする、女史の主張は、完全な誤りである。その女史の主張は、現在もなお広く流布している、現存隸統の成立をめぐる、古くからの誤解に基づくものである。そのような誤解を、世界的に広めることに与って、大きな力をもったのは、何と言っても、四庫全書総目提要の次の記述であろうと思われる。四庫提要卷八十六、史部四十二、目錄類二、隸統の本文を示せば、次の通りである。

隸統二十一卷 浙江巡撫採進本

宋洪适撰。适既為隸統、又輯隸統得諸碑、依前

例¹積之、以成²是編。乾道戊子（一一六八）始刻³十卷于越⁴、其弟邁跋⁵之。淳熙丁酉（一一七七）、范成大又為⁶刻四卷于蜀⁷。其後二年己亥（一二七九）、德清李彥穎又為⁸增刻五卷于越、喻良能跋⁹之。其明年庚子（一二八〇）、尤袤又為¹⁰刻二卷于江東倉台¹¹。輦¹²其版¹³歸¹⁴之越¹⁵、前後合為¹⁶二十一卷、适自跋¹⁷之。越明年辛丑（一二八一）、适復合¹⁸前隸統¹⁹為²⁰一書、屬²¹越帥²²刊行、适又自跋²³之、所謂前後增加、律呂乖次、命²⁴掾史²⁵輯²⁶旧版²⁷、去留移易、首末整整一新者是也。然辛丑（一二八一）所²⁸刻、世無²⁹伝本³⁰。隸統尚有明万歷戊子（一五八八）所³¹刻、隸統遂幾希散佚。朱彝尊曝書亭集有³²是書跋³³曰、范氏天一閣、曹氏古林、徐氏佖是樓、含經堂所³⁴藏、皆止³⁵七卷³⁶。近客吳、訪³⁷得琴川毛氏旧鈔本³⁸、雖³⁹殘闕過⁴⁰半、而七卷之外增⁴¹多一百十七翻⁴²。末有⁴³乾道三（一一六七）年适弟邁後序⁴⁴云云。蓋自⁴⁵彝尊⁴⁶始合⁴⁷兩家之殘帙⁴⁸、參校成編。後刊⁴⁹版于揚州⁵⁰、即此本也。拋⁵¹喻良能跋⁵²云、統有⁵³得者⁵⁴、列⁵⁵之十卷⁵⁶、曰⁵⁷隸統⁵⁸。既墨⁵⁹于版⁶⁰、復冥搜旁取⁶¹、又得⁶²九卷⁶³。則當時所⁶⁴刻、實止⁶⁵一十九卷⁶⁶。朱彝尊因疑⁶⁷其⁶⁸余二卷是所謂隸韻隸圖者⁶⁹。然洪邁跋稱⁷⁰、亦既積⁷¹之、而又得⁷²之⁷³、列⁷⁴于二十七卷⁷⁵以往⁷⁶云云。則隸統⁷⁷當⁷⁸亦如⁷⁹隸統之體⁸⁰、專載⁸¹碑文⁸²。此本乃第五卷、六卷忽載⁸³碑圖⁸⁴、第七卷載⁸⁵

碑式、第八卷又為碑圖、第九卷、十卷闕、第十一卷至二十卷又皆載碑文、第二十一卷殘闕不完、而适自跋乃在第二十卷尾。蓋前後參錯、已非原書之旧矣。考彝尊所云七卷之本、乃元泰定乙丑（一三二五）寧国路儒学所刻、較今所行揚州本訛誤差少、然殘闕太甚。今仍錄揚州之本、而以泰定本詳校異同、其殘闕者無可考補、則姑仍之焉。

四庫提要が現存本隸統について、「自彝尊始合兩家之殘帙、參校成編」と記したことは、その權威からして決定的なものがあり、現代の隸統の解題類においても、提要のその説によるものが多い。おそらく女史も、四庫提要によって、旧来の七卷に、残る三分の二の分量に当たる、十四卷分を補ったのが、朱彝尊であると考えて、その主張をなしたものと思われる。しかし、四庫提要は、朱彝尊の隸統への関与を記すに当たり、

朱彝尊曝書亭集有是書跋曰

と、その説の出典を記している（曝書亭は、朱彝尊の書室の号。曝書亭集は、その文集の名）。そこで、四庫提要の説の出典となった、曝書亭集を見よう。曝書亭集四十三「隸統跋」の本文を示せば、次の通りである（四部叢刊初編による）。

隸統跋

隸統二十一卷、范氏天一閣、曹氏古林、徐氏伝是樓、含經堂所藏、僅七卷而已。近客吳閶訪得琴川毛氏旧抄本。雖殘闕過半、而七卷之外、增多一百一十七翻。未有乾道三年弟邁後序、繹其辭、尚有隸韻隸圖、而今不得見矣。又淳熙六年添差通判紹興軍府事喻良能亦有跋尾、称隸積二十七卷隸統十卷既畢于版、復冥搜旁取又得九卷。則當時刊本亦止二十九卷。將母余二卷為隸韻隸圖邪。要之闕文難以復完合。依婁氏漢隸字源目錄次序、取陳氏宝刻叢編所有補之、庶幾十得其四五矣。

また、同じ曝書亭集四十三に収める「宝刻叢編跋」にも、

卷中隸統諸条、予嘗取以補原書二十一卷之闕。と言ふ文言がある。朱彝尊が「隸統跋」の末尾で触れている漢隸字源は宋、婁機の撰に掛かる、漢碑の文字を集め、韻により配列した六卷の字書で、その巻一「攷碑」に、

碑之先後、当按以年月、而三百九碑……洪文惠公独积隸古、亦随得随載而卷策、所紀固已整然。今悉循之、而以隸統得者附於其後。とあって、続く「碑目」一一三〇九に記載される、三百九碑に関しては、その配列を洪适の隸積、隸統のそれに従ったものである（一一一八三が隸積卷一一卷十九に、一八四一三〇九が隸統卷一一卷二十一に該当する。但し、二一九

が隸統卷四末、二二〇が隸統卷十一の始めに当たっており、隸統卷五―卷十の六卷分は収録されていない。即ち、漢隸字源一の「碑目」を見れば、隸統の原配列を知ることが出来る訳である。また、もう一つの宝刻叢編は宋、陳思の撰に掛かる、歴代古碑の碑目を郡県別に分け、金石文及び、諸家の考証を録した、二十卷の金石書である。その書中に、屢々隸統を引用しているが、現存本隸統に見ないものが、数多く含まれている。故に、宝刻叢編によれば、現在失われている隸統の本文を復元出来る訳である。そして、このことに早く気付いた朱彝尊は、漢隸字源と宝刻叢編を用いて、「原書二十一卷之闕」（「宝刻叢編跋」）を補おうとしたのであった。すると、女史の主張6の当否に関わる問題は、果して朱彝尊が、両跋において述べていることを、本当に実行したのか、どうかということになる。検証はやや複雑に互ることになるが、ここで、少しその問題に立ち入ってみる。

現在、私達が普通に見ることの出来る、隸統の諸本としては、以下の三本を上げることが出来る。

一、揚州本

二、四庫全書本

三、汪日秀本

一は、曹寅が朱彝尊蔵本に基づき康熙四十五（一七〇六）

年、揚州使院において刊行したもので、二の底本とされた本である。三は、汪日秀が朱彝尊旧蔵本に基づき（汪日秀跋に、金風亭長鈔本と呼ばれている。金風亭長は、朱彝尊の号）、乾隆四十三（一七七八）年に、隸釈と併せて刊行したもので、同治十（一八七二）年の洪氏晦木斎（清、洪汝奎）刻本が流布する。一―三は、いずれも二十一卷本である。取り敢えず、これらのテキストと、宝刻叢編との関係が問題となる。

ところで、現存隸統に対する朱彝尊の関与の問題を、かつて周到に考察した人物がいる。それが翁方綱で、その両漢金石記卷十九「隸統補」の中に、翁の具体的な考察内容を見ることが出来る。そこに、極めて面白い例が一つ上げられているので、まずそれを紹介する。桂馥（一七三六一一八〇五。字は未谷）はかつて両跋により、女史と同じように、朱彝尊の隸統への増補を疑った。但し、桂馥はその増補を、隸統卷二十へのもと考えた。翁方綱はまず、その桂馥の説を上げている。両漢金石記卷十九「隸統補」の「備考弟二十一卷」における、その本文を示せば、次の通りである。

未谷又曰、竹垞朱氏跋「陳思宝刻叢編」言、卷中隸統諸条、予嘗取以補「原書二十一卷之闕」。馥疑「一字衍」、蓋二十卷也。隸統二十一卷、碑目凡六種、陳書無之。

二十卷碑目凡十三種、陳載其九。如斥彭長田君碑、宗俱碑陰、侍中楊文父神道、此千墓四字、右侍無名人墓闕、貞女羅鳳墓闕、种氏石虎刻字、延年益壽郭字、尉府壺壁甄文、是也。凡陳所_レ有者、此本俱有。独堵陽長劉子山碑不_レ見於陳書。故此本亦闕。然則此卷非_二隸統全文_一。乃朱氏取_二陳書補綴者_一。又曰、陳氏所_レ載、亦非_二隸統全文_一。唐禹廟頌可_レ証。此卷跋語多_二簡短_一、亦非_二全文_一。乃陳氏節錄者、朱氏応注、明_下某条据_二陳書補_上耳

桂馥は、宝刻叢編跋に言う、「補_二原書二十一卷之闕_一」の「二十一卷」を、隸統卷二十一のことと解釈した。しかし、隸統卷二十一に収められている筈の、漢隸字源碑目三〇四—三〇九に該当する六碑の逸文は、宝刻叢編中に一つも見当たらないのである。そこで、桂馥は、宝刻叢編跋に言う「二十一」が、「二十」の誤記であろうと考えた。卷二十は、十三碑（漢隸字源碑目二九一—三〇三）を収めるが、その内の九碑（同二九一、二九五、二九七—三〇三）は、宝刻叢編卷三、六、十、二十に引用が見えるからである。桂馥の考え方は、卷二十を見る限り、一見辻褃が合っているかの如くであるが、しかし、隸統と宝刻叢編を全体的に見渡した場合、色々と不都合なことが目に付くのである。そこで、翁方綱は、その桂馥の考え方に對し、鋭い反駁を

加えた。兩漢金石記卷十九の続きの本文を示せば、次の通りである。

方綱按、未谷以_二今所_レ行隸統第二十卷_一、為_二朱檢討所_レ補者_一、此說非也。隸統第二十卷劉子山碑、闕_二其後半_一。宗俱碑陰、闕_二其前半_一。自是原写本_二如_レ此_一、非_レ出_二朱氏所_レ補_一。朱氏所_レ云欲_下取_二陳氏宝刻叢編所_レ有以補_二隸統者_一、雖_レ有_二此語_一、却未_レ就_二業_一也。若果朱氏已補、豈有_二前第四卷韓勅孔林別碑諸跋_一、俱未_二補入_一、而專補_二後卷_一者乎。未谷誤_下說朱氏跋中補_二原書二十一卷之闕_一一語_上耳。所謂補_二二十一卷之闕者_一、蓋合_二隸統全帙_一統計之、而謂_二欲_レ補_レ之耳。非_二專指_二其弟二十一卷_一也。未谷於_二此書_一用功甚勤、且欲_二補正_二重定_一一目。恐見_二其書者_一、誤以_二此第二十卷_一為_レ出_二朱竹垞之手_一、則失_レ之遠矣。故不_レ可_二以不_レ弁_一

翁方綱は、

未谷誤_下說朱氏跋中補_二原書二十一卷之闕_一一語_上耳……非_二專指_二其弟二十一卷_一也

として、桂馥が宝刻叢編跋の「二十一卷」を誤読し、隸統卷二十一と解釈したが、それは卷二十一を指す言葉ではないと訂正して、

所謂補_二二十一卷之闕者_一、蓋合_二隸統全帙_一統計之、而謂_二欲_レ補_レ之耳

と、その言葉が隸統全巻を意味するものに外ならず、朱彝尊は隸統全体の補訂を企図したのであると述べている。翁方綱の言う通りであろうと思われる。さらに重要なことは、翁方綱が、

朱氏所_レ云欲_下取_レ陳氏宝刻叢編所_レ有以補_中隸統_上者、雖_レ有此語、却未_レ就_レ業也

と指摘して、その根拠を種々上げている点であろう。即ち、朱彝尊の言葉は、飽くまで漢隸字源と宝刻叢編を用いることにより、隸統を補訂出来るという可能性と、将来的な企図とを述べたものに過ぎず、朱彝尊自身は、現存隸統に対し、決してそれらを実行した訳ではない、ということである。このことは、現存隸統テキストの成立を考える上で、決定的に重要な意義をもっている。また、このことから、前掲両跋や四庫提要を読むに際し、朱彝尊が宝刻叢編を使って補訂したという風に、それを解釈してはならないことが、知られるのである。

さて、桂馥に対する、翁方綱の反駁の仕方は、非常に明晰であり、例えば朱彝尊が宝刻叢編を用いて、隸統巻二十を補訂したとすると、

隸統^(書)第二十卷劉子山碑、闕_二其後半_一。宗俱碑陰、闕_二其前半_一。自_二是原写本_一如_レ此、非_レ出_二朱氏所_レ補

と、劉子山碑と宗俱碑陰の本文の欠落の説明が付かず（宝

刻叢編は、巻三に後者の注文が載るのみ）、また、

若果朱氏已補、豈有_二前弟^(書)四卷韓勅孔林別碑諸跋_一、俱未_二補入_一、而專補_二後卷_一者乎

と、宝刻叢編に存する、韓勅孔林別碑以下の注文の、現存隸統巻四において未補入となっていることが、説明出来ないことを、桂馥への反論の根拠に上げている。翁方綱がかくきつぱりと、桂馥に反駁し得たことには、それなりの理由があつて、実は翁方綱は、朱彝尊が企てた、漢隸字源と宝刻叢編による現存隸統への補入を、自身で試みていたのである。そして、両漢金石記巻十九「隸統補」は、その補訂の結果がどのようなになるか、ということをして、翁方綱が報告した一卷に外ならないのである。次に、その隸統補の内容を、簡単に紹介しておく。

翁方綱は、現存隸統巻四、十三、十五、二十一の四巻について、漢隸字源及び、宝刻叢編による補訂が、可能であると考えた。まず巻四に関しては、「補^(書)弟四卷首」として、現存隸統巻四の巻首目録に、漢隸字源碑目二〇八一―二一四の七条を補うことが出来るとしている。それは、以下に掲げる所の七条である（通番と漢隸字源碑目番号を付す。以下同）。

(1) 208 武君闕銘

(2) 209 韓勅孔林別碑兩側題名

(3) 210 功曹史殘画像

(4) 211 雍邱令殘画像

(5) 212 成王周公画像

(6) 213 会稽東部都尉路君闕

(7) 214 頻陽令宋君殘碑

そして、(2)、(4)―(7)の五条（↑を付した）については、宝刻叢編卷二、二十による、洪适の注文（跋）の復元が可能であるとして、その本文を掲げている。また、その内の(6)に関しては、現存隸統卷十三中に、本来卷四にある筈の本文が竄入しているとして（四庫本卷十三、1丁裏、汪日秀本卷十三、4丁）、それを卷四(6)に移すべきだと述べている。

さらに、現存隸統卷十三の、

(8) 237 孝子董蒲闕

卷十五の

(9) 264 馮君開道碑

(10) 266 文範先生陳仲弓殘碑

の三条については（共に、現存本欠。汪日秀本は、卷首目錄に標題のみ存）、宝刻叢編卷二十及び、五により、それぞれ洪适の注文を補うことが出来るとして、その本文を掲げている（「補弟十三卷内」「補弟十五卷内」）。

最後に翁方綱は、「備考弟二十一卷」として、漢隸字源

により隸統卷二十一の内容を、以下のようなものであっただろうと推定する。

(11) 304 晋南郷太守司馬整碑陰

(12) 305 青羊鏡銘

(13) 306 楊君殘碑

(14) 307 開通哀斜道碑

(15) 308 江州夷邑長盧豐碑

(16) 309 酒泉題名

その上で、現存隸統卷二十一の殘存本文を、(11)のものと推定し、また、(14)に関しては、その発見が紹熙五（一一九四）洪适は、一一八四年没）年である所から、「則似是婁氏所增者」。故姑録於此、題曰備考、以示不敢徑補云」と、(14)の漢隸字源307についての不審を指摘している。

翁方綱が、隸統補の冒頭に、

今世所傳洪氏隸統非完書。故秀水朱檢討嘗欲依婁氏漢隸字源目次取陳氏宝刻叢編所有者補之。方綱窃取斯意、凡補洪跋八条

と述べて、朱彝尊の企図を継ぎ、隸統を補訂した結果は、以上のようなものである。もし朱彝尊が、宝刻叢編による補訂を実行していたとすると、明らかに補訂されて然るべきものが、かく八条も残されている。翁方綱が桂馥に反論し得た根拠が、ここにあった訳である。そして、一方、こ

のことは、翁方綱が、

朱氏所_レ云欲_下取_二陳氏宝刻叢編所_レ有以補_中隸統上者、雖_レ有_二此語_一、却未_レ就_レ業也

と言う通り、隸統跋の言葉があるにも関わらず、朱彝尊は、隸統の内容には手を付けていないことを示すものである。

その理由は、隸統跋の末尾に、「庶_三幾十得_二其四五_一矣」とあるように、宝刻叢編所収の隸統逸文の量が余りに少ないため、仮に補訂を実行したとしても、決して隸統二十一巻の完全な姿を、取り戻すことが出来ないことから、それを断念するに至ったものと思われる。結局、隸統研究史における、朱彝尊の特筆すべき業績は、従来全くその存在の知られていなかった、巻八以降を有する、毛氏旧抄本を発見し、それを今日に伝えたことであろう。それは、隸統巻八一巻二十一を内容とする、十四巻本であつたらしく、朱彝尊は、「二百一十七翻」とするが、顧広圻は、「共一百十九葉。又跋三葉」を数えている（王欣夫氏編『顧千里集』十九跋五「隸統十四巻校宋殘本」。潘承弼氏「隸統版本考」、『制言』51、民国28（一九三二）年）。因みに、汪日秀本隸統巻八以降の丁数を数えてみると、一二二丁となるから、現存本がそこから出たものであることも、容易に想像が付く。故に、現存隸統を考える上で、朱彝尊の毛氏旧抄本隸統の発見は、画期的なものであり、また、翁方綱の隸統補

は、今後の隸統研究の基礎を、形作るものであることが知られよう。そして、例えば四庫提要の、「蓋自_二彝尊始_一合_二両家之殘帖_一」の文言は、上記のような文脈において、解釈すべきものであることも理解されるのである。

すると、女史が、

現存する隸統の三分の二は、朱（彝尊）の時代に流布していた不完全な写本に対する、朱彝尊の「補足」（補）に相当しているので、答えに対する質問は単純ではない。改訂、拡大された隸統の朱の版は、朱がかつて訪れた、様々な蔵書からの、（即ち、）馬思贊の有名な蔵書を含む一群からの、写本資料を含んでいると主張する、一見四庫提要を思わせる隸統批判は、特にその後半の、

改訂、拡大された隸統の朱の版は、朱がかつて訪れた、様々な蔵書からの、（即ち、）馬思贊の有名な蔵書を含む一群からの、写本資料を含んでいる

とする点に、現存隸統に関する、女史の根本的な事実誤認の含まれていることが判明する。即ち、女史は、「改訂、拡大された隸統の朱の版 *Zhu's revised and expanded version*」などとする言い方が端的に示すように、現存隸統を、朱彝尊により恣意的に「改訂、拡大された」ものと見ているが、朱彝尊がそのようなことを試みた形跡は、全くない

からである。従って、女史による、

6 現存隸続の三分の二は、朱彝尊により増補されたものである

という主張は、誤りとすべきである。

それでは、次に、女史による、

7 隸続卷六の図像は、朱彝尊によって唐拓に基づき改訂されている。

8 黄易は、武氏祠の発見に先立つ四年前の一七八二年に、嘉祥県の漢太子墓において、翁方綱から提供された、完成したばかりの四庫全書本隸続卷六の図像を用いて、武梁祠原石を再刻した

という、二つの主張を検証する。さて、前述の如く、現存隸続の一般的なテキストとしては、

一、揚州本

二、四庫全書本

三、汪日秀本

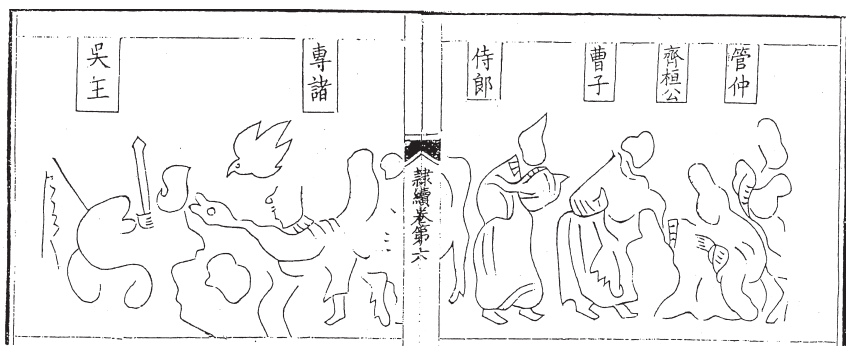
の三本が上げられるが、それらに先立つ七巻の古本として、北京図書館（現、中国国家図書館）蔵の明刻本、北京図書館、上海図書館蔵の清影元抄本（元泰定本の写しと見られる）などが存する。そして、今隸続卷六の武梁画像に注目すると、隸続のそれには、線描のもの（一、二）と黒塗り（三）との二系統の図像が存し、二の四庫全書本の

それは、一の揚州本によるもので、三の汪日秀本のそれは、明刻本、影元抄本に溯るものとなっている（但し、明刻本や影元抄本には、一、二、三本に存する、冒頭「武梁殿」の三字が存しない）。図八に、揚州本、四庫本、汪日秀本隸続卷六の35曹沫図、36專諸図を掲げる。図八を見れば、二の四庫全書本が一の揚州本から出たものであること、また、例えば35曹沫図において、「魯莊公」の榜題を有すること、三の汪日秀本が一、二本とは、別系統の図柄をもつことが知られるであろう。そして、三の汪日秀本のそれは、明刻本また、泰定本の写しと思しい、清影元抄本と全く一致するのである（但し、明刻本、影元抄本は、例えば「曹子」榜題の枠が下まで続くことなどへそこに題記のあることを示す。5顓頊、10夏桀を除く第一石一層における、十帝図の榜題枠も同じ。表四35、原石と一致しており、汪日秀本より古態を留める点が、注目される）。

さて、隸続の伝本における、このような基礎的事実を踏まえて、女史の主張を見ると、まず、

7 隸続卷六の図像は、朱彝尊によって唐拓に基づき改訂されている

というようなことは、およそあり得ない。もしそのような事実があったとすれば、例えば女史が注44において指摘する、



圖八 揚州本、四庫本、汪日秀本隸續卷六35、36

例えば、四庫全書版においては、曾子と丁蘭の場面（下、1a、2b）は、傍題があるが、賛がない……隸統においては、再建された武梁祠の西壁における「十帝王の行列」の外側にある、場面の仕切り上の銘文が全く表現されていない

などの点が、唐拓と一致しなければおかしいではないか。大体、上記隸統一、二、三本は、全て朱彝尊から出たものであるが、例えばその三、汪日秀本の図柄は、明刻本、影元抄本即ち、元泰定本へと溯るものであり、朱彝尊がそれを改訂する余地は、全くない。また、

8 黄易は、武氏祠の発見に先立つ四年前の一七八二年に、嘉祥県の漢太子墓において、翁方綱から提供された、完成したばかりの四庫全書本隸統卷六の図像を用いて、武梁祠原石を再刻した

という主張も、非常に奇妙なもので、そのおかしさは、女史がポイントとする、「一七八二年」という年のことを考えてみれば、直ちに分かることである。それは、四庫全書の完成した年のことだが、黄易は、その年（以降）に始めて、四庫本隸統を参照することが可能となり、武梁祠原石を再刻した、と女史は言う。けれども、一七八二年という年は、黄易にとって何の意味ももっていない。何故なら、四庫本隸統の原本に当たり、四庫本と全く同じ内容を有す

る揚州本が、七十六年も前の一七〇六年に刊行され、流布していたからである。もし黄易が隸統を見たければ、皇帝の図書である四庫本を態々見なくても、一七八二年以前に、四庫本と同じ揚州本を幾らでも見ることが出来た。女史は、隸統についてのこの基本的な事実を全然理解していない（女史は、揚州本を隸統のことと錯覚していた）。このことから、一七八二年という年が、意味をもっているのは、黄易にとつてではなく、女史一人にとつてであることが、誰の目にも明らかとなる。従つて、8の主張も、到底成り立たないものとすべきである。即ち、女史の主張7、8は誤りである。以下、もう少し具体的に述べてみる。

例えば注43は、女史の主張する事柄が、全く学問的な根拠を欠いた、出鱈目に過ぎないことをよく示す、恰好の例と言えよう。

43・隸統、卷6/3b-14a。印刷版の編集者は、一度黄易の発見が武梁のデータの「新たに進歩した」版を齎すや否や、挿絵を修正することは自由であると、明らかに感じていた

隸統の挿絵が変更可能と考えた、「印刷版の編集者 Editors of the printed versions」とは一体、誰のことを指しているのか。曹寅が揚州本を刊行したのは、康熙四十五年（一七〇六）年、汪日秀がその隸統を刊行したのは、乾隆

四十三（一七七八）年のことである。女史の念頭に置かれたのは、おそらく汪日秀のことであろうと思われるが、黄易が武梁祠等を発見するのは、汪日秀本が刊行された八年後の、乾隆五十一年（一七八六）年のことだから、それを汪日秀とするのは、明らかにおかしい。そして、洪汝奎が洪氏晦木齋本の隸続を刊行したのは、同治十（一八七一）年のことだが、それは汪日秀本を忠実に模刻したものであり、女史の言うような修正は、何も施されていないのである。即ち、女史の指摘するような編集者は、かつて存在したことがなく、従って、女史の言うような修正を施された隸続も、存在しない。かく事実にく背く注43の内容を、一言で表わすならば女史の妄想と呼ぶしかないであろう。

また、注44に数多く上げられている、二の四庫全書本における、武梁祠原石（拓本）との不一致例は、その全てが、一七〇六年に刊行された一、揚州本に溯るものであって、その事実を踏まえない限り、それらを一七八二年完成の四庫本による原石の再彫、再刻の証拠とすることは、不可能であることが明らかと言えよう。「現存する隸続の最も早い版 the earliest extant edition of *Li xu*」を、四庫本と断じて恥じない、非科学的、非文献学的な、女史のテキスト認識に基づいて、幾ら例を上げたとしても、それらを証拠とすることは出来ない。

次いで、前述、問いの問いに対する、四つ目の答えにも、典型的な女史の事実誤認が含まれている。

第四に、唐拓における十四場面の内の四つ（伏羲／女媧、曾子の母 [figs. 7A-7D]、老萊子、そして、丁蘭の場面）は、武宅山の資料における他の所でも繰り返されている

この答えが、武梁祠の偽刻を示唆するものであることは、既に述べた。そこに指摘される四場面中、伏羲、女媧は、漢代画像によく見られる、有名な図像であり、残る三場面は、全て孝子伝図である。後漢時代、陽明本孝子伝の核となった、漢代孝子伝が行われたことは、ほぼ確かな事実と考えられ（拙稿「陽明本孝子伝の成立」、『京都語文』14、平成19（二〇〇七）年11月）、女史が問題視する三場面の孝子は、余りにも著名な孝子ばかりである点、他の孝子伝図中に見出だされることは、むしろ当然とも言える。現に件の三場面は、全て和林格爾後漢壁画墓の孝子伝図中に描かれており、図柄も酷似するのである（前掲拙著『孝子伝図の研究』I 二2、口絵図3、5、6）。従って、その四場面が、武梁祠以外の前石室や左右室に見えることは、何ら奇異とするに当たらないし、偽刻の証拠ともなり得ない。大体、漢代において同じ粉本に基づき、同じ図像が描かれることは、偽刻とは何も関係のない事柄である。加えて、

私が疑問に思うのは、女史が本文中に自信をもって「武宅山の資料における他の所でも繰り返されている」と断言する、「曾子の母 Zengzi's mother」即ち、武梁祠18曾子図が、「武宅山の資料における他の所」には見当たらないことである。目下、陽明本孝子伝にしか依拠本文が伝存しない、漢代孝子伝図の曾子図は、聊か注意深く扱う必要のあり、図像とすべきである（前掲拙著『孝子伝図の研究』II-1）。女史は、figs. 7A-7D に18曾子図を掲げ、隸続などの図柄を細かく考察しているにも関わらず、肝心の図像内容について、全く顧慮した形跡がない。そして、図像に対する、女史の不誠実な態度が、このような誤りと呼び、その誤りの支える主張もまた、事実無根のものとなるという、救いのない悪循環に陥っている。なお注45の、

45・例えば、四庫全書版隸続、巻684、760頁を見よ

における、巻684は、巻681でなければならず、また、760頁は、提要の後半及び、隸続巻一の第1丁で、何を言おうとする注なのか、全然分らない（巻684、760頁は、金石経眼録）。

七

前述 III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence の534頁右—535頁左の記述において、ニラン女史は、批判の対象を隸続から黄易へとシフトさせている。

その隸続批判と黄易批判とを繋ぐのが、朱彝尊により隸続図像の改訂に用いられた（主張7）、唐拓なのであった。女史は引き続き、536頁において非常に丁寧に唐拓の流伝の跡を辿り、唐拓と翁方綱、黄易との関連を追及する。次に掲げるのは、536頁左—536頁右のその記述である。

一七七五年に唐拓帖は、もう一人の揚州の鑑定家、鑑定芸術家の汪雪疆の手に渡った。⁵⁵その後すぐに複写及び、複写の複写が急増し始めた。⁵⁶一七七五年の夏、黄易はそれを見たが、摸写をするには忙し過ぎた。⁵⁷一七七九年或いは、一七八〇年の冬に、翁方綱が汪雪疆の所有するその帖を借りようとしたが、しかし、失敗した。⁵⁸一七八三年に、黄易は、呉門（今日の蘇州）の陸貫夫（字、紹曾）の所蔵する、汪の唐帖の透き写し（響搨）を手に入れた（得）。⁵⁹同じ年、黄易は、この陸貫夫の版を、研究のために彼の後援者の翁方綱の所へ送った。陸氏の版に対する翁の関心は顕著で、彼はそれを写し、それについての詳細な注を施して、それに関する詩三首を作った。その上、それまでに翁は、隸続巻六の四庫写本版を利用することが出来た。⁶⁰一七八三年にまた、翁は彼の才能ある弟子、安邑の宋葆淳（一七四八？—一八二〇）に、陸氏の版の複写を石か木に彫るよう依頼した。宋の最初の企ては、伝えられ

る所によれば、同年中に完成している。翁方綱は宋に、翁の後援するその版が、学者間に出来るだけ広く流布して享受されるように、宋の複写に基づく（細密画？）版木の組を、趙君に彫らせるよう教えている。⁶¹

（536頁）

55・〔略〕

56・一七八三年に、所謂唐拓の透き写しは、呉門の陸紹曾のものとなっていた。それには李明古や謝林村のような、他の呉門の地元民による、奥付が書き添えられていた。この透き写しは、両漢金石記における、翁方綱が書こうとする主題に対する、三つの基礎の一つとなった。

57・唐拓への奥付28。

58・翁方綱、両漢金石記、巻15、17頁を見よ。

59・王昶、金石萃編、par. 9を見よ。この複写には揚州の画家金農の奥付がある。その後、容庚は陸和九氏から、拓本の完全な揃いを借りようとした。陸氏の版には、榜題を伴う合計七十八人の人物が描かれていた——顧藹吉に知られたものより二人多い（隸続版では、一六二人が含まれ、その八十六人には、榜題がなかったことを想起せよ。）

60・〔略〕

61・このことは全て、王昶の金石萃編において報告されており、翁方綱の文集においても同様である。黄易が彼自身で遺跡を訪れる前に、遺跡からの拓本を配ったことに注目せよ。同様に彼もまた、宋氏によって作られた複写を所有していたのであろう

（556頁左—557頁右）

女史の唐拓流传史の調査は綿密で、その大半は首肯すべきものである。しかし、その中には、看過し難い二、三の問題も散見し、以下そのことを検討する。

例えば上掲文中における、次の記述を見よう。

一七七九年或いは、一七八〇年の冬に、翁方綱が汪雪疆の所有するその帖を借りようとしたが、しかし、失敗した。⁵⁸一七八三年に、黄易は、呉門（今日の蘇州）の陸貫夫（字、紹曾）の所蔵する、汪の唐帖の透き写し（響揚）を手に入れた（得）。⁵⁹

58・翁方綱、両漢金石記、巻15、17頁を見よ。

59・王昶、金石萃編、par. 9を見よ。この複写には揚州の画家金農の奥付がある。その後、容庚は陸和九氏から、拓本の完全な揃いを借りようとした。陸氏の版には、榜題を伴う合計七十八人の人物が描かれていた

——顧藹吉に知られたものより二人多い（隸統版では、一六二人が含まれ、その八十六人には、榜題がなかったことを想起せよ）

女史は、「一七七九年或いは、一七八〇年の冬に In the winter of 1779 or 1780」と、当該年時を故意に曖昧化しているが、その年時は、「己亥冬」（両漢金石記十五、小蓬萊閣金石文字）とあって、己亥は乾隆四十四年のことだから、一七七九年冬に外ならず、一七八〇年の筈がない。女史の書き方は、如何にも忠実に誤魔化しがあるかのような印象を、読者に与えるものである。一方、私が批評に窮するのは、注59の次の記述である。

その後、容庚は陸和九氏から、拓本の完全な揃いを借りようとした。陸氏の版には、榜題を伴う合計七十八人の人物が描かれていた——顧藹吉に知られたものより二人多い（隸統版では、一六二人が含まれ、その八十六人には、榜題がなかったことを想起せよ）

唐拓流伝史を述べ、それを注した注59の中に、何故容庚のことが突然取り上げられるのか、その理由が全く判然としないのである。と言うのは、容庚が陸和九から借りたのは、唐拓ではなく、武梁祠原石の拓本だからである。容庚は、その『漢武梁祠画像録』『漢武梁祠画像考釈』八「武梁祠画像之印行」において、

遂亟成此書（『漢武梁祠画像録』のことを指す）。其武梁祠絵図三幅、乃嘉慶拓本、仮之陸和九先生

（38丁左）

と述べていて、陸和九本の全貌は、『漢武梁祠画像録』巻首の総一—三に見ることが出来るし、陸和九自身、『漢武氏石室画像題字補攷』（民国十五—一九二六）年刊）を著わし、武梁祠三石の榜題、題記の摸写を収めてもいる（因みに、容庚書に収める武梁祠画像の部分図へ分図一—五十六）は、馬衡旧蔵の黄易手拓本へ馬子雲氏は、「黄易的初拓」とされるに拠ったもので（容庚書に、「分図三卷、乃黄易手拓本、仮之馬衡先生」とある）、現故宮博物院蔵（馬子雲氏前掲論文）。問題は、唐拓の話題の途中に、どうして原石の拓本（陸和九本）の話が出てくるのか、という点にある。その原因は、どうやら女史が二人の陸氏（陸賁夫へ紹曾、陸和九）を混同したことにあらしののだが、このことを説明しようとする、非常に厄介なことが持ち上がる。即ち、それには問題の、「その後、容庚は陸和九氏から、拓本の完全な揃いを借りようとした」の一文に続く、女史の、

陸氏の版には、榜題を伴う合計七十八人の人物が描かれていた——顧藹吉に知られたものより二人多い（隸統版では、一六二人が含まれ、その八十六人には、榜

題がなかったことを想起せよ)

という主張の内容を、理解することが必要となるし、その「榜題を伴う合計七十八人」とは、実は、隸統卷六に描かれた人物の数から、出たものに外ならないからである(後述)。つまり私達は、隸統六に描かれた人物像の数を、知らなければならぬのである。そして、そのことが極めて厄介なのだ。しかし、学問に王道はないから、以下、所定の手続きを踏んで、隸統六の武梁画像における、人物や榜題の数を確認しよう。一方で、このことはまた、前述の隸統卷十六における、武梁画像の榜題の実態の確認(表二、四)と共に、女史の主張する、洪适による武梁画像の偽造、朱彝尊による隸統の増補改訂、黄易による隸統に基づく武梁画像の再刻などの問題(主張2、4、6、7、8)の信憑性を、私達が判断する上で、大変有益な足場となるものであろう。

さて、まず洪适が武梁画像に見える人物や榜題の数を、どのように捉えていたか、ということは、隸釈及び、隸統における、次の二つの記述から知ることが出来る。

・右武梁祠堂画像、為石六、其五則横分為二。梁高行蘭相如二段、又広於它石。所画者、古帝王忠臣義士孝子賢婦、各以小字識其旁。有為之贊文者、其事則史記兩漢史列女伝諸書、合百六十有二人。有標

題者八十七人、其十一人磨滅不可レ弁。又有鳥獸草木車蓋器皿屋宇之属甚衆(隸釈十六)

・右武梁祠堂画記、自伏戲至於夏桀、齊公至於秦王、管仲至於李善、及萊子母、秋胡妻、長婦児、後母子、義漿羊公之類、合七十六人。其名氏磨滅、与初無題識者又八十六人(隸統六)

両書における、洪适の計算法は、やや分かり辛いが、洪适はまず隸釈において、武梁画像中の全人物を百六十二人とし、その内の八十七人には標題即ち、榜題(題記)があるものの、八十七人中の十一人の榜題は、磨滅して判読出来ないとして述べている。つまり全百六十二人中、判読可能な榜題をもつものが七十六人(81-11)、判読不可能なもの(即ち十一人)は、七十五人(162-81)としている訳である。次いで、洪适は隸統において、判読可能な題識即ち、榜題をもつものを全部で七十六人とし(後の文から知られる)、また、判読不可能なもの(即ち七十五人)と併せて、合計八十六人となっているが、隸釈によると、前者は十一人、後者は七十五人だから、併せて八十六人となるし、それに判読可能な榜題をもつもの七十六人を加えれば、計百六十二人となって、両書は結局、同じ事柄を違った言い方で記したものに、過ぎないことが分かる。これを簡単に纏めると、左のようになる(榜は、榜

題で、標題、題識を表わす。

○有榜 87

「判読可能 76
判読不能 11」

○無榜 75

「 86」

◎計 162

ここで、もう一つ考えておくべきことがある。それは、実際の隸続卷六の武梁画像に描かれた、人や榜題の数の問題である。ここまでは比較的分かり易いが、非常に分かりにくいのは、実際の隸続六における、その数であろう。次いで、そのことを少し考えてみる。

さて、洪适が武梁画像における人数の総数を、百六十二と数えていることについては、後考を期したく、取り敢えずここでは、隸続の摸図中に残された榜題、題記を数えよう。左に掲げる表六は、隸続六におけるその榜題、題記を一覧としたものである。本文は汪日秀本で、以下の四つの本及び、原石のそれを対校してある（通し番号へ表一参照）を付した。

○汪日秀本（底本。汪本と略称する。〈以下同〉）
・揚州本（揚本）

・四庫全書本（四本）

・上海圖書館藏影元抄本（上本〈蔡元培跋本〉）

・北京圖書館藏明刻本（北本）

・上記四本（四本）

表中の†は、注記を表わしており、当該本文に関する、主として諸本間における異同等の注記を、表末に記すこととした（表末の注記は、通し番号と注番号で示してある）。▽は、題記（贊）の省略を表わし、以下に文辞の省略の存することを示す。隸続の武梁画像中の題記（贊）が、おそらくスペースの関係から、主に人名のみを留め、大半のそれを隸続十六の記述に譲っていることは、早くに王昶が、

洪氏……題字另詳于隸積、而于碑圖但列人名二三字。是画与贊離、而為二觀者不能瞭然。茲悉依碑画贊全摸而於後跋中、不復重列。（金石萃編二十）

と指摘している如く（殆ど同じことを、容庚も指摘していた）、武梁画像の場合、隸続の図像と隸積の榜題、題記の記述とは、両書が互いに相補い合う関係にあることに、是非とも注意すべきであろう。従って、省略された文辞（▽）やまた、その他隸積一般との異同については、前掲表二、表四を比較、参照されたい。□は、空格（文字のない囲い）を表わす。汪本上本北本は黒塗（文字は黒抜き）、揚本四本は線書きとなっている。榜題本文の下

表六 隸統卷六榜題一覽

19 子騫後母弟
 18 曾子[↑]₁ 怨家攻者
 17 京師節女
 齊繼母
 前母子
 後母子[↑]₃
 16 追吏騎[↑]₂
 掠者[↑]₁
 15 長婦兒
 梁節姑姊
 使者[↑]₁
 14 楚昭貞姜[↑]₁
 衛將軍[↑]₃
 姑姊兒[↑]₂

	乞漿者	31湯父	魏湯	32孝（孝烏）	33葬者（趙苟）	34孝孫	孝孫父（孝孫祖父）	35管仲	齊桓公	曹子（曹子刳桓）	魯莊公	36侍郎（二侍郎）	專諸▽	吳王	37荆軻 [†] ₁	樊於其頭	秦武陽	秦王	38藺相如▽	秦王	39范且 [†] ₁	<div style="border: 1px solid black; width: 1em; height: 1em;"></div>
--	-----	------	----	---------	----------	------	-----------	------	-----	----------	-----	-----------	-----	----	--------------------------------	------	-----	----	--------	----	--------------------------------	---

40 \uparrow 1 \uparrow 2 (魏須賈)

41 \uparrow 1 \uparrow 2 (要離)

42 \uparrow 1 \uparrow 2

43 \uparrow 1 \uparrow 2

44 \uparrow 1 \uparrow 2 (趙襄子)

45 \uparrow 1 \uparrow 2

46 \uparrow 1 \uparrow 2

47 \uparrow 1 \uparrow 2

48 \uparrow 1 \uparrow 2

49 \uparrow 1 \uparrow 2

50 \uparrow 1 \uparrow 2

51 \uparrow 1 \uparrow 2

52 \uparrow 1 \uparrow 2

53 \uparrow 1 \uparrow 2

54 \uparrow 1 \uparrow 2

55 \uparrow 1 \uparrow 2

56 \uparrow 1 \uparrow 2

57 \uparrow 1 \uparrow 2

58 \uparrow 1 \uparrow 2

59 \uparrow 1 \uparrow 2

60 \uparrow 1 \uparrow 2

61 \uparrow 1 \uparrow 2

62 \uparrow 1 \uparrow 2

63 \uparrow 1 \uparrow 2

64 \uparrow 1 \uparrow 2

高政

43 無塩媿女

齊王

鍾離春

44 処士

泉功曹

45 无

46 无

47 无

48 无

49 无

50 无

51 无

52 无

53 无

54 无

55 无

56 无

57 无

58 无

59 无

60 无

61 无

62 无

63 无

22 \uparrow 1 母、揚本「用」、上本北本無。

26 \uparrow 1 原石下欄右に「朱明兒」横書存。

27 \uparrow 1 李氏遺孤、原石欠損。

28 \uparrow 1 忠孝李善、原石欠損。

29 \uparrow 1 休屠像、原石欠損。

34 \uparrow 1 原石上欄右に「孝孫父」横書存。

35 \uparrow 1 魯莊公、揚本四本無。

37 \uparrow 1 荆軻、四本無。

39 \uparrow 1 荆軻、原石も存。

40 \uparrow 1 四本無。

41 \uparrow 1 予讓、揚本四本無。

42 \uparrow 1 予讓、揚本四本無。

43 \uparrow 1 無塩媿女、四本無(但し、北本線書きの空格とする。当句は原石にも存するが、「鍾離春」題記の一部)。

41 \uparrow 1 予讓、揚本四本無。

42 \uparrow 1 予讓、揚本四本無。

表六によれば、例えば汪日秀本の榜題数は七十八、空格が十三となり、また、原石のそれは八十九(原石は後述、三榜題を欠くので、実際は九十二)と三となる。その違いは、汪日秀本の空格十三の内、原石では判読可能なものが九あり(14 \uparrow 1、15 \uparrow 1、16 \uparrow 1、3、22 ∇ 、29 \uparrow 1、39 \uparrow 1、40 \uparrow 1、41 \uparrow 2)、原石(及び、他本)に無い空格が一あ

つて(16↑2)、また、汪日秀本には、原石(及び、他本)に無い榜題が一(43↑1)存することに加え、原石欠損の三榜題(27↑1、2、28↑1)を有する反面、原石欄外にある六榜題(13↑1、15↑1、18↑1、26↑1、34↑1、40↑2。殆どが横書)を欠いていることである。汪日秀本を含む隸続五諸本及び、原石の榜題数を、表六に基づいて一覧としたものが、表七である。

表七 隸続諸本の榜題数

計	・空 格	・榜 題	汪本	揚本	四本	上本	北本	原石	隸 続 積
91	13	78							
81	8	73							
77	5	72							
87	11	76							
88	12	76							
92 (95)	3	89 (92)							
87	11	76							

表七を見ると、汪日秀本は隸積十六、隸続六の洪适の記述数(榜題76、空格11、計87)から遠いことが知られるが、揚州本、四庫本はさらに遠いことが分かるであろう。そして、興味深いのは、隸続の上海圖書館藏影元抄本、北京圖書館藏明刻本が、洪适の記述と一致し、正しく洪适摸写に掛る、隸続原本の面影を伝えるものと思われることである(但し、北本は線書の一空格(43↑1)が多く、汪本に近

付く)。それらの二本は、いずれも元泰定本から出たものと見られ、また、汪日秀本武梁画像の源をなすものである。

この二本が取り分け貴重なのは、隸積と照らし合わせることによって南宋時代、洪适がどのような武梁画像を目にしていたのか、極めて具体的な事実が判明することである。例えばまず、洪适の目にしたそれには、原石欄外の主として横書された六榜題等、次の八榜題がなかった。具体的には、「兄子」(13↑1)、「姑姉児」(15↑1)、「讒言三至、慈母投杼」(18↑1)、「朱明児」(26↑1)、「孝孫父」(34↑1)、「王慶忌」(40↑2)と、「魏須賈」(39↑2)、「要離」(40↑1)である。これらは、今日においても見落とすし易いものが多い。次いで、原石にも存する、三つの空格(榜はあるが、文字がないもの。11↑1、39↑1、40↑2)があった。従って、洪适が判読不能とした十一人の内、「与初無題識」(隸続)ものが三、「名氏磨滅」(同)のもの、八であつたことが知られよう。そして、その八の内六は、表六中の□の下に()で補入した(39↑2「魏須賈」、40↑1「要離」を除く)、

楚昭貞姜(14↑1)

追吏騎(16↑1)

死人(16↑3)

柏楡……(22▽)

三州孝人也(29↑1)

趙襄子(41↑2)

であつたことが、それらの共に隸釈に存しないことから、確実である。それらは、いずれも原石と較べ、拓本の状態が悪かつたものと思われる。さて、残る二つは、件の二本によれば、□□で示される、「姑姉其室…」(15↑1)題記と「荆軻」(37↑1)となるのだが、この二つは共に隸釈に存することから(表二、表四)、「名氏磨滅」(隸統)の例に当たるものとは考え難い。従つて、「荆軻」は、或いは、汪日秀本の形が正しく、「姑姉其室」題記は、表六▽の例に倣つて、洪适の省略したものとするべきであろう。すると、残る二つの「名氏磨滅」(隸統)の図像とは、

32孝(孝鳥)

33葬者(趙苟)

がそれに該当するものと思われる。隸釈を見ると、「孝」「葬」字下にそれぞれ「闕一字」の注記があり(表二、表四)、33には洪适の誤認もあつて(但し、学齋佔畢も同じ)、これでは、両図が何を描いたものなのか、全く分らない。さらに両図には、古来難解とされてきた研究史もあつて、両図の正確な内容が解明されたのは、ごく最近のことに過ぎないことも考え併せれば、洪适が32、33の榜題を、「名氏磨滅」の例に含めたことは、十分にあり得るこ

とと言えよう。

女史の批評に話を戻そう。かく眺めきたつた後、漸く女史の主張の不合理さ、特にその数値の異様さを、理解することが出来る。今一度、その注59を見よう。

その後、容庚は陸和九氏から、拓本の完全な揃いを借りようとした。陸氏の版には、榜題を伴う合計七十八人の人物が描かれていた——顧藹吉に知られたものより二人多い(隸統版では、一六二人が含まれ、その八十六人には、榜題がなかったことを想起せよ)

唐拓流伝史の話題がここで突如、原石拓本のことへ転じる不自然さに関して、先に述べた。さて、女史の、「隸統版では、一六二人が含まれ、その八十六人には、榜題がなかったことを想起せよ」との言い分は、一見正しそうに見えるが、正確ではない。「榜題がなかった」のは、実際は七十五人であり、残る十一人は、判読不能(「磨滅不可」弁)(隸統)であつたに過ぎないからである。それはともあれ、この「想起せよ」の文の直前に置かれた、

顧藹吉に知られたものより二人多い

とは、どういうことなのか。この一文を素直に理解することとは、まず無理である。その理由は、一つならざる女史の事実誤認が重層しているためである。例えば、「顧藹吉に知られた」というのは前引、顧藹吉の隸弁八のb、dによ

るもので、そのb、dは隸釈、隸続を引用したものだから、顧藹吉が確認した数字なのではない。次いで、問題なのは、「二人多い」即ち、

陸氏の版には、榜題を伴う合計七十八人の人物が描かれていた

とある所で、この七十八人という数字は、一体何処から出てきたものなのか。おそらくそれは、翁方綱の復初齋集外詩十七に収める、「題下小松所借吳門陸氏響揚武梁祠像冊」と三首中の第一首末句、「不曾盡錄借鄱陽」の後に置かれた二行の割注に、

洪文惠跋云、有題字者八十七人。実止七十八耳。

今隸釈板本誤倒其文

とある、「実止七十八耳」によったものに違いない（当詩のことは、女史の注60に言及されている）。詩の鄱陽は、洪适のことで（その生地、江西省鄱陽県から）、その注は、翁方綱の自注であって、面白いことに、翁方綱は、五年前に刊行された汪日秀本隸続の、判読可能な榜題を数えたものと思われる（表七）。四庫本を使った場合、その「有題字者」は、七十二となって（表七）、七十八とはならないからである。そして、「有題字者八十七人……今隸釈板本誤倒其文」は、翁方綱が、隸釈の、

有標題者八十七人、其十一人磨滅不可辨

とある、――部を見落としたものであろう。さて、女史が、陸氏の版には、榜題を伴う合計七十八人の人物が描かれていた

と言う時、その「陸氏の版」というのは、どの陸氏のことを指すのであろうか。翁方綱が榜題数を七十八と考証するきっかけとなった、詩題の「吳門陸氏」は、陸貫夫のことである。ところが、女史の言う「陸氏（の版）」は、明らかに前の文章を受けたもので、陸和九以外にはあり得ない。しかし、陸和九本の榜題数は、八十九（九十二）なのであって、原石のそれと全く一致しており（陸和九前掲書。陸和九自身は、「右三石統計八十五榜」と言っているが、それは、例えば12「秋胡妻」「魯秋胡」二榜を一榜とするなど、数え方の違いによるものである）、それが七十八などということもまた、あり得ないのである。つまり、女史は二人の陸氏を混同したのである（女史の文章の三箇所に見える「陸氏の版 Mr. Lu's version」の、本文の二箇所は陸貫夫、注のそれは陸和九を指している）。そして、その混同こそが、唐拓流伝史の話題（陸貫夫版）に原石拓本の話題（陸和九版）を接木する、内部矛盾を引き起こしたものと思われる。

注59における女史の主張は、このように検証してみると、正しく言語道断とすべきものである。女史の主張を組み立

ている、個々の事柄は、各自それなりの根拠を有するものとせよ、それらを繋ぎ合わせた主張を形成するに際し、その主張を支える筈の事実性というものは、全く顧慮された跡がない。隸釈、隸統における、武梁画像の榜題数や関連についても、隸統の図像中のその実態や原石拓本との関わりに関しても、丸切り無頓着である。かくして組み立てられた女史の主張は、それらしく見える事実の断片を、思いのままに継ぎ接ぎしたのみのものに過ぎず、それ故、客観的な検証に堪えるだけの力をもっていない。私は、隸釈、隸統や原石拓本など、言わば一級資料に対し、女史が殆ど敬意を払わないこと、或いは、恰も敵意をもって臨んでいるように見えることを、甚だ残念に思う。

上掲536頁の女史の文章において、本文に、
その上、それまでに翁は、隸統卷六の四庫写本版を利用することが出来た

とある一文と、注61に、
黄易が彼自身で遺跡を訪れる前に、遺跡からの拓本を配ったことに注目せよ

とある一文には、注意が必要である。前者については、先にも触れたが、両者はいずれも前述、女史の主張、

8 黄易は、武氏祠の発見に先立つ四年前の一七八二年に、嘉祥県の漢太子墓において、翁方綱から提供された、

完成したばかりの四庫全書本隸統卷六の図像を用いて、武梁祠原石を再刻した

を示唆するものである。女史は、翁方綱と黄易とを、武梁祠偽刻における言わば共犯関係にあったものと捉えているが、特に注61の一文からは、女史の延々と続く唐拓流传史の記述の目的が、偽刻を世に出す周到な準備、前宣伝に外ならなかったことの示唆にあったことが知られよう。女史の黄易批判に関しては、改めて述べることにして、ここで、その翁方綱批判の一例を見ておきたい。

八

III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence 538頁左一行以下に、次のような翁方綱批判が記されている。

近代の金石学の専門家は、翁〔方綱〕によつて本物と鑑定された資料の内のおよそ八十パーセントが偽物であると信じている。しかし、古物蒐集に対する嗜好をもつ、普通の人達は、武梁画像の場面の纏れた歴史が終に解明され、一古代遺産が成功裏に再興されたことに、満足しない理由がなかった(538頁左)

武氏祠の発見と保存に対する、一般的な受け止め方を述べる文章の前に置かれた、翁方綱批判の一文は、翁方綱が鑑

定に関わった大半は、偽物であることが判明しており、その下にある黄易により発見された武氏祠も十中八九、偽物であろうことを読者に匂わせる、強烈な効果をもっている。私がかねてこの一文の出典を知りたく思っていたが、昨年刊行された *Rethinking Recarving: Ideals, Practices, and Problems of "Wu Family Shrines" and Han China* (Princeton University Art Museum, 2008) 所収、ニラン女史の "Response to Qianshen Bai"³³⁹ 頁右及び、注 12 (341 頁) の記述により、女史の言う、「近代の金石学の専門家」が、実は王壮弘のことであり、その出典が『碑帖鑑別常識』(上海書画出版社、一九八五年) 61、62 頁であることを知った。では、王壮弘氏は本当に、「翁〔方綱〕」によって本物と鑑定された資料の内のおよそ八十パーセントが偽物であると信じている」ということを、その書において述べているのであろうか。女史が批判の根拠としたのは、該書の次の箇所である (62 頁)。

名家失誤如翁方綱于《化度寺銘》真偽顛倒、一誤再誤王壮弘氏は、確かに翁方綱が拓本の真偽を取り違えたことや、誤りを繰り返したことを指摘しているが、それは女史の言うような、一般的な意味で言われているのではなく、飽くまで化度寺碑拓本の研究史上における批判として、述べられていることに注意すべきである。従って、王壮弘氏

の右の批判の意味を知るためには、批判の対象となった、化度寺碑拓本の研究史に少しく立ち入る必要がある。化度寺碑は、正しくは化度寺邕禪寺塔銘と言ひ、李百葉撰、歐陽詢書に掛る、三階教の高僧邕禪師の舍利塔の銘であつて、貞觀五 (六三一) 年に建てられたが、三階教の弾圧に伴ひ、既に唐代に断裂、宋代には原石も失われて、拓本のみが伝わるものである。他方、化度寺碑拓本は、書史の上で、唐の楷書として最も高く評価されたものの一として、古來その名が知られる。さて、その化度寺碑拓本の研究史においては、翁方綱の残した事跡及び、その今日的意義については、中田勇次郎氏『王羲之を中心とする法帖の研究』(二玄社、一九六〇年) 十三章「唐代の碑」の中に、極めて具体的な言及があるので、以下にそれを引用したい (王壮弘氏にも、前掲書 87—88 頁に同主旨の言及がある)。次に掲げるのは、その 2 「歐陽詢化度寺塔銘」序節の一節である。

乾隆嘉慶の間に出た翁方綱は、言うまでもなく化度寺碑研究の第一人者である。しかし、化度については、彼の漢碑や蘭亭序や廟堂碑の場合におけるようなまとまつた著述がなく、ただ、彼の復初齋集や集外集などに、題跋が散見するだけのようであるが、実際においては、彼がこの碑のためにかいた題跋の類はこの他にもおびただしい数に上つていて、特に翁氏所蔵本の帖

の内外には無慮百五十則余の題識があり、これなどは全く化度寺碑の一著述と言つてもよいものである。彼がその生涯において化度寺碑を研究したのは、乾隆四十五年（一七八〇）蔣愚亭旧蔵の一本を手に入れた頃から、彼の卒する嘉慶二十三年（一八一八）まで、約四十年近くの間、いわば畢生の力を傾倒してこの研究に当つたのである。その研究の成果の大たいは、嘉慶五年頃にしたためられた長跋、これは文集にも載せられているが、それに集大成されている。その考証の精密さはたぐいのないもので、あらゆる文献、あらゆる拓本、一つとして見逃さない態度である。それでは彼の見た拓本にはどんな種類のものがあつたか、また、それをどのように鑑別したか、それについてここに要約してみよう。まず第一種として、翁氏所蔵本・玉泓館本・玉弇州第一本・同第二本、鮑東方所蔵本、以上の五本は何れも同石で、これを范氏書樓唐原石本とし、玉泓館本を最も古拓としている。ただし、晩年の一跋には所蔵本を最先としていることもあり、絶対にそう見ていたわけでもない。第二種として王孟揚本・陳彦廉本・鮮于伯機題跋本即ち呉門繆氏本の三本をとり、何れも宋初翻本としている。第三種として後世の摹刻本の横石本・墨池堂帖本・直石本・薛衡本等を一類と

している。彼の取り扱つたのはこの三種であるが、これを分つためには、極めて精密な合理的方法を用いており、この三種の系列の立てかたには誤りはなからうとおもわれる。ただ、彼はまだ敦煌本のあることは夢にも知らなかつたのであるから、彼の第一種は実は宋翻本であり、第二種がかえつて唐原石拓本であることは全く彼の予想しなかつたことである。これは全く時代の相異からきたことで、もし彼が敦煌本を見たとしたら、あるいはもつと違つた結果になつたかもしれない。この碑は宋代に原石が破壊されたので、全碑の形式がよくわからないので、その覆元をする必要があつた。そこで彼は上記の諸本を対校し、辛勤労苦、遂に嘉慶五年に「范氏書樓三段殘石圖」を完成した。これは原碑の文字の位置を示すとともに、碑の三段に断裂した痕跡を图示したものであろうが、今、見ることはできない。しかし、現在坊間にも影印されている翁氏の「化度寺碑全圖」によつて、文字の位置はよくわかる。また、彼の門人李彦章の抄写した「化度寺碑考」に「全碑三十四行圖式」、「宋拓初翻本圖式」、「北宋洛陽范氏賜書樓壁石圖式」があつて、各本について圖式の詳細を知ることができる。殊にこの中の「宋拓初翻本圖式」は今から見れば唐原石の圖式に相当する

もので、実に貴重な資料である。しかし、彼の作った化度寺碑全図は、今日から見れば、なお、資料において欠けるところがあり、碑字の位置、残闕についても多少訂補すべきところがある。これについては、化度寺塔銘校字記に詳細を論ずることとした。上に述べたとおり、かれの拓本の鑑定には誤りがあつたけれども、この難解な碑を取り扱つて、よくその系統をあきらかに判別したことは、たしかにかれのみのなしうること

で、実に敬服のほかはない

中田氏による化度寺碑拓本の研究史の概要から、翁方綱がその拓本の諸本を、第一種から三種に分類し、その内の第一種を唐原石拓本とし、第二種を宋初翻本、また、第三種を後世の摸刻本としたことが知られる。ところが、その後、二十世紀初頭に発見された敦煌文書の中から、唐の原石拓本が出現したことで、化度寺碑拓本の研究は飛躍的に進展する。即ち、敦煌本こそは、「文字の漫漶したところのほとんど見られない初拓本で、史料としても唐拓として疑いのないものであり、歐陽詢のこの碑の書法のものすがたを見るに最上の基準となるものである」（中田氏前掲書十三章211敦煌所出残本）とされる優品で、その劇的出現が、従来の研究史を一変させることになったのである。敦煌本の出現の結果、明らかとなったのは、翁方綱の宋初翻

本とした第二種本が、唐原石拓本に当たつていたということである。そして、王壮弘氏の言う「真偽顛倒」云々は、正しくこのことを指している。ならば、翁方綱の研究史的業績というものは今日、どのように捉えられているのであろうか。例えば中田氏は、「この碑の拓本は、唐の原石拓本と、宋の翻刻本と、明、清の翻刻本とに大別することができる。唐の原石拓本としては……〔次〕の四種がある」として、

1 敦煌所出残本

2 王孟揚本

3 陳彦廉本

4 吳門繆氏本

の四本を上げられているが（前掲書十三章21）、新出の1を除く2—4本は、翁方綱が第二種と認定した、そのままでのものとなっている。故に、中田氏は、「彼の取り扱つたのはこの三種であるが、これを分つためには、極めて精密な合理的な方法を用いており、この三種の系列の立てかたには誤りはなからうとおもわれる」と述べて、翁方綱の研究内容の大半が、現在においてもなお基本的に正しいことを認め、「かれの拓本の鑑定には誤りがあつたけれども、この難解な碑を取り扱つて、よくその系統をあきらかに判別したことは、たしかにかれのみのなしうことで、実に

敬服のほかはない」と、その業績を高く評価されているのである。このことから、王壮弘氏の言は、そもそもが拓本を鑑定することの難しさを述べたもので、それを専門とする翁方綱のような大家でさえ、一度ならず鑑定を誤った化度寺碑拓本を例に上げ、鑑定に対する余程の慎重さを、読者に求めたものであることが分かる。だから、王壮弘氏の言は、決して女史の主張するような意味で述べられたものではない。女史は、翁方綱が恰も偽物を本物と偽り続け、そのことから、黄易による武氏祠の偽刻にも、積極的に加担したかの如き言い方をするが、それはとてもない言い掛かりとすべきである。翁方綱の学問は、女史の誹謗するような、不公正なものではない。「翁〔方綱〕によって本物と鑑定された資料の内のおよそ八十パーセントが偽物である」などとする、女史の放言は、翁方綱に対する侮辱であると同時に、清朝考証学（乾嘉学派）の学問的名声に泥を塗る行為でもあり、研究者として到底許されることではない。

右の文章に引き続き、女史は黄易の発見した原石、拓本、版本など、諸版の図像間に看取される種々の変化、異同について批判し、武氏祠偽刻の傍証とする。紙幅の関係から、その文章の掲出は省略するが、批評の要点の目を言えば、かつてニラン論文 II. Stele Summary の批評において述

べたように、文献学的方法を無視した、女史の主張の誤りが指摘出来る。即ち、女史は原石、拓本、版本などを一切区別せず、それらを同列に扱う。文献学においては例えばまず、

一、拓本（原石）

二、版本

を厳密に区別すべきことは、余にも初歩的な事柄に属する。何故なら、一は、原本の面影をよく留めるのに対し、二は、版刻の段階で人為的な操作が加わるため、場合によっては、原本とは似ても似つかぬ結果となることも、屢々だからである。一、二の表現内容が異なることは、例えば写真と絵との表現効果が異なるようなもので、二は当然、千変万化し得る。一の拓本にも、小さな変化はあるものだが、女史は、そこに二の版本を加えて、種々の変化、異同を批判している。ために、女史の上げる例は、偽刻に関する、証拠能力を殆ど持たないのである。一つだけ例を上げよう。538 頁右及び、558 頁左の注 75 において、女史は、次のように述べている。

一世紀後の一九三六年に、容庚は、彼の時代に有用な、最善の拓本——黄易自身の拓本であると言われた、馬衡（一八八一—一九五五）の一卷本（現在、北京の故宫博物院蔵）——を用いて研究していると考えていた



a



b



c 1



c 2

図九

a 原石、b 馬衡版、
c 黄易版（1 唐拓、2 原石）

が、しかし、それらの拓本さえも、今日知られる
画像石と精確には適合しない。⁷⁵（538 頁右）

75・馬衡は、一九三四年に故宮博物院の院長とな
った。相違の一例として、伝説上の皇帝伏羲のた
めの刻銘中の第二、五、そして、八番目の文字が、
馬衡の版におけるものと、黄易の本に記録された
ものでは異なっていた（538 頁左）

女史は、武梁祠の1 伏戲、女媧図（表一、1）の題記
（表四、1）を取り上げ、

a 原石

b 馬衡版

c 黄易版（1 唐拓、2 原石）

の三（四）者間において、
伏戲倉精、初造王業。

の第二、五、八番目の三文字（○印を付す）が異なっ
ていると主張する。図九は、その a、b、c 1、2 を示
したものである（a は、蔣英炬、吳文祺氏前掲書図版
37①、b は、容庚書、c 1、2 は、小蓬萊閣金石文字に
拠る。なお唐拓原本は失われている）。図九を見ると、
a、b、c 1、2 三（四）者間の三文字に、女史の指摘
するような相違のないことが知られよう。それら三文

字は、本文批判上、全て同じものと判読される。そして、容庚が底本としたb馬衡版、また、c₁²黄易版が、極めて優れたものであることも、何ら変わりはない。但し、a、bは拓本であり、本質的に同じものであるが、c₁²は模写、版刻されたものであって、a、bと同列に扱えない面を有することは、その見掛けの全く異なる点からも了解出来る（因みに、馬衡氏が故宮博物院院長に就任したのは、一九三三年であるへ『馬衡日記附諸鈔』一九四九年前後の故宮、紫禁城出版社、二〇〇六年）。

また、女史は、その前の所で、馮鵬、馮鵬による金石索（一八二一年刊）が原石、拓本、版本間における、様々な異同を始めて明らかにしたと主張しているが（注74に引く『校碑隨筆』巻一本文を、女史が完全に誤読していることは、前稿の西闕銘の批評の中で述べた）、このことも全く事実に反する。もしそのような本を上げるとすれば、翁方綱の兩漢金石記を措いてないことは、女史の前言を思うと、誠に皮肉なことである。ともあれ、女史の主張の内に次々と繰り出される、歪んだ事実の集積は、偽刻の仮説を学問的に何も保証しない点、極めて不毛なものと評さざるを得ない。しかし、危惧すべきは、女史により余りに憶面もなく羅列され続ける、数々の誤りに接した読者が、明らかな誤りであるにも関わらず、恰もそれらを事実であるかの如

く、錯覚してしまうことであろう。ドグマの色彩を帯びた、女史の主張に対しては、殊更に読者の検証が必要とされる所以である。

最後に、右記の例にも表われた、女史の黄易批判について検討する。黄易こそは、女史の偽刻説において、言わば主謀者と目された人物で、洪适と共に偽刻説の要に位置する点、女史の黄易批判を公正、客観的に見究めることが、その偽刻説を内部から批評する、極めて重要な仕事となる。女史による、一方の洪适批判（隸釈批判、隸統批判）に関しては、それを全くの誤りと見るべきこと、これまでに見えてきた通りであるが、残る黄易批判は、果して正しいのであろうか。まず、III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence の533頁右—534頁左、536頁右—537頁左に見える、二つの関連連した黄易批判を掲げる。

趙紹祖（一七五二—一八三三）は、武梁画像石板に言及して、「今日、それらは何も見られない」と書いたものだ。³¹武宅山における黄易のドラマチックな発見の前後に、丁度引用されたその言明は、一六九二年の地誌が、武宅山として知られる同じ遺跡で、紫雲山にある、未知の漢太子の一墓と考えた、石の「供え物をする堂」（享堂）の記述を考慮に入れたのかどうか、我々には分からない。そこには、石は「大変見事に彫

つてあり、「伏羲以来の、吉兆、そして、忠実で孝行な古代の名士」の場面を表現していたとある。³²これらの場面は、今度は少なくとも一人の専門家——容庚の一九三六年の著述——によって、「唐拓」として知られるようになったもの（全く分かりにくい）の源泉として認定されようとした。³³（533頁右—534頁左）

31・趙紹祖、金石文鈔（杭州、朱氏抱經堂、一八七六年）、卷1/14b。これは勿論、黄易を武宅山へ導いた、正にその記録の一つである。

32・黄易の後、その遺跡は消えた。容庚、『漢武梁祠』、3b頁を見よ。蔣英炬、「関于漢画像石產生背景与芸術功能的思考」、『考古』一九九八、一一、90—96頁は、容に対する反論において、とにかく、今まで画像石で飾られた、漢の太子の墓が発掘されたことはいと指摘する。伏羲の誤認の可能性については、孟慶利、「漢墓軀画『伏羲・女媧』考」、『考古』二〇〇四、四、369—74頁を見よ。

33・容庚、『漢武梁祠』、3b頁を見よ。（534頁左）

この交換の系列を追っている内に、人は簡単に一つの点を見失ってしまうであろう。即ち、翁方綱自身の唐

拓への奥付によると、武氏に帰せられる画像石の黄易の「再発見」に先立つ一年前の、そして、黄の発見の一部だったかもしれない石に、地誌が言及してから一世紀以上後の、一七八五年までに、翁方綱と黄易は、唐拓の画像場面の多くの版を既に流通させていた。⁶⁵

（536頁右—537頁左）

65・濟寧直隸州志（一七八五）、王道亨編、卷17「古跡」部、碑考下を見よ。参照、容媛、『金石書錄目』

（台北、大通書局、一九七一年）、卷5/3a

（557頁左）

右の二つの記述は共に、「（一六九二年の）地誌」に述べられた、漢太子墓のことを問題としたもので（後者は、先にも触れた）、女史は、黄易がそれを武氏祠の画像石に再刻したのであるうことを、婉曲に表現している。それはまた、女史の主張8の一部、再刻の場所を構成するものである。始めに、女史は、趙紹祖の金石文鈔—「漢武氏石闕銘」の、「洪景伯隸釈隸統、自数碑外又有武梁祠堂画像。今皆不可得見矣」を引いて、それを無理矢理、漢太子墓と関連付けようとする。女史の願望は理解出来るが、それにしても、極めて不自然な行文とすべきである。ところが、次の注31は、もっと奇妙である。

31・趙紹祖、金石文鈔（杭州、朱氏抱經堂、一八七六年）、卷1/14b。これは勿論、黃易を武宅山へ導いた、正にその記録の一つである

趙紹祖は、漢太子墓のことを何も述べておらず、また、黃易とも関係がない。にも関わらず、女史は、趙紹祖の記録が黃易を武宅山に導いたと明言する。それは具体的には、黃易が趙紹祖の記述にヒントを得、武宅山（紫雲山）の漢太子墓を、武氏祠へと再刻し直したということである。だから、「黃易の後、その遺跡は消えた」（注32）となる。しかし、趙紹祖、漢太子墓、黃易三者の関連は、女史がそれを主張すること以外に、果してどのような関わりがあるのか、私にはさっぱり分からない。女史は、「黃易を武宅山へ導いた」と言うが、そもそも黃易が武氏祠を発見するのは、乾隆五十一年（一七八六）年のことである。そして、趙紹祖が金石文鈔を編纂し版刻を開始したのは、嘉慶元（一七九六）年のことである（自叙）。さらに、女史の引いた、その「漢武氏石闕銘」を見ると、

嘉慶二年除夕前一日、吳子柳門寄以見示。因書其後而歸之。琴士趙紹祖識（柳門、名文炳、邑諸生）

とあって（除夕は、大晦日）、趙紹祖が武氏祠西闕銘の摸本を見、この文章を書いたのは、嘉慶二（一七九七）年十二月三十日であったことが知られる。すると、黃易は、武

氏祠の発見後、ほぼ十年を経て書かれたものにより、武氏祠（武宅山）へと、導かれたことになってしまう。それは余りにも馬鹿化た話である。思えば趙紹祖は、西闕銘の摸本を見たと言っているので、その文章が黃易の武氏祠（西闕銘を含む）の発見後、書かれたものであることは、それを注意深く読みさえすれば、明らかなことなのであった。

加えて、それ以上に読者を戸惑わせるのが、「一六九二年の地誌 a 1692 gazetteer」である。その一六九二年というのは、おそらく一六五二年の誤りであることが、女史の後者の文章に、「地誌が言及してから一世紀以上後の、一七八五年」と述べる、「一世紀以上後 over a century later」という言い方からも確実である（一六九二年だと、一七八五年の一世紀以上後にはならない）。以下、参考までに、順治九（一六五二）年序刊本の嘉祥県志一、方輿志墳墓（15丁表）及び、乾隆五十（一七八五）年重修刊本の濟寧直隸州志十五、古跡五陵墓、嘉祥県（34丁表）の本文を掲げる（注65の「巻17」は、巻15の誤り）。

・嘉祥県志一

漢太子墓。県南三十里、紫雲山西。上有石享堂三座。年久没于土下。尽者三四尺。石壁刻伏義以来祥瑞及古忠孝人物、極其纖巧。漢碑一通、亦余三尺許。在土外、中有二孔。文字模糊不可讀、相伝爲漢太子

墓二云

・濟寧直隸州志十五

漢太子墓。在嶧南三十里、紫雲山西。上有「石亭堂三座」年久没於土下、尽者三四尺。石壁刻「伏羲以來祥瑞及古忠孝人物」極纖巧。漢碑三尺許在土外、中有孔。文字模糊不可讀、相伝為「漢太子墓」云

黄易は、一七八七年の修武氏祠堂記略（兩漢金石記十五）において、嘉祥県志を引用し、前年の八月、「易訪得」掘堂乃武梁、碑為「武斑」ことに気付いたと述べており、その県志が、言わば黄易による武氏祠発見のきっかけをなしたものであることが知られる。ところが、女史は、このことを偽刻の動機と見做し、黄易等のそれら一連の言動に、疑惑を挿もうとするのである。しかしながら、疑惑がむしろ当の女史の主張の方に多いことは、例えば注32において、蔣英炬、「關於漢画像石產生背景与芸術功能的思考」、『考古』一九九八、一一、90-96頁は、容に対する反論において、とにかく、今まで画像石で飾られた、漢の太子の墓が発掘されたことではないと指摘する

とされるような「指摘」の内容が、蔣英炬氏の論文中に全く見当たらないことに、示される通りなのである。

さて、ここで聊か検討してみたいのは、女史の二番目の文章に表われた、一七八五年という年紀である。一七八五

年は、言うまでもなく、黄易による武氏祠発見の一年前に当たり、また、前述唐拓流传史を綴る女史の目的——唐拓流传を偽刻の前宣伝として捉える、仮説の成否が集約してゆく年とされている。問題は、女史が一体何処からこの年を導き出したのか、ということである。件の年はまず、女史の二番目の文章の直前で、

翁（方綱）はその結果になお満足しなかったに違いない。と言うのは、翁は一七八五年に宋（葆淳）に対し、複写のためのもつと良い版を待つようにと助言しているからだ。⁶⁴

64・翁方綱、兩漢金石記、巻15、49頁

と述べていることから、その年の根拠が、翁方綱の兩漢金石記十五「武氏祠堂画像詩」の、「息壤豈敢宋子欺」の自注（息壤は、約束を守ること）

前年、予門人宋芝山謀欲重刻是画。予勸以俟善本。今則可矣

にあることが分かる。一方、黄易は一七八三年、陸貫夫による摸本を借りて翁方綱の許に寄せており（小蓬萊閣金石文字、兩漢金石記十五。女史もこのことを確認していることは、前述した）、王昶や容庚は、

・翁閣學覃溪……後得陸貫夫摸本、俾安邑宋芝山倩

趙君⁶⁵鋟⁶⁶木行⁶⁷世。此乾隆癸卯事也（金石萃編二十、52丁裏）

・翁方綱……後得吳門陸紹曾摸本、乾隆四十八年、俾⁶⁸安邑宋葆淳傳⁶⁹趙君⁷⁰刻⁷¹木以⁷²傳（「漢武梁祠画像考釈」二、3丁裏4丁表）

と述べて（乾隆癸卯は、乾隆四十八年で、一七八三年）、宋芝山による唐拓の版刻を、この年のこととしている（女史も52頁右及び、注61にこのことを指摘する）。すると、上掲「武氏祠堂画像詩」の翁方綱自注の「前年」は、この年即ち、一七八三年を指すものと見なければならぬ。そして、翁方綱の「武氏祠堂画像詩」が詠まれたのは、黄易による武氏祠発見（一七八六年）後のことだから、その「前年」は、単に先年、或いは、往年の意味である。ところが、女史は、その「前年」を武氏祠発見（一七八六）年の前の年、つまり一七八五年と取ったものと考えられる。このことから、女史が、

即ち、翁方綱自身の唐拓への奥付によると、武氏に帰せられる画像石の黄易の「再発見」に先立つ一年前の、そして、黄の発見の一部だったかもしれない石に、地誌が言及してから一世紀以上後の、一七八五年までに、翁方綱と黄易は、唐拓の画像場面の多くの版を既に流通させていた。⁶⁵

と主張する「一七八五年」は、甚だ怪し気な根拠しかもたない、年紀とすべきことが判明するし（何より翁方綱は、武氏祠発見後の自注において、「前年」の宋芝山の唐拓摸刊をストップさせた、と記している。故に、事実はむしろ、女史の主張の逆らしい）、さらに女史の主張を立証する筈の、「翁方綱自身の唐拓への奥付」なるものの、小蓬萊閣金石文字などに全く見当たらないことも、そのことを裏付ける。加えて、「石に、地誌が言及してから一世紀以上後の、一七八五年」という本文に付けられた注、

65・濟寧直隸州志（一七八五）、王道亨編、卷17「古跡」部、碑考下を見よ

は、明らかにおかしい。濟寧直隸州志の本文は、前掲の通りであり、その乾隆五十（一七八五）年に重修刊行されたことも事実だが、その刊年は、唐拓の流伝とは全く関係がないので、翁方綱や黄易が、「唐拓の画像場面の多くの版を既に流通させていた」時期を、限定することの根拠とはならない。にも関わらず、本文に上げられた年紀が、その刊年を上げただけのものに過ぎないとすれば、読者を惑わせること、これ以上のものはない。さて、注65に地誌を記すところば前掲、順治九年刊の嘉祥県志とすべきであろうところが、読者を惑わせる一七八五年の年紀は、濟寧直隸州志の刊年だけではない。なお重大なのは、女史が、

一七八五年までに、翁方綱と黄易は、唐拓の画像場面の多くの版を既に流通させていた⁶⁵

と主張する、もう一つの根拠として、注65に、

参照、容媛、『金石書録目』（台北、大通書局、一九七一年）、巻5/3a

としていることである。女史が参照を指示しているのは、民国十九（一九三〇）年に刊行された容媛輯、兄庚校による、『金石書録目』五（3丁表）に収める、小蓬萊閣金石文字の諸本のことで、その本文を示せば、次の通りである。

小蓬萊閣金石文字五冊（清錢塘黄易（小松）著 嘉慶五年鈎刻本 道光十四年石墨軒翻刻本 宜都楊氏翻刻本 此書共収石刻十種。其乾隆五十年刻本為武斑碑

武氏祠祥瑞圖題字鄭季宣碑范式碑四種。与此異）

容媛は右の記述において、小蓬萊閣金石文字には、石刻十種を収めるものと四種を収めるものとの、二つの系統の本があると言っている。それらを仮に、十種本、四種本とすれば、

・十種本（嘉慶五（一八〇〇）年本、道光十四（一八三四）年本、宜都楊氏本）

・四種本（乾隆五十（一七八五）年本）

となるが、私達が通常目にするのは、十種本即ち、嘉慶五年本の系統のそれである（例えば石刻史料新編三輯1に収

めるのは、道光十四年本。また、道光二十二（一八四二）年版もある）。一方、四種本は稀覯書で、管見に入ったものは、北京図書館（現、国家図書館）所蔵の一本を数えるに過ぎない（刊年不明の清刻本。但し、四種の内の范式碑を欠く。二〇〇五年版『中国古籍善本総目』二、史部金石類33頁下参照）。さて、注65に上げられた、『金石書録目』の本文を眺めると、女史が、

一七八五年までに、翁方綱と黄易は、唐拓の画像場面の多くの版を既に流通させていた

と主張する、「一七八五年」の年紀の有力な根拠の一つが、容媛の言う四種本の刊年（乾隆五十（一七八五）年）にあることが知られる。そして、翁方綱と黄易が流通させた、

「唐拓の画像場面の多くの版」とは、小蓬萊閣金石文字所収の唐拓（即ち、十種本における「武梁祠像唐揚本」）の諸版を指していることもまた、明らかと言えよう。すると、そこから二つの疑問が生じる。まず、『金石書録目』に著録されている小蓬萊閣金石文字の諸版は、嘉慶五年本、道光十四年本など、いずれも乾隆五十年本以降のものばかりである。それがどうして翁方綱、黄易が「一七八五年までにby 1785」即ち、乾隆五十年以前に、その「多くの版」を流通させたことの根拠となり得るのであるのか。そのようなことは、女史が『金石書録目』を粗忽に見て、嘉慶、

道光……乾隆と続く、小蓬萊閣金石文字の刊行年号を、全て乾隆五十年以前のものとして誤解したのでない限り、起こり得ないことであろう。故に、まず一七八五年以前のその諸版などというものは存在し得ず、翁方綱、黄易がそのようなものを流通させることなど、出来る筈もないことを確認しよう。次に、仮に乾隆五十年版のその存在を認めるとせよ、女史の主張する肝心要の「唐拓の画像場面」は、そこに載っているのであらうか。前掲『金石書録目』の本文を見れば、乾隆五十年版の内容は、四種（武斑碑、武氏祠祥瑞図題字、鄭季宣碑、范式碑）に過ぎず、武梁画像の唐拓を含まないことが明らかだ。資料の内容を十分に理解することなく論を立てる、女史の粗暴さが、明瞭に窺い知られる一例だが、この第二の点から、注65の『金石書録目』を根拠とする、女史の、

一七八五年までに、翁方綱と黄易は、唐拓の画像場面の多くの版を既に流通させていた

という主張は、完全に崩壊する。つまり翁方綱、黄易がそのようなことをした事実は、全然ない（黄易が唐拓の摸本を版刻するのは、唐拓の入手後、乾隆五十六～一七九一～年十月のことである〈小蓬萊閣金石文字〉）。加うるに、『金石書録目』に言う「乾隆五十年刻本」の年紀にも、強い疑いが残る。例えばそこに収められる武斑碑、武氏祠祥

瑞図などは、翌乾隆五十一年（一七八六）年の黄易の発見に掛るものであり、それらが乾隆五十年に版刻されることは、一寸考え難いためである。参考までに、乾隆五十年本に収める、石刻四種の発見年を示せば、次のようである。

- ・ 武斑碑……乾隆五十一年（一七八六）年
- ・ 武氏祠祥瑞図題字……同右
- ・ 鄭季宣碑……同右
- ・ 范式碑……乾隆五十四（一七八九）年

右の四種の発見年は、いずれも『金石書録目』に記す、四種本の刊年と矛盾している。従って、その乾隆五十年という刊年は、おそらく誤りであろうと思われる。さて、女史が翁方綱、黄易による前喧伝の時間軸とした、一七八五年という年紀は、客観的な根拠を全くもたず、女史が恣意的に構えた年時であることが了解出来よう。また、その仮の時間軸に添って配された、一見事実風の事柄——女史の主張内容が、殆ど事実無根の出鱈目なものに過ぎないことも、同時に理解出来る。

九

III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidenceにおける黄易批判をもう一つ検討し、小稿の批評を終えよう。その537頁右—537頁左の本文及び、注（557

頁)を示せば、次の通りである。

一七八六年八月に、黄易は、彼が直ちに武氏祠の「原石」と認定した発見を報告した。⁶⁶それから後の或る時——「日付の」記述は、「同じ日」のように短い時、または、五年後の一七九一年のように長い時と変化している——王雪疆により、彼の死ぬ前に黄易に対してなされた古い約束を果たすためか、或いは、黄易が紫雲山(武宅山とも呼ばれた)で丁度捜し出した、画像石の上に見付けた榜題の、黄易自身による手書き複写を、黄易が汪雪疆の弟、汪隣初に贈ったことに対するお返しとしてか、唐拓は、黄易の所有に帰した。⁶⁷黄易の発見は、唐拓の価値を幾分か減ぜざるを得なかった——少なくとも或る目的に賛成する、或る人々にとっては。結局の所、武梁画像の唐拓は、黄易により見出された一石のただ二区画分——一七九一年までに金石学の真剣な研鑽者に知られた内の纔か二十パーセントにしか相当しなかった(以下を見よ)。⁶⁹黄易は、彼が一七八六年に発見した石と、隸統を通じて知られる挿絵とを比較して、彼の石は、ほんの二、三の場面を欠くだけだと報告した(隸統の四庫全書写本版における巻6/9a-b)。正にそれらの場面を持つ石板は、一七八九九年に黄易により報告された、第二回目の発見の巡

視において、直ちに捜し出された。このように、一七八六年と一七八九九年になされた発見は、それまで清以前の子石学の古典から取り出された文学的記述、及び唐拓に情報を頼ってきた鑑定家に知られる、画像場面の数を限りなく増やした。黄易の石は、如何なる宋の専門家に知られたそれよりも極めて良い状態を保っていた。⁷⁰金石学の専門家王昶は、石の多くが洪适に知られた集成の中に見えず、そのことは、黄易により見出された画像石の全てが、必ずしも武氏一族の墓に属していたとは限らないことを、意味することに気付いていた。⁷¹けれども、翁方綱の愛顧に煽られた、黄易の並々ならぬ自己宣伝の天賦の才能は、全てのその画像石板を、ただ一つのもの構成単位と見做し、そして、唯一の保存会館に収容して保存することに取り組み、そこでは、祖先のための捧げ物が遠い死者に戻されることになったが、しかし、終に武氏一族を再構成したのである。(537頁左—537頁右)

66・黄易によって書かれた、二つ以上の記述の中で、汪雪疆の価値ある所有物の、黄易の入手は、一七九一年——武宅山における「発見」の五年後のこととされている。人はただ、それぞれ異なる同時代の記述にお

ける、そのような不一致の生じた理由について、思いを凝らすことが出来るだけである。

67・黄易が「同じ日」(一旦)に、かつて汪雪疆により所有されていた拓本のセットを入手し、そして、武宅山において、武氏一族全体の複合体を突き止めたという、翁方綱のドラマチックな説明は、誇張に違いない。翁方綱「黄秋盦(伝)」、復初齋文集、巻13、7頁参照。馬曰璐の一七七二年の奥付は、彼等がより広い流通を楽しめるように、唐及び、宋拓への良い眼を持つ古物蒐集家の汪雪疆に、彼が十四葉の拓本を与えたかと思つたと述べている。面白いことに、黄易による最後の奥付は、汪雪疆は始め、その申し出を礼儀正しく丁寧に断つたが、しかし、黄易が汪にそれを受け取るよう、強く迫つたことを、我々に教えている。

68・人は、唐拓の価値のその低下を、過大に評価してはならない。それにも関わらず、容庚『漢武梁祠(画像考釈)』3b頁によれば、黄易の発見の約五年後、一七九一年の終わりに、そのとき拓本のセットを所持していた、済寧の路氏に六百金が申し出られ——そして、断られた。

69・王昶、金石萃編、巻8、par.20を参照せよ。

70・宋の専門家に知られた武梁の拓本における、判読

し難い約七十余りの文字は、黄易には判読出来た。科学的発掘の含意するものを、正しく理解している者が驚愕したことには、彼の発見は、中国において現在屢々間違つて、最初の「科学的発掘」と呼ばれる。最初の発見の資料(総計で約三十一枚の石板)は、古物蒐集の当局者としての平素のやり方で、黄易によって集められた。即ち、田舎者が見本の拓本を持つて、黄易の所へやって来る、そして、黄がそれらの拓本に関心を示す、というやり方だった。彼自身の報告により、黄は一箇月ほど後に、彼自身のために遺跡を見、そして、地元民から情報を集めるために、近所を訪れた。第二回の発見は、一七八九年になされたが、その折、黄は、その地域の四、五人の指導的メンバーと共同で、拓本作りをさらに容易にすべく、石を保存するための保存館を建てようと決心した。黄自身による、発見の説明は幾らか変化しており、そして、最初の発見に関する、彼の最初の報告は、たっぷり一年後に書かれた〔後略〕。

71・王昶、金石萃編、巻8、par.20(557頁)

まず黄易が汪雪疆の唐拓を入手した年時について、女史は強い疑問を提示している。即ち、女史は本文及び、注66、67において、次のように言う。

一七八六年八月に、黄易は、彼が直ちに武氏祠の「原石」と認定した発見を報告した。⁶⁶それから後の或る時——「日付の」記述は、「同じ日」のように短い時、または、五年後の一七九一年のように長い時と変化している——「中略」唐拓は、黄易の所有に帰した。⁶⁷

66・黄易によって書かれた、二つ以上の記述の中で、汪雪疆の価値ある所有物の、黄易の入手は、一七九一年——武宅山における「発見」の五年後のこととされている。人はただ、それぞれ異なる同時代の記述における、そのような不一致の生じた理由について、思いを凝らすことが出来るだけである。

67・黄易が「同じ日」(一旦)に、かつて汪雪疆により所有されていた拓本のセットを入手し、そして、武宅山において、武氏一族全体の複合体を突き止めたという、翁方綱のドラマチックな説明は、誇張に違いない。翁方綱「黄秋盦〔伝〕」、復初齋文集、巻13、7頁参照

女史は、黄易の唐拓の入手年時として、武氏祠の発見時(一七八六年)と、その五年後の一七九一年との二通りが考えられる、と主張するのである。換言すれば、その入手時期に関して、歴史的な誤魔化しがなされたということ

あろう。そのようなことが本当にあつたのであろうか。

さて、黄易が唐拓を汪雪疆の弟、隣初から譲られた時期は、小蓬萊閣金石文字における、例えば唐拓の最後の識語末尾に、黄易自身が、

至辛亥正月、歸於易也

と記しているので(辛亥は、乾隆五十六へ一七九一年)、一七九一年一月であつたことが間違いない。にも関わらず、女史の言う、その五年前などという説は、一体何処から出て来たのであろうか。その答えは、注67に上げられた、復初齋文集十三所収の「黄秋盦伝」にあるようだ。今、その該当部分(6丁裏、7丁表)を示せば、次の通りである。

君在_三濟寧_一升_三起鄭季宣全碑_一、於_三曲阜_一得_三熹平二年殘碑_一、於_三嘉祥之紫雲山_一得_三武斑碑武梁祠堂石室画像_一。適揚州汪氏所_レ藏古拓武梁像冊_三君齋_一。此冊、自_三竹垞_一衍齋_三查田_一諸老輩、往復鑑賞、幾疑_三世久無_一此石_一矣。一旦君乃兼_二得_一之_一

右記「黄秋盦伝」は、黄易の没後間もない嘉慶七(一八〇二)年六月に、翁方綱によって書かれたものである(竹垞、衍齋は、それぞれ朱彝尊、馬思贊の号、查田は、查慎行の別署)。右の本文には、黄易が武梁画像などを発見したところ、唐拓を得たことが続いて記され、また、それを受ける形で傍線部、

一旦君乃兼_二得_一之

と結ばれているが、注67を見ると、

黄易が「同じ日」(一旦)に、かつて汪雪疆により所有されていた拓本のセットを入手し、そして、武宅山において、武氏一族全体の複合体を突き止めたという翁方綱のドラマチックな説明は、誇張に違いない。翁方綱「黄秋盦〔伝〕」、復初齋文集、巻13、7頁参照

とある所から、女史は、傍線部中の「一旦」を、「同じ日」の意味に解釈していることが分かる。そして、「同じ日」というのは、武氏祠を発見した(一七八六年)のと「同じ日」なので、女史は、黄易の唐拓入手の時期が一七八六年、「または、五年後の一七九一年……と変化している」と非難している訳である。しかし、傍線部中の「一旦」は、「同じ日」の意味ではない。一旦は、或る日俄に、という意味であって、右記傍線部は、「或る日俄に君(黄易)は、正しく武氏祠原石と唐拓との両方を、二つながら我が物とすることになった」ということである。女史は、その「一旦」を誤読したのである。しかし、読者が注意すべき、女史の問題は、例によって単なる「一旦」の誤読にあるのではなく、女史自らの誤読の結果を、

人はただ、それぞれ異なる同時代の記述における、そのような不一致の生じた理由について、思いを凝らす

ことが出来るだけである(注66)

などと一般化し、それを黄易批判へと転じる、女史の論法にあることは前掲、洪适批判の批評においても、指摘したことがある。無論、翁方綱、黄易にとっては、唐拓入手時期の誤魔化しなど、身に覚えのない難癖を付けられるに等しく、不名誉この上ないことであって、女史の罪は大きいとしなければならぬが、一面、誤読の結果を嘆く女史の姿は、恰も己れの影に怯えるに似、何処かしら滑稽でさえある。なお女史が、

……画像石の上に見付けた榜題の、黄易自身による手書き複写を、黄易が汪雪疆の弟、汪隣初に贈ったことに対するお返しとしてか、唐拓は、黄易の所有に帰した

と述べていることにも、事実誤認があつて、黄易が贈ったものは拓本であり、その相手は弟の汪隣初ではなく、汪雪疆本人である(小蓬萊閣金石文字の黄易による乾隆五十六へ一七九一〇年の識語に、「亟揚_二全文_一、以寄_二雪疆_一」と見える)。

また、細かいことながら、注68における次の文にも、年紀の非道い間違いがある。

容庚『漢武梁祠〔画像考釈〕』3b頁によれば、黄易の発見の約五年後、一七九一年の終わりに、そのとき

拓本のセットを所持していた、済寧の路氏に六百金が生し出られ——そして、断られた

一七九一年というのは、前述のように、黄易が唐拓を入手した年であつて、その時に済寧の路氏がそれを所持している筈がない。このことは、容庚の引く清、方朔の枕経堂书画跋二(33丁裏)に、

若唐揚原冊、聞在済寧南門大街路氏。甲寅乙卯、有人以三百金購獻上宮、而路氏仍不出售

と見え、甲寅は、咸豐四年なので、一八五四年のこととすべきである。女史は、容庚書を誤読したのである。

さて、黄易による武氏祠発見の経緯を説明する、女史の次の文章は、それがもし事実であるならば、女史の主張する偽刻の明徴ともなり得る点、軽々に見過越せない内容をもっている。そのため、きちんとした批評が、是非とも必要な一例と言えよう。

黄易は、彼が一七八六年に発見した石と、隸統を通じて知られる挿絵とを比較して、彼の石は、ほんの二、三の場面を欠くだけだと報告した(隸統の四庫全書写本版における巻6/9 a-b)。正にそれらの場面を持つ石板は、一七八九年に黄易により報告された、第二回目の発見の巡視において、直ちに搜し出された

女史が、「……彼の石は、ほんの二、三の場面を欠くだけ

だと報告した」と言うのは、小蓬萊閣金石文字における、乾隆五十六(一七九一)年十月の黄易の識語に基づくものである。その該当部分の本文を示せば、次の通りである。

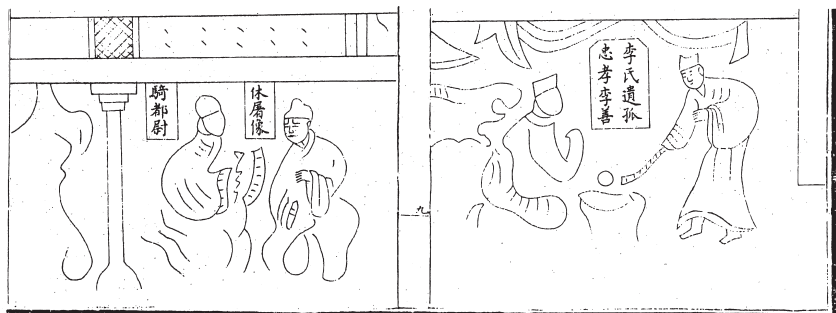
丙午八月、易於嘉祥紫雲山得祠像原石。較洪氏隸統所図、僅欠休屠像李氏遺孤忠孝李善等字、余文悉備

右の本文を見ると、女史の言う、「ほんの二、三の場面を欠く」が、隸統六における「休屠像」「李氏遺孤、忠孝李善」という、三つの榜題に相当する場面を、指すものであることが分かる。それは、武梁祠第三石二層の左方に描かれた27李善、28金日磾の両図のことで(図二、表一)、前掲表六の27、28に見える四つの榜題の内、三つに当たるものである。図十は、隸統六と原石における両図を示したもので(上、中は、隸統の四庫本、汪日秀本、下は、原石(馬衡版)、原石は、黄易が、

僅欠休屠像李氏遺孤忠孝李善等字

と言う通り、その部分の大きく欠落していることが知られる。ところが、女史は、武梁祠第三石二層左にある、その欠落部分が出現したと言っている。即ち、

正にそれらの場面を持つ石板は、一七八九年に黄易により報告された、第二回目の発見の巡視において、直ちに搜し出された



(四庫本隸統)



(汪日秀本隸統)



(原石)

図十 隸統、原石の李善、金日碑図

と明言しているのである。女史の言うことがもし本当ならば、黄易によるその偽刻、再刻の疑いは、この上なく信憑性を増すことになる。ならば、一七八九年における、黄易の「第二回目の発見の巡視」とは、一体どのようなものであったのか。その具体的な内容は、例えば嘉慶二（一七九七）年刊行の山左金石志七、東漢石、武氏左右室画像十石に、

右武氏左右室画像十石、乾隆己酉秋、李鉄橋等平治祠基二時所得

とあることなどから、知ることが出来る（乾隆己酉は、乾隆五十四（一七八九）年）。山左金石志によれば、それは「黄易により報告された、第二回目の発見の巡視」などという、計画的なものではなく、李鉄橋等が保存館建設に向けた基礎工事中、新たに十石を掘り出したことなのである。そして、その十石は、従来左右室（武班祠）のものとされて来たことも、非常にはつきりしており、その中には、女史の言う、「正にそれらの場面を持つ石板」つまり、武梁祠第三石二層左方の欠落部などは含まれていない。即ち、

正にそれらの場面を持つ石板は、一七八九年に黄易により報告された、第二回目の発見の巡視において、直ちに捜し出された

などという事実は、全く存在しないのである。また、第三石におけるその欠落部分は、漢代孝子伝図の研究上、極めて重要なものながら、現在もお見出だされていない。それにしても、どうして女史は、このように出鱈目な主張を繰り返すのか。一つ明らかなのは、例えば女史が、一七八九年の「第二回目の発見の巡視において、直ちに捜し出された」「石板」の内容——左右室（武班祠）の十石のことを、全然理解していないことである。もし女史がそれを理解していたら、こんな無茶な主張はしなかった筈だ。そう言えば、先の唐拓の流伝をめぐる一七八五年刊、小蓬萊閣金石文字（四種本）についても、女史は、そこに収録された四種の石刻の内容——一七八六年に発見された、武班碑や武氏祠祥瑞図題字などが含まれていることを、全く理解していなかった。およそ学問的に問題とすべき、殆ど全ての女史の主張の立脚点には、その博搜振りにも関わらず、武氏祠研究史に関する、様々な基礎的知識の欠落が、ほぼ例外なく認められる。だからこそ、読者が女史の主張を鵜呑みにすることは、大変な危険を伴う。それとも、女史は、それぞれの事柄を、全て理解していたのであろうか。知っていないながら、戦略的に読者を侮って、それらを無視したのであろうか（例えば一七八六年、八九年に発見された石板の総数は四十一枚だが、女史は、注70において八六年のそ

れを、「総計で約三十一枚の石板」と正しく数えているなど。

また、注70冒頭に見える黄易批判も、やはり数字をめぐめるものである。

70・宋の専門家に知られた武梁の拓本における、判読し難い約七十余りの文字は、黄易には判読出来た。科学的発掘の含意するものを、正しく理解している者が驚愕したことには、彼の発見は、中国において現在屢々間違つて、最初の「科学的発掘」と呼ばれる

女史が批判するのは、原石の出現により、洪适の著作などで知られていた、武梁画像の榜題、題記の文字情報が、格段に充実したことである。そのこと自体は、版刻などの制約をもち、時の風雨に曝された、飽くまで二次資料に過ぎない版本情報に比して、原石のそれが優れていることの証であり、何ら批判すべきことではない。それが批判の対象となり得るのは、女史が何よりもまず、黄易による偽刻を前提とするからであらう。そして、原石発見とその前後の翁方綱、黄易の高度な考证学に裏付けられた足跡こそは、正しく「最初の「科学的発掘」と呼ばれて差支えないもの」と言えよう。故に、「科学的発掘の含意するものを、正しく理解している者」というのは、女史のことであり、「驚愕した」のも、女史自身に外ならないが、女史の言う

「科学的発掘」は、偽刻を前提とする点で、私の言うそれとは決定的に異なっている。そのような女史に、そもそも「科学的 scientific」という言葉を使つて、黄易を批判する資格があるのだろうか。例えば注70の「約七十余りの文字」という数字は、一体何処から出て来たのだろう。女史はその根拠を示さないで、確実なことは言えないが、その出所は、おそらく金石萃編二十所引山左金石志の、

且較之洪氏所録、又增補七十余字

辺りであろうと思われる。一方、確かなことは、女史自身がその数字を数えていないことだ。何故なら、女史は「黄易には判読出来た」と言うが、黄易は、

洪积共四百三十字。今拓本共五百七字。計多出七十七字

と記しているからであり、また、その根拠も詳細に述べている（小蓬萊閣金石文字）。文字を数えることは、極めて単純な作業だが、その分、実に厄介な面がある。その一つが、数え方によつて、結果が大きく変わることである。例えば容庚は、隸积に較べて原石が八十四字多いとしている（漢武梁祠画像考釈）八、38丁表参照）。また、表四により数えてみると、原石は隸积より九十九字多い（汪日秀本にあるものは数えない）。比較するもの、されるものの二つが明示されず、両者の比較の結果さえ確定しない女史の

数値の、何処が科学的と言えるのであろうか。さて、女史は、女史自身を「科学的発掘の含意するものを、正しく理解している者」と自負しているが、女史の言う、「科学的発掘の含意するもの」とは、何を意味しているのであろうか。そのことを含め、最後に、III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidenceのみならず、ニラン論文全体に互る、女史の武氏祠研究の特徴に触れて、偽刻説が導かれる経緯を批評することで、小稿の結びとしたい（なお注71の王昶のことは、注15の所で述べた）。

十

I. Introduction の518頁左—518頁右に、女史の武氏祠研究の特徴をよく示す文章がある。

石碑の碑文を再刻する時、引用句——ひよつとしたら源泉から分離したかもしれない〔引用句〕——を合成することによって、摸倣者は、より「完全な」、並びに、得心のゆく記録を作り出した。そして、それは以後、第一の原典と評価され得たのである。（中略）「空白を埋めること」に加え、もう一つの等しくありふれた慣習もまた、最後の誤解を生み出した。即ち、そのような認証が正しいことはあり得ないにも関わらず、発見を一層古い伝統の「痕跡」と認定する傾向が。そ

の上、特にこれ等の遺跡の名声が高まった時、それらのより早い存在を証明する、遺跡のための石碑を製作する傾向もあった。³⁸ 最悪の場合、全く存在したことの無い過去にとつて一見、疑問の余地のない証拠を提供するために、或る人為的な記録が作り出された。そして、それは今度は、偽りの学識から成る、どうしようもない迷宮を、多量に生み出した。³⁹（518頁左—518頁右）

38・〔略〕

39・〔略〕

右の文章を読むと、中国における宋代以来の金石学また、清朝の考証学（乾嘉学派）を、女史がどのように捉えているか、ということがよく理解出来ると同時に、女史の武氏祠研究の特徴を掴むことも出来る。右の文章から、それを特徴付けるものとして、例えば二つのキーワードが取り出せよう。その一つは、再刻 recarving という概念である（小稿では、より分かり易い偽刻の語を用いた）。もう一つが、補闕（空白を埋めること）という概念である。また、少し前の文章で（517頁右18行目—）、補闕について、女史は、

実際に、あからさまな偽造に加えて、文学的、芸術的な所産における、「空白を埋める」（補闕）という、極

めて注目すべき、中国の伝統が存在している

とも述べており、この二つの密接な関係にあることが、より明瞭に説明されている。実際、その二つの関係は、補闕が出発点にあり、再刻（偽刻、偽造）へと進化したものと考えられる。そして、女史の武氏祠研究の特徴は、武氏祠の成り立ちを、補闕と再刻の歴史と捉え、それら二つを前提にして、武氏祠を見ていることにあると思われる。しかし、そのような武氏祠の捉え方は、極めて特異なものであって、その女史の捉え方を、学問的と呼ぶことは出来ない点に、読者は注意する必要があるだろう。何故なら、学問的に見た武氏祠は、決して補闕や再刻を前提として、成立している訳ではないからだ。そして、ア・プリオリにその二つを前提とする、女史の見方は、むしろイデオロギーと呼ぶべきものと思われる。それは、女史の信条ではあり得ても、学問や研究に分類されることはない。

女史の研究を特徴付ける二つの概念の内、殊に再刻（偽刻）の方は、学問的に扱うことが非常に難しい。再刻（偽刻）の概念は、オリジナルとの関係において、コンプレックス、価値判断、評価などを内包しており、その部分から、無意識裏に侮蔑や悪意等の個人感情の介入を招き易い。前稿また、小稿において、私達は洪适、黄易などが、女史の侮蔑、悪意に曝される例を、屢々目撃した。学問、

研究の立場からそれらを眺めるのは、大変奇妙な体験と感じるものだが、イデオロギーに奉仕する女史からすれば、単に使命に駆られただけのことだろう。

蟹は自らの形に似せて穴を掘るし、文章がその書き手を裏切ることはない。女史は、武氏祠が再刻されたものだと言っているが、では、“Recarving China's Past”の書名の下で、武氏祠の歴史を再刻したのは、一体誰であったのか。そして、言わば女史の再刻に掛るその歴史が、如何に事実から遠くまた、非学問的なものであるか、ということに関しては、これまで、ニラン論文の、

II. Stele Summary

III. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidence

を通じ、具体的に述べて来た如くである。また、専ら武梁画像を扱うIII. The Wu Liang Pictorial Stones: The Literary Evidenceを、批評の対象とする小稿においては、仄めかしその他の婉曲話法に終止する、女史の主張に少しアクセントを添えて、八つのそれに纏めることにした。今それを通覧すると、私達は、洪适による武梁碑文、武梁画像の偽造を皮切りに、朱彝尊、翁方綱、黄易などによる補闕或いは、再刻（偽造）の果てしない連鎖を、目にするところになる。ところが、それら八つの女史の主張全体を、私

達が一つの主張として論理的に把握することは、全く不可能である。女史の主張のそれぞれが、私達にとって非常に理解しにくく且つ、事実と反していることは、小稿で確認した通りだが、その全体もまた、学問的な理解の限界を遙かに越えたものとなっている。その意味で、ニラン論文はむしろ、武氏祠の再刻をテーマとする、小説に分類すべきものである。上掲の文章末尾に、女史による武氏祠の再刻について、女史自身が見事に物語っている部分がある。

最悪の場合、全く存在したことの無い過去にとって一見、疑問の余地のない証拠を提供するために、或る人為的な記録が作り出された。そして、それは今度は、偽りの学識から成る、どうしようもない迷宮を、多量に生み出した

私達は、その迷宮で迷うことがないように、心しなければならぬ。

付記 小稿は、同題の前稿（拙著『孝子伝図の研究』

汲古書院 平成19年〈1997〉121。初出は、『京都語文』12及び、『総合人間学叢書』3）を受けるものだが、紙幅の関係から、今回はニラン論文の英文原文の掲出を省いた。小稿と深く関わる、重要な研究として、Qianshen Bai（白謙慎）氏による“‘The Intellectual Legacy of Huang Yi and His Friends: Reflections on some Issues Raised by *Recarving China's Past*’ (Rethinking *Recarving: Ideals, Practices, and Problems of the “Wu Family Shrines” and Han China 所収’ Princeton Art Museum, 2008) があり（邦訳版：白謙慎氏『黄易とその友人達の残した知的遺産—*Recarving China's Past*の提起した諸問題への反論—黒田彰子、坪井直子、中村直美訳、『海外の幼学研究』1、幼学の会、平成20年）、是非参照されたい。また、旧稿「武氏祠画像石は偽刻か—Michael Nyilan “Ad-dicted to Antiquity” への反論—」（前掲拙著121付初出『説話文学研究』42）は、小稿と同じ問題を、全く別の角度から取り上げたもので、併読を乞う。私の英語力の不足から、ニラン論文を誤読しているかもしれない。女史の海容を乞いたい。*